
すいえいぶっ！

加熱扇風機

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すいえいぶっ！

【Nコード】

N2867V

【作者名】

加熱扇風機

【あらすじ】

お金持ちの通うお嬢様の楽園。私立ルリビタキ女子高等学園。設立から5年のこの学園。

学園内の風紀や気質も出来たばかりのこの学校は、お金持ち独特の高貴な雰囲気流れる、独特な状態になっている。

そんなお金持ちの通う学園に、実に貧乏な女子が2人組いた。

舵守 茜。両親と4人の兄の家族の中で、唯一女の子な末っ子。

家は漁師で決して豊かな家庭でもない。

もう一人は栗島 林。3人家族の一人っ子。養蜂場を営む、細々

とした家庭の子。

そんな貧乏臭を放つ彼女たちは、お金持ちのお嬢様たちから毛嫌いされ、学園内で孤立した存在だった。

そんな2人は互いに支え合い、学園生活を戦い抜く、良き友になっ
ていた。

数ある問題を起こしながら、やっとの事で2人は2年生の新学期を迎えるその日。彼女たちの学園生活は大きく変わっていくことになる……。

茜が突然言い出した、水泳部を造る。

その茜の行動が、高飛車で傲慢鬼畜だったお嬢様たちを変えていく切っ掛けとなっていく。

乙女だけの時間、男子禁制の楽園。

規則、気品に拘るシビアな学園に、嵐を巻き起こす2人の風雲女子が暴れまくるドタバタなスクールライフ。

青春はあるものを作っていく事じゃなく、自分たちで造っていく物。

彼女たちの花咲く青春は、水泳部と共に歩み始める。

造ろっ！水泳部っ！ 1 (前書き)

多少、女の子同士がいちゃつてますが、ラブには絶対になりませんので、安心してお読みください。
スキンシップです。

造ろっつ！水泳部っ！　　ゝ　　1　　ゝ

造ろっつ！水泳部っ！

ゝ　　1　　ゝ

4月2日。若き命達の新しい生活が始まる日。

何処の学校も入学式や始業式が行われ、新しい出会いや生活に期待に満ち溢れ、青春に輝く学生が至る所に見かける。

此処、神奈川県の大和市林間にある私立ルリビタキ女子高等学園も始業式が行われる。

女子高等学園と言うただけあつて、男子禁制の美しく華のある、花の香りが漂う乙女だけの学園である。

だがその華やかさは他の普通の女子校とは違った。

それは全員がお金持ちのお嬢様達に通う、お金持ちな女子園だからだった。

お嬢様達のファッションは制服着用義務以外は自由化されている為、付けているアクセサリーや宝石、髪型やお化粧などでもはや子供の面影され見受けられない女子達も多く見かける程である。中には親と間違えてしまうくらいの人だっている。

正門にはこの学園のシンボルであるルリビタキと言う鳥が彫刻されている。そのアーチの門も金色に輝いていて眩しい。

そしてその門をベンツなどの高級車で登下校する者だつて少ない。

学園の庭には真つ白で大きな全てが大理石で出来た噴水がある。水が弾けて滴が舞い、波打つ水面と一緒にたつて太陽の輝きに光輝く不思議な空間を生んでいる。

丁寧に整えられた植木と芝生も、触ったり踏む事すら許されない様な気品を漂わせている。

何処を見てもパーフェクトなお金持ちですオーラを漂わせた広大な土地を保有している学園である。

そしてこの学園はまだ設立して5年の新学校である為、所々がまだ新しい建物が多かった。

「いや、2年生だねえ。あの1年間の学生生活、なんとか乗り切ったねえ」

そんなお金持ちに似合わない間の抜けた声が正門から聞こえて来た。その声の持ち主は、金の鳥が見張るアーチの門を抜けようとしている。

門にいるガードマンに早速止められるかと思えば、その女の子はガードマンに挨拶をした。

「おはようございます。花粉症は辛いですけど、頑張ってください！今年もよろしくお願いします」

そう言つてペコつとお辞儀する。

「おはようございます。御苦労さまです」

挨拶をする女の子の隣にいる自転車を押して歩く女の子も、簡単にガードマンに挨拶をした。

ガードマンも笑顔で女の子達に挨拶を返してくれる。そして鼻をすすって、再び周囲を見回し始めた。もうそのガードマンは花粉症で鼻の先が真っ赤になっていた。

女の子2人は門を抜けていく。

学園の制服以外は全くお金持ちのオーラが漂っていない、一般人丸出しな女の子達は尚も間抜けた声を発しながら歩いて行く。

「花粉症か……。私の家では花粉症になっている人は一人もいないな。まあ、蜂から花粉を扱っている物だから、体質的に強いのかも」
「林んちのハチミツを食べてからか、父ちゃんやアニキ達の花粉症もなんか良くなって行ってるんだよねえ。ハチミツって凄くない？」
周りにいたお金持ちなお嬢様達は、そんな彼女達を見て避けている。

最初に明るい声で挨拶をした女の子は、褐色肌かじもりの舵守あかね茜。

見た目からも分かるがお金持ちの家ではない。藤沢市の江ノ島で漁師を営んでいる家庭で、4人の兄のいる末っ子。舵守家の唯一の女の子である。

その茶髪の短めのポニーテールは海の潮風に吹かれて育った為にちよつとぼさつと跳ねている癖っ毛。でも元気いっぱいですと言わんばかりの笑顔を振りまく彼女に、とても活気に見えて似合っている。

その隣に居る茜の友達は栗島^{くりしま} 林^{はやし}。

ふわつとしたショートボブの黒髪。顔つきは凜とした目と鼻、口をしているのだが、どうもやる気オーラが感じてない雰囲気を持ちだしている女の子だった。

林もまたお金持ちとは言えな大和市の下鶴間で養蜂を営んでいる家である。一人っ子で自由気ままな性格な子である。

茜と林は1年の時に一緒にクラスになって以来、意気投合しているとも一緒にいる。

周りがお嬢様ばかりな処だから、彼女達は必然的に惹かれあう存在になったのだろう。

貧乏オーラで、気品の無い彼女達は周りからは毛嫌いされている。他に友達を作ろうにも、周りから避けられているのでそんなに出来ないのだった。

だから彼女達はこの場を乗り切る為に互いに欠かせない存在になっている。

「ああ、でも今年はアタシ、せっかく推薦で特待生で入ったのに取り消されちゃたじゃん。その為に今回の学費免除も無効になっちゃって、お金一杯かかったよ。これをなんとかしないとなあ。今は卒業後払いつて事で通していけるけど、あんまり今の内から多額なローン組みたくないよ」

茜はくたあゝと猫背になってトボトボ歩く。

この学園では、例えば裕福な家庭で無くても才能ある人物には学費免除優遇制度の特待生入試を設けている。

此処の学園へ2人は特待生で入っている。茜はスポーツ方面での特待生入試で入った。そして林は学業方面で入っている。

「去年は色々と部活をやったのにね。まあ、成果を残してないから仕方ないんだろうけどさ……。けど、茜の才能を発揮できる部活が全くこの学園に無いのも、此処の問題なんだけどさ。茜は此処の学校より、運動系の専門学校に行った方がよかつたんじゃない？」

その林の言葉に、茜は首をブンブン振って否定する。

「ダメだよ。取り合えず此処に入った目的であつたアタシの男勝りな性格は直せたって成果はでたもん。スポーツ系の学校に進んでたら、アタシはずっと男女だつたかもよ」

「まあ……。最初に出会つた頃と見違える程に変わったよね。時雨も同じ様に入つたつていつてたけど、あつちは全く変わつてないつてのにさ」

茜は舌をペロツとだしておどける。

「それにね。後悔は全くしてないよ。此処に来て、林達のような素敵な友達とも出会えたんだもの。環境が悪く立つて、得られた物はとても大切な物ばかりだつたよ」

「茜……。ありがとうね。私も当初は此処は家から近いのと食堂の料理が安くて美味いと言う理由だけで来て、此処の環境がこれ程最悪だつた事を後悔していたんだ。でも、茜達が居てくれたから私は此処で辛くても面白くやつていける。私も茜に出会えてよかったよ」
「えへへっ」

茜と林は両手を手にとって縦横に振る。

林は学園内の駐輪場の指定場所に自転車を駐輪した。他にも自転車が並んではいるが、どれも学生が使つてゐる物ではなさそうで、全て職員の人達が載つて来た自転車だろう。

「あ、そうだ。茜さ。ちよつとこつちの方をよつて行こつよ。」

林が何かを思い出して、茜に行きたい方向へ指を刺す。

茜はその先に振り向いて、目を輝かせた。

「ん？ あっ！ あの新しく出来たプール施設。春休み中に出来た

んだっけ？」

晴天の空の下、太陽の光を反射する真新しい建物が、俺は此処にいるぜと主張している。

外見は室内プールの様である。天井はガラスの屋根で、開放する事も可能な構造をしている。

その施設の一角には専用の庭園があるらしく、外見からは中が見えない様に植林されていた。

「そうそう。お金持ちが作ったお金持ちの入るプールだよ。どんなものなんだろうね。私達も此処の学生だし、そこを使えるんだから見ておかなきゃ」

「そうだね！ いこいこっ！」

そう言って茜達は歩く方向を校舎からそのプール施設へと変える。「どんなプールだろうね？」

茜がポワポワと妄想の中のプールを思い浮かべている。

「お金持ちのお嬢様のプールだもの。金銀宝石の装飾をされていて、人魚が壺を抱えた銅像から水の滝が流れているのさ。きっとね」

「すごいっ！ なら絶対に流れるプールと波の起こるプールはあるよねっ！」

林の言葉に茜は期待に胸が高鳴り、目が輝いている。

「それもあるよ絶対にっ！ そしてジャグジー付のプールなんかもあー、アレにブクブクと使っていたいわあ……」

林も肩がこるようなしぐさをして、そのジャグジーがあることを祈っている。

「後、サウナとかもあるよね」

「あるよねえ。そうしたら、ダイエットにガンガンしぼりとろっじやない。どっちが長く入っていられるか、茜。勝負しようか？」

「よーしっ！ 負けないからね林っ！それで、何かけよっか？」

「そりゃあサウナから出た後だもの。牛乳シリーズがいいよね。しつかりサウナでしぼったら、キュッと一杯！一杯奢りでどうよ？」

「いいねえっ♪ アタシはフルーツ牛乳だよ」

「私はコーヒー牛乳でね」

そんな他愛のない会話を続けながら、まだあるとも知らない施設に期待を膨らませて、2人の足並みが早まったのだった。

施設の入り口の管理人に挨拶をして、途中で靴と靴下を脱いで入っていく。

更衣室の横を通り過ぎて、プールへと向かった。

そして茜と林はプールへのドアを開放する。そして目の前には茜達の待望のプールが広がった……が。

「あれえ？」

「あらまつ？」

目の前に現れたプールは、なんとも何処にでもあるプールだった。全長50メートル、普通の学校でも見るプールと何ら変わりがないプールだった。ただラインは12本もあるので、競技用プールに近い施設である。

茜と林は互いに顔を見合わせて目が点となっている。

「ねえ、流れるプールは何処？ 波が起こるプールとかは」

「ジャグジー付のプールとか、サウナとか……。何処にもないぞ！

あつ、プールに薔薇が巻かれているとかは……ない……ね」

自分達が此処まで来るのにアレがあるコレがあると言った物は、何処にも見られない。

金銀、宝石さえ見当たらず、お金持ちと思える部分は何処にもない。完全に水泳競技用のプールであった。

他にも茜達のように興味を持って見に来たお嬢様達もそこに居て、この現状に不満の声を上げて話している。

茜はプールに近寄って、指先でプールにピチョンと指を付ける。

その指先からプールに波紋がゆっくりと広がり、やがてゆっくりと静かに消えていく。

「ねえ……茜……」

茜がプルプルと震えている。林が茜の肩に手を置いて話しかけよ

うとした時、茜が突然立ち上がり、叫びあげた。

「わあゝんっ！ 何これゝっ！ お金持ちのお嬢様っぽくないゝっ！
！ こんなのアタシの小学校と中学校にもあったよゝっ！」

茜は現状に不満全快で腕をブンブン振って抗議の声を上げた。

「いいね……。私は小学校にはあったけど、中学校にはなかったよ」
林は茜の学校のプール事情を聴いて、ちょっと羨ましくなる。

しばらくギャンギャン騒ぐと、茜ははっと気がついたように林に振り向いてきた。

「あつ、そうだよっ！ きつとこの部屋は競技用のプールを置いてあるところなんだよっ！ 別の処いけば流れるプール専用とか、波の起こるプール専用の部屋があるんだよ！」

その言葉に林もあつ、そっかと手をポンと叩いた。

「あ、そうよね。お金持ちのプールだし。ここだけ造るなんて野暮な事言わず、この場所以外にも10箇所も20箇所も造ってるよね」
「じゃあ、違う処いこ」

茜達はさっさと出て行こうとプールに背を向けた。

「その必要はありませんわよ」

振り返った茜達の前に、お金持ちですわ、と言わんばかりの胸元まで伸びたレイヤードロングなつやつやの金髪お嬢様が立ち塞がっていた。

「あ、千鶴じゃん。おはよ」

「あ、ちづるっち！ おひさゝのおっはよゝ」

そんなお嬢様に茜達は気さくに元気に挨拶をした。

だが、そのお嬢様はそんな茜の方の態度に機嫌を損ねたのか、眉を吊り上げて怒り始めた。

「茜さんっ！ 何度言えばワタクシの名前に『ゝっち』を付けずにお呼びなさいと言わせる気ですかっ！」

ちづるっちと言われたお嬢様はそうヒステリーに怒りだした。

「ちえ、千鶴。おっはー……」

茜はしょぼんとテンション下がりながら改めて挨拶をする。

「2年生にもなつても、2人は相変わらずねえ」

そう言つて林が二人の遣り取りに笑つた。

ちづるあまがさきつちと呼ばれた金髪のお嬢様は天ヶ崎ちづる千鶴。

もちろんお金持ちだが、損所そこらのお金持ちのお嬢様とは違う。世界のお金持ちの社長の娘である。

日本はもちろん、世界各地に何百店舗も構える高級ブランド和服衣装の『鶴ノ舞』を経営する社長の一人娘である。

創業400年に涉、日本を代表し、日本人で知らない人はいないと言われる程の貫禄と威厳のある会社である。

そんなご令嬢である千鶴は、幼いころからの英才教育により、1学年総合成績では2位になつた凄なお嬢様でもある。

そして家柄が全国的に有名である為に、テレビにも何度も出ていた。その容姿の美しさや個性などがウケたのもあるが、最近千鶴の隠れた才能であつた演技力の高さにドラマや映画などにもよく出演するようになった。

テレビ映りも良いし、千鶴が居るだけで花になるので、テレビ業界から引つ張りだになり、今やアイドル状態だつた。

そんな千鶴には学園内で追っかけの千鶴ファンクラブが出来ていて、会員が何百人もいたりする。

「それでいいですわ。今後、名前は間違えの無い様をお願い致しますわ」

もうこのパターンが何度目にもなっているので、ずっと怒つていてもきりがないと知つている千鶴は、早々に落ち着く。

茜達と千鶴は1年生の時に一緒のクラスになった。

千鶴は生徒会員の一員で、規則や風紀には厳しい方である。

茜と林が学園の風紀に似合わない行動や、茜がこの学園で起こした数々のトラブルなどで、何度も注意をした間柄である。

そして今の千鶴は2人いる中の一人の生徒会副会長の座に就いている。その為、気合の入りようは以前より相当増している様だつた。「で、必要は無いってどうしてよ？もしかして千鶴は此処を全部

回ってみたの？」

林が先ほどの千鶴の言葉に質問する。

「ええ、見て回ってみましたわ。ワタクシも何があるのか少々気になったので……。此处に残りは、シャワー室、更衣室、トイレに何故か判りませんが簡単な調理室。あつ、後は鍵が掛かって中は見ていませんが、施設の管理人に聞いた処、仮眠室の様ですわ」

「んー……。本当に普通に競技用の施設ね。これじゃあ……」

「はあ。なんだあ。遊べるんだと思つたのに……」

茜も林も千鶴の言葉を聞いてガツカリする。

「まあ、そうですね。普通と違う処は、あの場所の庭園でしょう。アレだけは普通にあるプール施設の一角とは違いますわね」

そう言つて千鶴の目線の先には、太陽がさんと降り注いでいる庭だつた。

赤レンガで敷き詰められた洋風な石畳とパラソルの付けられた木製テーブルとダイニングチェアがある。

青く茂つた芝生の上には海の浜辺でよく見かけるビーチ・チェアが6つ置かれて、外からは中が見られない様に植えられた植林がある。

後、シャワーのノズルが地面からニョキツと生えている。外でもシャワーを浴びる事が出来そうだった。

「確かにあそこだけ、オアシス。って感じね」

「プールで泳いだ後で、あそこで日向ぼっこしたら気持ちよさそうだね。憩いの庭だね」

「ええ、あのリクライニングチェアで体を焼くのもよさそうですね。まあ、最近は美白の方が美しいと言われていますけれどね。紫外線はお肌の天敵ですもの」

茜と林がうつとりとしている。自分達があの場所で燦々と降り注ぐ太陽の下、日光浴している自分達がそこにはいた。2人とも、立派なお嬢様やってますと言わんばかりだった。

「あの場所がかき氷ザックザック食べるのもいいねえ。アタシはイ

チゴ味っ！」

「私は家から八チミツ持つて来てそれ掛けて食べよう」

その発言で一気にお金持ち風な2人の絵が庶民クラスへ転落してしまつた。

「そんな事したら、その庭も価値が下がりますわね。でも、このプールと相性はバッチリですわね。不釣り合いなのはあの庭の方ですわね」

茜と林がその庭とプールを比べる。何この場違いなプールは、と千鶴とは逆にプールの方を悪く思つてしまつた。

「何のために造つたんだろ？今まで遊び場とか憩いの場とかガンガン造つていたのにさ」

「それはやっぱり泳ぎの授業の為に造つたんじゃないの？PTAも遊戯施設ばかりじゃなく、勉学に役立つ物も造れと言われてね」

その林の発言に千鶴は頷いた。

「ええ、その通りですわ。管理人に何故この様になつたのかも聞いておりますの。確かに当初は此処は遊戯施設の様なプールを建設する予定だつたらしいわ。けれど、途中でその様な方針が定まつてあの庭を造つた途中で施設の内容がガラリと変わった様ですの」

「うわー……。あの庭かわいそう……。南無……。南無……。南無……」

そう言つて茜がしみじみと憩いの庭に合唱する。

「じゃあ、そうなるとき。授業に水泳の授業が入るわけ？高校生になつて泳ぎの授業つて何するんだらうね」

「アタシはバタフライまで出来るし、泳ごうと思えば体力尽きるまで泳げるんだよっ！ 着服水泳だつて出来るしっ！ おぼれた人の救済だつて出来るんだからあつ！ だから遊びたいんだよあつ！ 高校生になつて泳ぎの練習とか無いよ全くっ！」

茜が不満だと言わんばかりに自分の主張を発言し始めた。

「クロールまで出来ればいいでしょ。そんなの小学校でもう出来る様になつてゐるって」

林も面倒だと言わんばかりに愚痴を履きだしている。

「そ、そうですわね。今さら泳ぎの練習などと……。腹立たしいことの上ないですわ！ きっとこのプールも使われないだけに終わって干からびて終わりを迎えますわ。ええ、絶対に！」

何か焦っている千鶴がいた。

目はプールをチラチラと何度も見て、微妙にプールから離れる様に横移動している。

「ええー、もつたいない！ せつかくこんなに立派に綺麗な造って置いて、使わずに終わるだなんて……。あのテニスコートもちょっと使って終わってさ。あの野球施設やサッカー施設なんてアタシ達が使っただけで全く使ってないじゃんっ！ あの施設と一緒になるのこれっ！」

茜は昔あった事を思い出して、心底ご立腹しだした。

この学園には確かにテニスコートと野球場とサッカーの施設が設けられている。

だが、お嬢様は基本的に体を激しく動かしたり、筋肉質な事は好んでなかった。

野球やソフトボールは、バットが重いですわ、地面に落ちたボールなど汚らしい、グローブで手が荒れますわ、などで誰もやる気が起きなかった。

サッカーは、走ると疲れる、ボールが当たると痛い、思う様にボールが蹴って飛ばない、ゴールが広すぎて守るのが面倒、などで全くなかった。

テニスは一時期テレビに出た女子選手の活躍がブームになってやっていたが、ハードに動く事であっという間に廃れた。

造られた野球場やサッカー場は、茜と林が遊びに使う以外は使われていないままに、管理体制も雑になって、地面には雑草が生えたり、芝生は伸び切ったままの荒れ放題になっていた。

そうやって無駄に維持費が掛かるだけだからと、あっても必要ない施設は取り壊されている。

茜は取り壊されたお気に入りだったスケート場を思い出した。

氷を張る維持費がバカにならないので、4ヶ月間だけで取り壊しと言っ悲しい末路だった。

それを思い出した茜は怒りを露わに、顔を真っ赤にさせていた。
「うー、こうなったら……。やるっきゃないよねっ！」

茜は闘志を燃やしてプール中に響く声で叫び出した。

「水泳部を造ろうっ！　ちゃんと使う人達が居れば取り壊しはされないんだからっ！」

その大声に周りに居たお嬢様も何事かと茜達に一齐に顔が向いた。

「あ、またやるの？」

「凝りませんわね……」

林と千鶴は呆れたようにため息をついた。茜との温度差が激しかった。

周りにいた茜を知るお嬢様達もまたかと冷ややかな目を送っていた。

この学園に今ある部活動は、花道、茶道、美術や吹奏楽、合唱、文化系の部活はとても豊富にある。

だが、運動系では弓道部とバレエダンス部だけしかなかった。野球部やサッカー部、バスケット部やバレーボール部はもちろん無かった。

その理由が、優雅な暮らしで運動不足なお嬢様たち特有の性格からだった。

汗臭い運動、疲れる運動、爪が割れる運動、怪我する運動、土ぼこりなどを嫌って、体育の授業はもちろんの事、お嬢様なこの学園の生徒は、運動系の部活には力を取り入れてない。

ただ、弓道やダンスバレエなどは、小さい頃のお稽古をやっていたお嬢様がいるので、この部活だけは人数が集まったのだった。

そんな訳で、設立から5年。弓道部とダンスバレエ部以外の運動系の部活が出来ようとする運動も無く、無駄に野球、サッカー施設が放置された状態になっていた。

だが去年、その部活を造ろうと言う運動があった。

その発端は茜であった。体を思いつきり動かしていた茜は、優雅な物腰で行う弓道や体を使って表現するバレエダンスは体に合わず、花道、茶道の文化系だってもちろん駄目だった。

なので、自分で活発に運動できる部活を造ればいいじゃないと言つて、最初は野球部の部員を募集したのだった。

その結果は、林のみ入部希望をしてくれた。

次は女子らしくバレーボール部を募集してみた。

結果、林のみ。次はソフトボール部。以下同文。女子バスケット部を……省略。

一時期はやっていてたテニスに載つてテニス部を設立。林の他、2人が入ったのだが、早々にその2人退部したので、廃部となった。

1年生の時の茜はそんなことをして大騒ぎを起こしたので、茜は今の入学生以外には名が知られた存在になっている。悪い意味で……。

「それじゃ早速、恭子先生きょうしの処に行つて、水泳部に必要な部員数を聞いてこなきゃね。早速会いに行こう。林は、今回も入ってくれるの？」

「そうだねえ。茜の推薦の契約破棄にもなったしね。なんとか茜が活躍する場を設けないと大変だ。協力するよ。それに、久しぶりに茜と共に暴れようじゃないか」

林は面白そうな事が始まる前のワクワクした子供の目をする。

だがそんな林とは対照的に、千鶴が青ざめた顔をしていた。

「ダ、ダメですわ！ お辞めになりなさいっ！ そんな部活造ろうとするのはっ！」

その必死の形相に茜達は進行を止めて千鶴と向き合った。

「ええー、なんでよ。もしかしたら集まるかもしれないじゃん。毎日泳げるんだよ。確かにこんな競技用のプールだから遊びには限りあるけど、それでもこんな広いプールだよ。水泳部独占で使えるんだから！」

部活用としてではなく、遊び気分になっている茜だった。

「ワタクシが言いたいのは……。その……。そ、そうですね！ 去年の二の舞ですわ。決して出来ません。」

それを思い出した千鶴はああ、なんだと言わんばかりに表情が安らいでいく。

「ええ、絶対に出来ませんもの。それでしたら安心ですわね……。使われずに終わるのも時間の問題ですわ」

でも千鶴のその態度に茜は負けずに部活を造る主張を言い出す。

「むう……。で、でもね！ テニス部はできたじゃん！ 廃部になっちゃったけど……。きつと、泳ぎたいと思う同士は居るはずっ！ 出来ない保証はないんだよっ！」

尚も対抗して迫ってくる茜に千鶴は唇をかむ。

「くっ……。し、しかし、まあ、どうせすぐに廃部でしょうし。ああ、けれど。廃部と言うのも、造れてから言える事ですけどね。ほほほっ！」

だが、茜の経歴を思えば答えは出ていた物と分かったら強気になって、勝ち誇った高笑いをしだした。

茜はそれを言われて苦悶の表情になる。両手が握りこぶしになり、肩に力が入っていてプルプル震えている。

「い、いいもんっ！ 何もやらなきゃ何も起こらないんだからっ！ やってから後悔した方が、やらないで後悔した時よりもマシなんだものっ！ ちづるっちのバカアー……ッ！」

茜は顔を真っ赤に泣きながら思いつき走り出て行った。

その余りの声の迫力にプールの表面が少し波打った程だった茜の居なくなったその場が、音も一つ立たず静まり返った。

「あ……。千鶴は意地悪なヤツだよ」

林も千鶴に一言そう言ってから、茜を追いかけて行った。

残された千鶴と周りのお嬢様達は事の騒ぎに目を合わせ始める。

「舵守って本当にバカよね。千鶴様の言う通りだったのに」

誰かが発したその声で場が一気に茜へ罵声が始まり盛り上がる。「本当よね。ねえ、知ってる？ テニス部に入った2人の後の話」

「知ってる。弓道部で全国大会で1位と6位に入っただけでしょ。やっぱりテニスなんてするものじゃないわよね。あんなに動いて得する物より損する方が多いもの」

お嬢様達がお上品に高笑いする。

その喧しい高笑いの中で、千鶴は黙ってその場から出る。施設の出口へ足を向けていた。

（ワタクシは千鶴ですわ。ちづるっちゃんなどとまた言っ……。茜さんはいい加減に名前は正してくださいっ！それにバカはアナタでしょ。毎度懲りず、何も考えないでいつも行動して……。去年だって何度ワタクシが注意したのにも関わらず、林さんと突っ走って皆さんの笑い物になってしまってるのに……）

千鶴はガツガツと足音を立てながら早歩きをして進んでいく。表情はとても怒っている。

（それに林さんも意地悪って。ワタクシは本当の事をいって忠告したのですわ！彼女の為に言ったんですものっ！意地悪じゃないですわ！ええ、ワタクシは意地悪では……ない……もの……）

だが突然ピタリと止まると、顔を下げた。そして、目から涙が流れだした。

（……でも、言い過ぎてしまいましたわ。あんな挑発的に言っ……まうなんて……。ワタクシも水泳と言う言葉にまた意地になりすぎましたわ。茜さんも、林さんも怒っていますわね……。もう、茜さんも林さんもワタクシの事を嫌いになってますわ……）

そう思った千鶴の目にぶわっとな涙が噴き出してくる。

（そんなの嫌ですっ！ワタクシを平等に見てくれるあの方々がいなくなるのは嫌ですわっ！謝らなくて……。言い過ぎた事を反省して謝らなくて……！）

千鶴は茜達を追って走り出す。多分、坂本先生に部活設立の為に聞きに行っているから職員室だろうと思っ……。

林は茜を追って職員室に繋がる廊下にする。

校舎の中もとても豪華で廊下は赤い絨毯で敷き詰められ、至る箇所に高そうな壺や装飾された鎧、絵などが飾られている。

「ふう……、はあ……っ！」

その廊下を息を切らせながら林が走り去って行く。廊下を走るなどと言つ目付きで、周りのお嬢様は林を避ける。まるでモーゼの十戒で海が割れる様に、お嬢様の群れが避けて行く。

（さすがに茜は足が速い……。ふう……。職員室の方へ行つたかと思つたけど、違う場所に行つたかな……。まだ追いついてないだけか……）

林が職員室のへ曲がる角を通り、少し廊下を進むと生徒の中に茜の後ろ姿を見つけた。

トボトボ歩いている茜に林は声をそつと掛ける。

「ふう……、やっと見つけたよ……。大丈夫？ 茜？ 気にしない方がよいよ。千鶴だって言い過ぎてる事反省するよ。なんか千鶴つてば、普段と違って水泳に対する事にナーバスになつてた様に見えるたしさ……」

そんな茜は、何を言つてると言つ感じにキョトンとした感じに林に振り返つた。

「ん？ ちづるっちの事怒つてないけど？」

さっきまでの怒りを表した茜とは打つて変わつて、全くへこたれてないいつもの茜の姿に戻っていた。

「相変わらず立ち直り早いわね……」

そういう茜の良いところに苦笑する林だった。

「ただねえ……。気にする事は気にするよ。だって、本当の事だもんね。部員が集まらない事も、廃部になつちゃう事も。」

茜は腕を組んで真剣に悩んでいた。

「だから、どうしたら上手くいくんだろなあつてね。千鶴の言う通り、これが問題なんだよ。だから今回は確りと対策を建てなきゃだよ」

「そうね。私はともかく。他の人達がどうやる気を出して入ってくれるかによるな」

そう悩む茜に続いて林も一緒になって考えてくれる。

そんな林に茜はふと疑問を覚えた。

「……っふと思っただけだ。林ってどうしていつも部員に入ってくれるの？ テニス部やっていた時もそうだったけどさ。林ってあんまり激しく動くの好きじゃないじゃん。すぐに休憩と言ってあの2人と一緒になってベンチで休んでたし……」

そんな林はちよつと恥ずかし気味に話しだす。

「まあ、この学園の中で唯一、私と貧乏って立場が一緒に、同じ話し合いができる友達じゃない。だから協力しようかなってね。まあ、それにね。茜と一緒に何かやってると、普段の私の生活よりも楽しかったりするから、ノってみようかなってね」

そんな事言っただ林は恥ずかしいのか顔を赤らめて手をひらひらと振っておどけはじめた。

「いいじゃんもう。友達なんだからさ。私は茜が好きなんだよ。だからそれでいいんだ」

そんな林の様子や言葉に、茜は胸がキュンキュンした。

「うう、ありがとう、林っ！ アタシ達、ずっと友達だよっ！ 林、大好きっ！」

そう言っただ茜はガバツと林に飛びついて抱きついてきた。

「ああっ！ ？やめっ！ ほら、人が見てるっ！ 恥ずかしいからっ！」

「まあ、大好きだよ林っ！ チュっしちゃうよっ！ むっちゅー」

「あっ、こらっ……。だ、だめえっ！」

茜と林はキャッキヤといちゃつく。

周りからは冷やかな目と、顔を赤くしてうつとりな目をしたお嬢様達に見守られる。

だがそんな中を切り裂く人物が駆けつけて来た。

「そ、そこっ！ ぜえ、ぜえっ！ お、お辞めなさいっ！ はあ…

…、ふうっ……。不埒ですわよっ！」

そこに聞き覚えのある声が、息を切らせていた。

「が、学園での……。はぁ……。規則ですっ！百合は……。ふう…。
…。百合は、禁止されてますわっ！」

息を荒げながらもビシツと姿勢正しく、鋭い指差しで決める千鶴がいた。

ちよつと髪や服装は乱れているが、それでもその凛々しく輝き放つオーラに、周りのお嬢様から歓喜と憧れの眼差しが送られる。

忠告されて固まっていた2人は、茜は不満そうに離れ、林はちよつと残念そうな表情で服の乱れを直す。

「ちえ、後ちよつとだったのに……」

「まあ、場所が場所だからね……」

「ぜえ……。はぁ……。あぁ……。……」

ビシツとしていた体制も、時間が経つにつれて崩れていき、千鶴は膝を抱えて中腰状態になっていた。

「だいじょーぶ？ 千鶴？ 顔真っ青だよ」

「普段から運動してないからそうなるんだよね」

「なら……。ふう……。林さんだって……。ぜえ、運動音痴で……すわっ……」

息絶え絶えながらも言い返す千鶴の根性だった。

「まあ、私も養蜂所の娘だから。たまに手伝いに動いてるし、人並みには体力はあるし走れるよ。結構ハードなんだから、あの夏の防具服はね」

茜と林は、千鶴の腰を擦ってやる。

「けど、あのプールから此処まで、この短時間で走って来たんでしょ。やるじゃん。私ですらちよつと遠いつてのに」

「それは、ちゃんと謝らなければと思ひまして……。ふう……。ありがとうございます。もう大丈夫ですわ」

ようやく息も整ってきた千鶴が背筋を綺麗に伸ばして立ち直る。スタミナは無いが、回復は早い様だった。

「……………茜さん。先ほどは申し訳ありませんでした。あの言動は言い過ぎたと思います。茜さんを侮辱してしまい、ごめんなさい」
そう言っただけ千鶴は茜に頭を下げた。心から謝っているのがひしひしと伝わってくる。

そんな千鶴の態度に、茜がアレアレと慌てる。

「え？ ああ、いいよう。本当の事でもあるし。千鶴が忠告してくれなきゃ、アタシはその場のノリでまた考えもせずに行動に起こしていたかもしれないし。それに、アタシも千鶴の事バカって言っでごめんね」

「いえ、ワタクシだって茜さんをバカにした事を言っただけです。ごめんなさい」

互いにペコペコと誤り、引けを取らないでいるのを見て、林が間に入ってくる。

「はいはい。茜も千鶴も、もう互いに誤って反省したんだから。ね。仲直りに握手でもしてさ。ほらほら」

そう言っただけ林は、茜と千鶴の手を取って握り合わせる。

「あ、その……。これから……。よろしくお願いします……。で……」

「うん、よろしくねっ」 千鶴もアタシ達の友達だよ！ 千鶴も大ス……………」

茜は千鶴に飛びつく体制に入った。

「百合は禁止ですっ！」

ビシッと手で制止されてしまっただけ、動けなくなっただけ茜。

「あの暴虐無人の舵守をあの人に手名付けてしまっただけ。天ヶ崎様は凄いですわ。」

「自分の過ちを下等な者でも謝りに行く。千差万別を捨て、広い心意気を持つ千鶴様は素敵です！」

何やら周りでまた千鶴で変に盛り上がっているが千鶴人気は日常的なので、本人全く気にしなくなっている。

茜も林も1年も一緒にいるとさすがに慣れたので外野は無視する。

茜はむうーとふてくされてから、当初の目的を思い出して行動に移る。

「さてと、んじゃ林、坂本先生に会いに行こうよ」

「そうだね。あつ。あー……。ちょい待ち……」

茜の後を追おうとした林が何かを考えて動かない。

その林の目が、何か面白い物を見つけた子供の様にキラキラと輝いている。その目が千鶴に向けられた。

「ふふつ、そうだね……。ねえ、千鶴も一緒にやろうよ。水泳部をさ」

そう言つて林が千鶴を部員に誘つてきた。

「え、ええっ！？　そ、それはお断り致しますわ！」

思つてもみなかつた行き成りの林の誘いに、千鶴は手を振り、妙に焦りながら断わつた。

「ええー、もし部員数が3人だったら部活できるのに」

茜は千鶴の断わりにガツカリした。

だがその千鶴の反応を見て、サドツ気な表情で林は千鶴に言い続けた。

「ほお……。ふふつ、何か出来ない理由でもあるのかな？」

林は何か悟っている様にニヤニヤと千鶴に質問している。千鶴はその言葉に、とても焦っている。千鶴のこめかみから冷や汗がタラリと流れ落ちた。

「ワ、ワタクシは生徒会での仕事が忙しいですから。だからワタクシ、部活動は行っておりませんの」

千鶴は本当の事を隠して、今思いついた断わる理由を言いだした。「んー、そう。でも、今のもう一人の副会長のヤツも弓道部やっているけど。生徒会と掛け持ちしているけど、やろうと思えば出来ると思うけどね。」

「ああ……。つと、生徒会も忙しいですが、ワタクシ、ドラマの撮影などがありまして……。ええ、そちらがとても忙しいので……」

「その割には毎日、学園でノンビリと放課後を過ごしているけどね。」

千鶴って撮影は確か、夏休みなどの長期休暇のある時にしかやらないと聞いているけど」

「うつく……」

尚も手を抜かずに攻めてくる林に千鶴は思いつく言い訳を使い果たしてしまっていた。

千鶴は次の言い訳を必死に考えている。

「まあ、林。千鶴は入る気ないのに、無理に誘っちゃ悪いよ。ごめんね」

そんな様子を見ていた茜が話を割って、千鶴の味方をしてくれた。

「茜え……。部員獲得するチャンスなんだからね。いいのそれで？」

「うん。やっぱりちゃんとやりたい気持ちで入ってる人達で、部活を楽しみたいかな。無理に千鶴が泳げない事を脅しに使って入らせるのは、部活しても面白くないよ」

茜の言葉にその場が一瞬にして時が留まったかの様に固まった。

「おい、それ言っちゃダメだろ。この大勢聞いている中で……」

「あつ……。あははっ、アタシって嘘付けないんだよねえ……」

千鶴はその言った発言の意味をまだ上手く整理できてないみたい

に、ぼけっとしていた。

「え？ なっ！？ ええっ！？」

茜の一行に千鶴が泳げないの単語があつたのをようやく理解し始めたのだった。

「な、なな、何を言っておられますの茜さん！ ワタクシが、泳げないっ！ なんて事は絶対にありませんわ！ このワタクシがですわよっ！」

千鶴は茜に掴みかかって自分が泳げるって事を主張する。

「えー、だつてさ。この態度だものね……」

茜が今の状態の千鶴を指差す。

「茜は、鈍感な様で察しの良い子だからね。まあ、普通の人でも気付くくらい分かりやすいと思うけどね。千鶴ってすぐ顔や態度に出

るから」

その林の言葉に、千鶴は愕然とする。本当に分かりやすく表情を見せてくれる千鶴だった。

「は、はうっ！ くううう………」

千鶴は恥ずかしくなつて顔を真っ赤にして俯いてしまう。

「千鶴様って泳げないの？」

「嘘でしょ。なんでもそつなくこなす。あの千鶴様が？」

「でも、泳げない人っているもんね。天ヶ崎様も完璧超人じゃなく、やっぱり苦手な物があるってことよ。でも、泳げないって所は、ちよつとかわいい」

今まで気にしてなかった外野達の言葉が千鶴にグサグサと刺さっている。

「ご、ごめんね。こんなところで泳げない事を言っちゃって」

「いや、言わなくても大体周りの人達は察し付いていたと思うよ……」

俯いて何かブツブツ言っている千鶴。茜が心配になって腰を下げて、その顔を覗きこんだ。

その千鶴の表情が死んでいた。目がうつろになり、口は唇だけ動いている。

「こ、こわっ……！」

阿鼻叫喚の表情を見てしまった茜は、すぐに離れて林にどうしようか目線を送る。

林もどうしようかねと、手を上げてジェスチャーをする。

だが、しばらく俯いていた千鶴の顔がガバツ勢いよく正面を向く。茜達や周りのお嬢様も何事かとビクツとする。

「決めましたわっ！ ワタクシ、水泳部に入る事に致しますわっ！」
決意のこもった表情で、目には炎が燃え上がっている様に、とても勇ましい顔で千鶴はそう発表した。だした。

「えっ？」

「おー……？」

「ワタクシもいつまでも過去のトラウマに負けて泳ぐ事に逃げてしまっていてはいけないと思いました。なら、今此処でそのトラウマに勝つチャンスと見ましたわっ！　いつまでも逃げているワタクシではありませんわよっ！」

おー、と何かわからないけど、その意気込みに周りから歓声と拍手が上がる。

決意は偽りが無いと言う真実の目で、茜に向かって千鶴は言い出す。

「いいですか？　ワタクシ、泳げませんけれど部活に入っても……」
そんな意気込みとノリは、茜には大好物だった。茜も負けず劣らず、千鶴のテンションに合わせて元気に言い出した。

「うんっ！　大歓迎だよっ！　泳ぎたいって思う人であれば、泳げなくなつて泳げていたっていいんだよ。様はやる気のある人たちなんだからっ！」

茜は嬉しさの余り急に千鶴に飛びついて抱きしめる。不意な事だった為に制する事が遅れた千鶴はぎゅうっと抱きしめられる。

「だ、だめっ！　百合はダメなんですわっ！　あ、そこっ！　ふ、触れているっ！？　茜さんの！　や、柔らかい！？　二つのっ！　離れなさい！　茜さんっ！　んあっ……、そ、そこはダメっ！　アアッ！」

「にふふっ、ここ、弱いんだねえ……。こうすると、気持ちいいですよっ」

千鶴は茜を引きはがそうとしているが、茜はこれを良い事に千鶴をおもちやにしまった。茜のテクニクにより、千鶴はドンドンと抵抗力なくなり、落ちていった。

（ホント、茜は、人もそうだけど、犬や猫なども含めた生き物を手なずけるの上手いよね。私も茜に振られると妙に落ち着くし、気持ちよくなるんだよねえ……）

林は茜のそのような不思議な力や魅力に、とても引かれてる。

「何はともあれ、これで3人か。それに千鶴が部活に入つたって事

は、千鶴の追っかけが続いて入ってくれるな」

そう言って周りのお嬢様の声に耳を傾けてみる林。

「あ、あぁっ！ 何てことっ！ 千鶴様が奪われましたわっ！」

「あ、あんなに密着するなんて！ だ、ただだ、舵守茜っ！ 許すまじっ！」

「ワタクシ達で天ヶ崎様を取り戻すのよっ！」

おーっ！ と周りで千鶴奪還への怒気が高まっている。

（……敵が多くなったなあ）

林はため息をつく。今も2人でいちやつくのを見て苦笑する。

（茜と2人つきりでも楽しいけど。ま、この2人の漫才も見るのも楽しいし。もし部活が出来たら、どんな物が見れるかな。茜が千鶴の手を取ってバタ足の練習を……）

「つぶふあっ！」

その光景を思い浮かべてつい噴き出し笑いしてしまった。

「ん？ どうしたの林？」

「な、なんでもないから。それよりも早く行こう。でないと、聞く前に始業式の準備に取り掛かって話しが聴けなくなるかもしれないし」

「あ、そうだね。それじゃ急ごう。」

茜が千鶴からパツと離れる。

「あ、あぁ……。茜さん。そ、そんなに密着されたら……。ダメ……。ダメなんです。規則が……。百合が……」

「おーい。現実戻ってこいー」

林が千鶴の前で手を振る。

「えっ、あ、はい。百合は駄目ですっ！ 茜さんっ！」

現実に戻った千鶴が茜に忠告する。

「はいはい。そんな事はさっきから注意されてわかってるから。単なるスキンシップ。百合でもないって。それより、急ぐからほら行くよー！」

そう言って千鶴の手を取ってガンガン引っ張っていく。

「あ、茜さん。そんなに引つ張らなくても、ちゃんと歩いて付いていきますからっ！」

その後を林も追う。

（茜って面白い子。今まで現実なんてつまらない物だけって思ったけど、こんな子がいるならこの世界も捨てた物じゃないよね……。それに、千鶴もまた面白い逸材だね……。ふふっ。この学園に来てよかったな）

2人の微笑ましい様子を見て、林は心底、楽しそうな表情をしていた。

「失礼しますっ！ おはようございますっ！」

体育会系の様にハツキリと爽やかな元気な挨拶と共に職員室の扉が開けられる。

職員室に居る誰もがもうこの声が茜だとわかってしまう。こんな大きな声で職員室全体に届くのは茜以外誰にもいないからだった。職員室はこれから始業式をする為、慌ただしく動く先生でこつたがえっている。

茜達は職員室に入る。

「恭子先生、ちよつと今大丈夫ですかぁー？」

茜は恭子先生がいる机の方を見て、その席に座っているのを見つけて言う。

パソコンのキーボード操作に悪戦苦闘していた。

短髪に切りそろえた赤茶色の髪を掻き回し、画面を睨みつけている。

恭子先生が腕を天井に伸ばしながら答える。

「んんーっ！ ふう……。何っ！ どうしたのよっ！」

恭子先生も周りの喧騒に負けずに大声で茜に答える。

彼女の名前は坂本 恭子さかもと きょうこ。女性に年齢を聞くのは野暮と言われるので、年齢は言わないでおく。担当教科は体育と保健体育。

全ての運動系部活動の管理を任されている。部活を造る時も、恭

子先生に一度、提案しなければ勝手には造れない。

「はいっ！ そっち行っても平気ですかっ！」

「いいわよー。来なさいーっ！」

それを聞いて茜達は恭子先生の場所まで移動する。

「で、どうしたの？ あ、わかった。早速できたてのプールを泳ぎたいから、使用許可を取りに来たんじゃーしょ」

運動施設の使用許可の発行も、恭子先生が担当しているのだった。

「はいっ！ 是非、泳ぎたいですっ！」

「その前に部活でしょうっ！」

千鶴に訂正されて、いやついと言う感じで頭を掻いて千鶴に謝る。

「ぶ、部活って……。もしかして……。また？」

坂本先生は去年。いくつも部活設立の為に茜に振りまわされた過去がある。

「はい。水泳部を造ろうって思ってた」

恭子先生の表情がこわばった。やっぱりそう来たんだと、過去の出来事が走馬灯のようによみがえって来た。

「それで、坂本先生。水泳部設立には部員最低人数は何人必要になりますか？」

林が固まる恭子先生に問う。

「え、えつとね。もう、茜ちゃん達は分かってるでしょ。去年の散々な結果を……」

恭子先生は、去年の茜の出来事を言って、茜に辞めようと言う提案を出してきた。

「はいっ！ 覚えていますっ！ けど、今回は違うんですっ！」

千鶴がいますっ！ ババーンッ！」

そう言っただけは自分で効果音まで付けて千鶴を紹介した。

「へえー……。えっ？」

あー、そうなのと言った表情から、顔がギョツと信じられない物を見た驚きに変わる。

「あ、天ヶ崎さん？ アナタは止める側で居るのかと思ったのに！」

や、やるのっ？ 水泳部をつ！？ 天ヶ崎さんがっ！？」

宇宙人を目の前で発見したかのように、信じられない物見えますと言わんばかりに目を開いて坂本先生は驚いていた。

「はい、やろうと思っています。なので、現在部員は3人です。後何人必要になりますか？」

その千鶴の態度に啞然とする恭子先生。

「だって、天ヶ崎さんって泳げ……。」

「部員数は何人必要になりますかっ！」

恭子先生の言葉を無理やりに遮る千鶴。

恭子先生はあり得ないとおでこに手を当てて難しい顔をする。

「そ、そうね……。ま、まあいいでしょう。今回は天ヶ崎さんがやる気出すって言う珍しい状態だし。無下に辞めろと言わないわ」

でも、何かを悟ったのか、恭子先生は千鶴に向かって優しい顔になって言う。

「……そっか、天ヶ崎さんにとって、これが良い機会なのね。そうね……。ちよっと待ってね。部員数だけど……。」

恭子先生は自分のディスクの引き出しを引っ張りだして、何かを探し出す。

「ねえ、恭子先生にはばれてたの？」

茜が千鶴に聞いてくる。

「はい……。去年の臨海授業。ワタクシはズルをして休みました」

「ああ、あの日作戦か」

「林さんっ！ 言葉を慎んでくださいませんかっ！」

千鶴が恥ずかしくて真っ赤になって怒る。

「あー、ごめんって。でも、アレって大抵ばれちゃうんだよね。ズル休みした次の週に本当になって……。」

「そうそう。無理に理由付けずに言ってくればよかったのにね……。」

恭子先生が調べ物をしながら会話に入ってくる。

「それにね。あの後にズルした理由を自己申告したのよ。律義よね

え。泳げてもサボりたい人は同じ様にズルしているのにね。黙っていれば本当かどうかは、分からないまま終わったかもしれないのに」「くっ……」

「墓穴までほったのか……。」

「でも、ちゃんとしてようと心改める所はカッコいいよ」

落ち込んでいく千鶴に茜がフオローを入れている。

「で、最低部員数なんだけど、6人は欲しい処ね……」

「ええっ！ 3、4人じゃないのっ！」

「4人でもいいんだけど……。でも、部活を建てるからには、競技で成績を残して行かないとね。それだと泳げる人をもう少し欲しい処なのよ」

「ええー、競技にでるんですか？ め、めんどい……」

林が面倒だと言わんばかりにだらけた。

「栗島さん……。部活はなんで建てると思っているの。遊びでやるものじゃないのよ。運動系は頑張って実績を残していく。文化系はその道の髄を極めていく。遊び感覚で部活はやれないのよ。それに、去年のテニス部の廃部原因は、やる気の無さの他に原因があるのよ」

「それってなんですか？」

茜が真面目になって恭子先生に聞く。

「目標よ。大会に優勝する。県大会に出場するなどと言った目標がないから、部員にやる気と活気がでないの。ただやる。それだけじゃ、飽きてしまう物なのよ。だから、目標を造ってそこを目指す。そうする事によって、練習に励みがでるのよ」

「目標……か……」

林が腕を組んで悩みだす。

「で、水泳部の目標は大会に出て、どの種目でも良いから好成績をとってほしいの」

「好成績。泳ぐ事から始めるワタクシにはできない……」

千鶴は自分の不甲斐なさに歯を食いしばっている。

「今はね。でもまだ諦めちゃだめよ。天ヶ崎さんは未知数。秘める可能性があるかもしれないのだから」

「そつだよ！ 泳げるようになったら、アタシより早く泳げるかもしれないんだからね」

茜が千鶴を励ます。その言葉に、千鶴はこれから先、精一杯頑張ろうと決意を新たにした。

「そして栗島さんだけど……。臨界学校で見た限りの泳ぎじゃ、練習してもそこまで行くには至らないでしょうね。残念だけど……。ワタシにも予測しなかった覚醒するなら別だけどね」

「あーら……。ま、運動に関しては私はあんまり期待無しって分かってるけどね」

林が遠い目をしてため息をつく。

「ごめんなさいね。でも栗島さんは大事な役があるわよ。それは皆のマネージャよ。マネージャ無しじゃ、選手は力が100%出せないのよ。運動は苦手でも、そっちを頑張って貰えるわよね」

「ほう……。それじゃ、皆のサポートに私が検査に引っ掛からないドーピング薬の開発を専念すれば……」

「は、林さん……」

「冗談ですよー。冗談ですからねー。本気になっちゃ嫌ですよーもっ」

林がそう言うが、千鶴と恭子先生は冗談には思えず、苦笑いするだけだった

「ま、まあそれはさておいてね。それでまともに部活動として活動記録を残すのなら、後3人は欲しい処ね。団体メドレーで4人で泳ぐ事もあるから」

「結局、部員を1から集める形になるんですかぁ……？」

茜がガツカリする。

「まあ、これはワタシの意見だからね。4人集まってその様子次第では部活設立申請を通すから。でも、それだと水泳の鬼才を見つけなきゃ出来ないわよ。でもこの学校じゃ、そんなの珍しくて見つ

るか分からないけれど」

「むう……。そんなのアタシぐらいじゃないじゃん……」

茜のパワフルな運動能力は誰もが認める程に凄いのを知っているが、今はその行先が家の手伝いの漁にしか発揮できてないのが問題である。

「そして何故3人は必要かと言うとね。水泳競技には5種類があるのよ」

「5種類？ クロールに平泳ぎにバタフライ……。後、何があったでしょう？」

「アタシは知ってる。でも、その5種類になんでバタ足は無いのか気になりますっ！」

一同も何故なんだろうとちよつと考えてその場が鎮まる。むしろ、バタ足だけで泳いでも、盛り上がる物じゃないだろうからとも思いうけれど……。

「ま、まあ、話は戻すけどね。その種目は5種類あるの。個人メドレー、自由形、これは殆どクロールで泳ぐ人が多いわね。そして、平泳ぎ、背泳、バタフライになるわ。それらの種目に一人ずつ練習に専念してほしいの」

「その種目に出るのに、一人一種目だけしか出れないのですか？」
林が問う。

「いえ、個人メドレーに出る人は、自由形と一緒に出る事が多いわね」

「だったら、アタシが3種も4種も掛け持ちして……」

「2種までよ。それにワタシから見ても、茜ちゃんは個人メドレーに向くわね。茜ちゃんは個人メドレーに集中して練習してほしいと思うの」

「けれど、先ほど個人メドレーと自由形を両方やる方がいると……」
千鶴が疑問を言う。

「ええ、でも自由形は主にクロール。自由形の為にクロールを練習し、個人メドレーに必要な他の型の練習が疎かになる。また、個人

メドレーの為に幾つの型を練習するけれど、クロールに当てる時間はその分減る。その練習時間の差で負ける事だってあるのよ。いくら茜ちゃんが凄い運動神経の持ち主だからと、練習を重ねた磨かれた選手に負ける事だってあるんだからね。だから一人一種の競技に集中して練習してほしいと思っているのよ」

「んー……。掛け持ちするにもハンデを背負うのかぁ」

「最低でも4人って言ったけど。二人が2種背負って、一人が1種背負う形にもできるのよ。でも、さっき言った通りの結果が待っているの。それに背負い過ぎると体にも負担が大きくなるわよ。だからワタシは一人一種目の練習をやって行った方がベストだと思っているのよ」

恭子先生は出した資料を引き出しにしまっただけで、

「坂本先生！ そろそろいきますよ」

職員室を出て行く先生が恭子先生に声を掛ける。

「はい、すぐいきます。じゃあ、ワタシはいくわね。部員集め、頑張ってるね。これ、入部記入証明書ね」

そう言っただけに入部希望の記入欄を書く紙が渡される。

恭子先生も他の先生と混じって職員室から出て行った。

「ワタクシ達も出ましょう」

茜達は職員室から出る。

「さって、後3人か。ってこれじゃ、去年のテニス部造る時に、後2人って時よりも一人多いしさ」

「3人……。少ない様で、此処では難しい話しなんですよね」

林と千鶴はどうやって部員募集するかを考える。

「なんとかなるよっ！」

そんな能天気な声が2人に掛けられる。

「なんとかなるって。何か良い方法思い付いてるの？」

「んー、取り合えず呼び込みからだよね。校門の前で水泳部入りませんか？ とか」

「去年やっていましたわね。後、ポスターの宣伝でしたっけ？」

「うん、アタシがデザインして、それを林が印刷して……。でも、そのポスターも4回目で貼りだし禁止にされちゃったから、もうその手は使えないよ」

そう言つて茜がため息をつく。

「そうでしたわね。学園の美化に影響すると言う事で……。デザインが奇抜すぎたのですわ。バスケットボールでしたっけ。あんなに女子が体を密着させた絵は、百合の象徴ですわ」

千鶴は去年のポスターを思い出して顔を赤くする。

一人の女子を後ろから密着したバツクの様な形になっている絵であつた。

「アレは普通にブロックつて言う物なんだよお。もお…… Dank シュートの絵にしとけばよかった……」

「んじゃ、今回はポスター無しで、呼び込みだけ？ ー、他に良い方法やらないと、去年と何ら変わりのない結果になるよ」

林はあれこれ頭を捻つてるのか、目が右往左往しているだけで上手いアイディアは中々出てこない様だつた。

「所で、設立には期限は設けられていますの？」

「期限？ そういえば言わなかったけど、去年と一緒に2週間だよ。多分……」

「何回も造つてるから、もう言わずとも分かつてるよね。的な？

こんなのにな常連的な対応は泣けるね」

チャーチャーチャララーチャチャチャーチャ

つふと千鶴の持つている携帯に音楽がなる。千鶴は携帯を取り出して電話に出る。

「はい、天ヶ崎です。……。わかりました。遅れてしまい申し訳ありません。すぐに向かいます」

そう言つと千鶴は電話を切つて2人に向かい合う。

「ワタクシは講堂へと行きます。始業式で生徒会でやる事もありますので」

「そっか。ー、私達は一旦教室に集まらないといけなかったけ？」

「ええ。ですので、此処で解散です。放課後にまた話しあいましょう」

「うん、それじゃまた、放課後にねっ！ 場所は後でメールだすよ」
千鶴は講堂へ行く為、茜達とは違う方向へ向かった。
茜達は自分達の教室のある方へ向かって歩き出す。

「今回は上手くいくかな？ 千鶴が増えたとしても、去年となら変わりが無いし。千鶴を盗られた事に対して敵が増えたし。いや、待てよ……。千鶴の水着が見れるぞと言う広告宣伝を打てばもしか……」

「あはは、まあ、それは本当に最終的かもね……」
足を進めていた茜が突然止まった。

「あ、処でアタシ達のクラスって何処？」
そう言われた林も固まった。

「クラス表まだ見てなかったっ！ 急ごう！ もう時間がないっ！」
「ふえっ！？ クラス表が貼り出されているのは、生徒専用正面入り口の伝票板だね……。うひゃあーっ！ 急げっ！」

茜と林は駆け出そうとした。

「ま、待つて！ 茜っちっ！ はやちーっ！」
「あうっ！？ はうっ！」 「おおっ！？」

急に呼び止められて、勢い余った茜と林はピョンピョンと片足で跳ねて転びそうになりながらも停まる。

その制止の声がした方向を2人は見た。

まだ学生と間違える様な童顔な顔だが、来ているスーツは立派な社会人を表している。

肩まで伸びた茶髪の髪の前だけをエクステンションしている。
胸に付けられた花のブローチが、とても大人な女性を主張しているが、それが無くなったなら学生と間違えられても文句は言えないだろう。

その姿の先生を2人はマジマジと見始めた。この学園で見慣れない先生であった。

だが2人にとっては見覚えがある先生であつた。

「アレ？ アレえ？ あ……？ ああーっ！ 雪ちゃん先生ーっ！
！……」

「お、おお……。幻じゃないし……。雪ちゃん先生がいるし」

2人はその先生を見てはしやぎ出した。

「此処で3人揃うのは去年の夏以来ね」

この女性は阿部^{あべ} 雪恵^{ゆきえ}。

教員を目指して長野の田舎から上京して来た。

家は経営が傾いて倒産スレスレの小さな工業製品のパーツを造る施設の従業員5人を抱えた『仮社長』。

なぜ仮社長なのかは、最初の社長が赤字が続く中で、残った財産を持ち逃げして行方をくらましたのだった。

残った社員と会社を取り合えず自分が引き継ぐ形になって、一生懸命に働いている。

そんな雪恵は、こつちでアルバイトしたお金を家へ仕送りするな
どという苦労学生だった。

お金を一杯稼げる処が良いと言う事で、去年の9月、この学園で
教育実習で1カ月ほど学びに来ていた。

その時に、この学園の独特に造り上がったお嬢様な気質の威圧感
と、雪恵の貧乏臭を嗅ぎ取ったお嬢様からの周りから冴えた雰囲気
や威圧に、雪恵は挫折していた。

月曜日の朝、気力が全く無くなり、学園へ風邪を患い、起き上が
れる状態にもないと嘘をついてズル休みした。

その日の夕暮、教育実習期間だけ学園の施設である貸しアパート
に住んでいる雪恵にお見舞いに来たのが茜と林だった。

最初に茜達を知った時は、変で危ない子とお嬢様達の噂を聞いて
避けていた人物2人がお見舞いに来たのだった。

雪恵は、ズル休みしたのをネタに脅しを掛けに来たのだとばかり
思っていた。

だが2人は普通にお見舞いに来ていて、仕舞には茜は干してある

洗濯ものを取りこんで畳んだり、掃除機を掛け、林は夕御飯のおかゆを造ったり、自分家で採れた今や最高級品の品である栗原八チミツで、八チミツしょうが湯まで造ってくれた。

本当に病人として扱ってくれたのだった。

そして茜と林は雪恵の暮らすその部屋を見て、苦勞しているのを知って、自分達の事を全て雪恵に語りだした。

自分と同じ境遇にあり、学園ではみ出し者として存在する。

けれど、お互いが自分の存在を認め合い、支え合ってこの学園でその境遇と戦っている。

茜と林は雪恵を本気で応援しに来ていた。教育実習を精一杯頑張っ
て欲しいと応援していた。

その事に雪恵は2人の思い、自分に対しての応援に感涙してしま
った。

そして雪恵は自然と自分の事を茜達に偽りなく言い始めた。

自分が今思う事。家庭の事。悩み。ズル休みした事も。

そして雪恵は茜達と共に互いに認め合う者になって、支え合っ
て学園で過ごした。

3人である時は、学生と教員の立場を越えた関係になっていた。

ようやく教育実習期間が終わり、採点は合格ライン。

雪恵が学園から去った後も3人は一緒に、遊びに出かけたり、悩
みを相談しあったりした友達だった。

「な、なんているのっ?」

そう言われた雪恵は、ニコニコと笑顔を浮かべながら、自分のポ
ケットから手帳を取り出して中身を見せた。

「じゃーん」これが教員免許っ! そして、就職先が此处に決定
しちゃったっ! その証明書がこれだっ!」

それは紛れもないこの学園の教員としての証明書だった。

「なっ……、マジでっ?」

「ほ、ほええ……? 此处なのっ!?」

茜達は顔を見合わせる。マジなんですなと目で合図しあった。そ

して2人同時に言いだした。

『おめでとうっ！ 雪ちゃん先生っ！ なんて此処に居るか分からないけどねっ！』

ちゃんとハモッって、そして茜と林は雪恵に抱きついた。雪恵も2人を確りと抱きとめた。

「えへへっ」もう頑張ったよっ！ これも、2人が応援してくれたお陰なんだから。あたしのね。本当に……。支えになってくれたんだから……」

茜と林が雪恵の顔を見ると、雪恵の目に涙がボロボロと大量に流れ出していた。

「大変だったんだ。合格するのにもう必死で、耐えられなくなりそうになって。でも、2人が毎日メールしてくれて……。あたしの励みになったんだよ！ ありがとうっ！ 2人ともっ！ 本当にありがとうっ！」

そして今度は雪恵が2人をぎゅーっと強く抱きしめた。

「一番頑張ったのは雪ちゃん先生だよ。だから雪ちゃん先生、万歳なんだよっ！」

「本当に、よく頑張ったよ。私達にも励みになるよ。雪ちゃん先生みたいに頑張っていけば、奇跡は起きるって実証してくれたんだもの」

「ほらあ、涙拭いて。相変わらず涙脆いんだからあ……。化粧が落ちちゃうよ」

そう言って茜が自分のハンカチを渡してくれる。

「うっぐ……。うう、ありがとう。あ、化粧は大丈夫。多分こうなるだろうと思ったから、ウォータープルーフタイプにしてあるから「用意いいね。はい、ティッシュ。あ、ゴミ箱はそこにあるよ」

林がポケットティッシュから二枚渡してくれる。それを受け取ってビームと鼻をかんだ。林が指差した方向にあるどう見ても高級そうな壺に、そのかんだティッシュを放り投げる。

「相変わらずゴミ箱だか、飾ってある壺なんだかわからないよ……」

放り投げてから不安になった雪恵だった。

「あ、大丈夫だよ。それなんだけど紛らわしいと言う事で、去年の11月に廊下に置いてある壺は全部ゴミ箱になったから。本当にゴミ箱としてはヤバそうなのは、廊下に置いてないんだって」

「そっか。私が居ない間にもまた色々と変わったんだね。私が居た時にあったボーリング場も茜っち達が言った通りに本当に無かったし……」

「そおだよ。また新しいのが出来てたりするけどね」

「まあ、それよりもさ。雪ちゃん先生……。ここに就職したわけ？ 私達全く聞いてないけど？ 確か、故郷の方の高校に就職が決まったから、実家に帰ったんじゃない？……」

その言葉に茜も言いだした。

「そうだよお！ だってつい先月、雪ちゃん先生お別れパーティーを雪ちゃん家でやった時、もう引越しの段ボールが所々転がってたのに……。アレって演出っ！？」

そう言われた雪恵は申し訳なさそうな顔と、イタズラに成功した時の無邪気な子供の顔を見せた。

「えへへ、引越しは本当なんだ。この学園の近くに前より良いアパートにね。学園まで徒歩10分だよ！ それで、嘘は故郷の方の高校ね。これは此処の学園に就職したのを秘密にして、2人を今日、ビックリさせようっていうね。ごめんねっ！ だましちゃって！ 1日ズレたけど、あたしのとびっきりのエイプリルフルでしたっ！」

そう言って雪恵は手を合わせてペコペコ謝る。

『……ぶっ。あっははははっ！』

そして2人は笑いだした。

「あー、もう。雪ちゃん先生に一手やられたか。ナイスサプライズだよ」

「本当だよ！ でもアタシ嬉しいよっ♪ これから雪ちゃん先生と一緒に学園生活がまた送れるんだね！ またよろしくだよっ！」

「うん、ありがとう！ 茜っち、はやちー。またよろしく願いしますっ！」

3人は手を取り合ってキヤイキヤイとジャンプして喜び合った。
「よろしくね♪雪ちゃん先生。また去年と一緒に、私と茜で一嵐吹かせるから、見ていてよ」

キンコーンカーンコーンっ！

学園中に鐘の音が鳴り響いた。

「あ、予鈴ね。早く一旦教室に集まらないと！ その前に私達の今度のクラスを確認しなきゃいけないじゃないっ！」

「ああーっ！ そうだよっ！ 遅れるうっ！ 初日から遅刻とか笑えないってばっ！」

そう言って慌てて駆け出そうとする茜と林。

「ああっ！ それそれっ！ それを言おうとしてたの忘れていたっ！ 2人は2年B組だからねっ！ 私も2人が何処に居るか興味あつて調べていたのよ。」

それを言われてまた急ブレーキで留まる2人だった。

「そっか。2年B組かあ」

「また一緒になれたのか。んー、2人を核融合させると問題ばかりだからと、当然引き離されるって私は予想してたのに……」

「いいじゃんっ！ アタシは嬉しいよっ♪ また一年よろしくねっ♪ 色々とお願ひね♪」

「はっはっはっ、目当ては宿題を写させてとかだろうに。でも、私もクラスで孤立しなくて済むし、茜と一緒に居られるのは嬉しいよ。またよろしく♪」

そう言って2人は手を取り合う。

「ほら、そんなことしないで急ぎなさい」

「はい、じゃね。雪ちゃん先生の初舞台、しっかりね」

「あがつてマイクに頭打ち付けるとかベタな落ちも期待してるからね。それじゃ」

2人は雪恵に手を振って走り去る。

残された雪恵は一息入れて、自分は講堂へと向かって歩き出す。
その中で、雪恵は林が言った言葉を思い出して考え出した。

（引き離されるか……。私もそう思ってたのよね……。だから気になったから見てみたんだけど、確り2人は一緒のクラスになっていた……）

途中で職員トイレを見かけて、最後に自分の身だしなみを見ておこうと思い付いて入った。

先ほど、大泣きしてしまった為、アイシャドーは大丈夫か。ムラは出来てないか、抱きつかれて胸に付けているコサージュの位置がずれてないかと、細かく鏡の前で確認して、微妙と思った部分を整えていく。

「2人が一緒になると、ろくな事が無いとか言われていたのよね。だから、クラスも一緒にしないでバラバラに思うていたのに……。この2年生は、2人は引き離されて、大変になるだろうって心配してたのに……」

最後に鏡の前でモデルの様に腰を捻って、両腕を頭の後ろに持つて組んで、ウインク付きポーズを取ってキメた。

「うん、バツチリね」

「腰を捻るにしても、もうちょっと絞らないといけないんじゃない？」

「えっ！？ ひゃあっ！？ が、学園長先生っ！」

雪恵が映る鏡にぬつと現れたのは、此処、ルリビタキ女子高等学校の設立者にして初代学園長の森田 もりた 良子 りょうこ がそこには居た。

年齢はまだ20代に見えるが、その鋭い視線とオーラは、幾千の修羅場を切り抜けたかのように、若者特有な子供っぽさは微塵も感じられない。

「い、いつからそこにっ？」

「アナタが入ってくる前からよ。それにしても、独り言が大きいわね。アナタは……」

「えう？ あ、私は何かしゃべっていました？」

雪恵はキョトンとして、自分が何をしゃべった事を無意識でやってたのを知らなかった。

「そう、知らないようね。その癖は直した方がいいわよ」

「は、はい。以後、気を付けます！」

学園長に忠告され、新任で初教員の身としては、全身に恐怖で冷や汗タラタラであつた。

「で、引き離される2人と言えば、栗原さんと、舵守さんの事ね」

「あ、はい。あらー……、学園長が知ってるって事は、本当に口に出してるんだ……」

「ええ、そう言う事も口には言わずに心で思っておきなさい」

「えっ？ あ、はいっ！」

雪恵はもう全身ガツチガチであつた。これから舞台に立つて大勢の下に紹介されるっていうのに、大丈夫なのかと学園長は心配に思つた。

「確かに、先生方との会議や、生徒会からも今年は2人をクラスを別にして離すという議題はあがっていましたよ。確かに、あの2人が一緒にいると、周りにいる生徒に悪影響が出たりしたら、PTAからも苦情が来てしまいますからね」

「ああ、もうあの2人は……。でも、どうしてまた一緒になつたのですか？」

その質問に、学園長は渋い顔をする。

「生徒会の一人が、私へとこんな助言を出してきたのです。栗原さんから舵守さんを引き離しては、私が栗原さんをこの学園へ特待生で入れた事の意味がなくなる……とね」

「林さんから、茜を取ったら意味がない？」

雪恵はその理由の意味がわからなかつたようだ。

「栗原さんは、中学生でノーベル賞を取ってしまうほどの鬼才。彼女がこの学園に来た時、この学園へ齎す物は大きいと思い、特待生として栗原さんを招き入れました。しかし、その栗原さんのモチベーションである舵守さんを引き離しては、この事は全て無意味とな

つてしまつ。そう言つて来たのですよ」

「はあ……。そんな事が……。それ、私が聞いてもよかったのでし
ようか？」

学園の裏話を聞かされ、そんな事を新任である自分が聞いてよか
ったものかとドキドキしてしまつていた。顔がとてもひきつつてい
る。

「それは、アナタも例外ではないからなのですよ。確りしないさい」

「え？ 私がですか？」

「ええ、アナタ……。新卒な上に教育歴0年でこの学園へ就職でき
る事なんて普通はありません。此処へ就職しないかと手紙が来た
時、怪しいとは思わなかったかしら？」

「え、まあ、ちよつと……。でも、此処で教育実習で来ていました
し、その成績がよかったので、私の腕が認められて来たと思つてま
したが……」

「ハッキリ言つて、これからかなり無理難題に挑んで揉んで絞つ
て、練つて、伸ばしてと手間暇かけないといけませんね。アナタは
教育者としては、平均の以下、未熟に未熟すぎます」

ズバズバと言われたその物腰に、雪恵はザクザク心に突き刺さつ
て痛かつた。

「は、はいっ！ 頑張りたいと思いますっ！ 浮足立って申し訳あ
りませんっ！」

雪恵は涙目でもう足元がフラフラでノックアウト寸前だった。結
構精神的に打たれ弱い様だ。

学園長は一つ咳をすると話を続け始めた。

「でも、アナタは例外的な物を持っていたので採用いたしました。
それが栗原さんです。アナタと舵守さんは、栗原さんのモチベーシ
ョンを上げる良きパートナーになっています。アナタが居た教育実
習期間中、彼女はある発明をして、それがまたノーベル賞を取得致
しました。これによつて、学園の知名度が上がり、援助金さえ出た
ほどです。今年の卒業生の方々も、良い処への受け入れが多かつた

のもあります」

「確かに、今年の受験生も物凄い競争率になりましたね……。此処への就職率も半端ない数字でしたし……」

そう思い出して、自分がこうして運よく来れたのは林のお陰なのかと思つて、林を思い浮かべて感謝した。林の後ろに後光が見えていた。

「栗原さんが、この学園での生活に不満があるのは知っています。そのモチベーションを上げるのは、舵守さん、そして阿部さん、アナタなのです。教育的能力の方は目は瞑りますので、栗原さんの為にアナタは此処で頑張つてほしいのですよ」

「は、はい……」

その物言いに、つまりは自分は栗原林の為に採用されていて、教育者としては採用されてないと言う事に気が付く。

「栗原さんが、この学園へ不満を持ち、退学してしまつては、社会からはこの学園へのイメージは大変な事になってしまいます。この学園へ来た事を誇りに思い、そして良かったと周りへ言える様に、アナタは舵守さんとで、栗原さんと仲良くしてあげてください」

「わかりました」

その言葉に、雪恵は力チンと来たが、表情やしぐさに出さずに胸に抑え込んだ。

（私はっ！ そんな理由で仲良くなんかなりたくないっ！ なつたんじゃないっ！ 林っちゃんや茜っちゃんは、あたしにとつて大事な友達なんだからっ！ 林っちゃんと茜っちゃんをそんな道具的に見ないでほしいっ！）

「では、話は以上です。始業式が終わつた後にアナタを呼び出してこの事を言つつもりでしたが、この様な処で立ち話になってしまいましたね。お茶も出ずに申し訳ありませんわ」

「いえ、お気づかいありがとうございます。他に、私に何がご用はおありでしょうか？」

「そうね……。今のところは無いわ。アナタは講堂へ行きなさい。舞台の流れを説明する人が待つているでしょう。遅れた理由は、学

園長がアナタへ用事があつたので呼び止めたと言えば良いわ」

学園長はポケットからハンカチを取り出して、それを洗面台に置くと、蛇口をひねって手を洗いだす。

「では、失礼いたします」

雪恵は一例して、トイレから出た。そして講堂へ歩き出す。

「もう……、本当に……」

あ、っと口を押さえる。口に出していると先ほど注意されたのだ。学園長は気に食わなくても、言われたこの指摘は自分も注意しないといけないと分かっている。

（此処の学園は、学園長自身からもう雰囲気悪い。けど、お金を稼ぐ人って大体がああいう人なんだよね……。上手くお金儲けするには、ああいう人が勝ち組になるんだろうな）

雪恵はため息をつく。此処へ上京して、自分の将来の夢でもあり、お金を一杯稼げる教員を目標として頑張つて来て此処まできたのだ。だが、此処に採用された理由が、栗原の付き人的な理由で、教員としては全く認められて無かった事にショックが大きかった。

お金を一杯稼げるのは、家庭としては嬉しかった。でも、自分の夢と目標を得た理由がこの様な仕打ちであつたとした時、今までの苦労分に怒りが込み上げて来た。

（こうなったら、頑張つて本当に教員としての目で見られるように頑張ろうっ！ それにせつかく此処にこれて、お給料が普通よりも3倍も良い此処なら、お父さんの会社も助けられる！ 理由はどうかあれ、このチャンスは物にしまきゃっ！）

そして雪恵は腕を高々にビシッと付きあげた。

「がんばろーっ！！！！！！！！」

雪恵の気合は、トレイから出て来た学園長まで確り聞こえて、ビツクリさせたと言つ。

造ろっつ！水泳部っ！　　ゝ　　1　　ゝ（後書き）

何か自分としての能力を活かした生き方をしていきたい。

そんな中、自分が高校から面白くなって読み続けている小説を、自分が書いてみたらどうなるのだろうと、始めてみました。

書いてみるととても面白く、私はこんなのが書けたのかとようやく気がついたのだった。

23歳と、社会の忙しさの中で、日々コツコツと書いていくのはつらいが、私はようやく自分の自身の持てる夢が持てた。

小説家を本気で目指す。

正直言って、本当に小説家になりたい。アルバイトしつつも、小説を書きたいばかりになって、手がつかないほどに。

私は小説に全てを賭けよう。

何はともあれ、せつかく書いてもこの作品が良いのか悪いのかが他人から見なければわからない。

だが、見られるのにも知名度がなく、見られることなく埋もれる誰にも知られない徳川の埋蔵金の様になる。

何千と言う私と同じ目指す人達の中に埋もれる事と一緒にある。

なので、色々な場所でこの作品を紹介していると思います。

こうして来てくださった方々、普通に興味を持ってきて読んで行ってくれた方々、その1人1人が、私にはとてもありがたい人たちです。

心から「ありがとうございました。」を言います。

どうか、小説家を目指す私を、応援してってください。

この作品は、私の人生の為……。

これを読んで自分たちの今ある青春、あの時あった青春を思い出す、これからある青春を楽しむ物にする切っ掛けになる。

さまざまな思いをこの作品に込めて、心を豊かにしてくれるよう、頑張って書いていきます。

タイトルや女子高、部活物ストーリーからしてけい。んっ！みたいですが、それ以外は全く繋がりがありませんので、二次創作的に造った訳ではないです。

今回は、茜達が部活設立の為に秘策を考えるために学食に集まります。

その中で、茜達に向けられる謎の人物の視線……。

その人物は、茜達に何をもたらそうとするのか。

次回もよろしく願います。

造ろうつ！水泳部っ！　　ゝ　　2　　ゝ

ゝ　　2　　ゝ

始業式が終わり、午前中で終わった普段よりも早い放課後の訪れ。それぞれが部活に専念したり、長い放課後を学園の遊戯施設でノンビリするか、帰って私用を済ませるか。それぞれの放課後が始まっている。

部活は新入生を取得する為に、帰宅中や学園を見学している一年生に声を掛けたりして、少し学園内はいつもより賑わいが違っていた。

そしてその中で、茜と林はお昼ごはんを食べる為に混雑する前の11時半、ちよつと早めの学食に居た。

「お待たせっ！　林のAランチだよ」

自分のBランチも片方の手に持っている。

「ほい　ありがとう」

席取りをしていた林は自分のAランチを受け取って置く。

別に席を取っとくほど人がいっぱい居たり、学食が狭いわけではない。

1000人は軽く収納できるくらいにテーブルと座席が設置されている。

ただ、窓際の席には限りはあるのだった。

此処の学食は5階に設置され、その高台から見渡す学園の庭園は季節によって花が変わり、美しい芸術作品になる。

美しい庭園を見ながら食べるランチは、普通に食べるよりも美味しい物である。

これは最近になっての人気席になった場所で、前までは不評で茜達の特等席で誰も使っていないかった場所だった。

理由は日差しで日焼けするからと言う理由で、窓際は全く人気の

無い席だったからだ。

だが去年の冬休みの改装工事で全て窓はUVカットに変えられ、日焼けを気にしたお嬢様方は安心して窓際まで近寄る事が出来るようになった。いた。

なので、窓辺の席は人気が高く、テーブルが全部埋まっている事もある。

「さて、食べよう。今日のBランチはメンチカツなんだよ。肉汁が溢れるジューシーで高級黒豚を100%使用での280円。しかも3つもあるのにつ！ うゝん。さすがお嬢様学園。負担してくれる額が違うね」

「このエビチリなんだけど、いつもながらに大きくてプリプリしてるのよね。っていうか、イセエビ使っていて350円は……破格すぎない？」

茜達の目の前にあるのは、此処の学生と職員しか食べれない破格なランチシリーズ。

確かに此処はお金持ちのお嬢様学園。だが、職員全てがお金持ちとは限らない。確かに教員の給料は他の処よりも良い。

だが、清掃員だったり施設の管理人だったりする人達は、他の場所での同じ職業の給料と変わらない。

けれど、やはり此処の特権はこのランチである。これ目当てで此処での就職の競争率はとても高い物になっている。

周りでも学生で混雑する前にと早めに来た多くの職員が、茜と林が頼んだのと同じランチシリーズを食べて、舌鼓していた。

「まあ、これ食べる為に入ってたと思えるよ」

「まあ、私はこれに釣られて入っただけだね。家からも近いしって理由もあるし」

「いいなあ。アタシは片瀬江ノ島から南林間まで35分だよあ」

「けど、こっちも坂道が多くて自転車じゃ結構苦労させられているんだよ。時間は同じくらい掛かってるって」

「自動車買ったら？ 林って普通自動車免許所持ってるんだから、

それで通学したらいいじゃん。学園の規則にはまだ学生が原付、自動車通学の規制はないんだし」

「んー、買う金がないし。買っても使う理由が通学ってのが面白くない。私はその為にこの免許を取った訳じゃないし。それに、13歳であつた私が特例で取得したつてのもあるし、それを通学に使つと、色々と手を廻してくれた人達に悪い気がするよ」

そう言つてエビチリのイセエビを被りとほお張る。

普通免許の取得は18歳以上からで、林は国からの特例でこの歳で免許を持っている。

林は世界的に有名な発明家の天才として名が知られている。

しかし、本人にはやる気はないのでその才能は殆どが宝の持ち腐れ状態になっている。

ただ本気になった時に見せるその实力は本物で、この学園での1年生の時に1回、2度目のノーベル賞受賞している。1度目のノーベル賞は中学生2年だった。

1度目は、自動車の石油に頼つたエネルギー資源をエコな物にすべく、特別な燃料の開発に成功した事だった。

地球温暖化が悪化していく中で、夏がクソ熱いし自分の家のハチミツ栽培に必要な蜂にも影響があるからと手を出したのが切っ掛けだった。

燃費の良い油を造る植物をバイオテクノロジーで造り出し、その育てる工程でのCO₂の吸収と自動車の燃料として排出されるCO₂は五分五分であり、さらに油を絞つた後の残飯は家畜の餌にもなると言う食糧不足の危機にも貢献した素晴らしい植物を生み出したのだった。

その実験の為に車を自分で操作する為だからと国からの特例を貰つて免許を取得していた。

2度目は、蚊を大量に捕獲する蚊取り君5号と言う名の装置だった。

夏の夜、周りを飛ぶ蚊にウザつと思つて、2度とその顔を拝まな

い様に造つてやると本気になった結果の産物である。

だが、その捕獲率は強力で実験で半径4000m内に色々な種類の蚊を5000匹放つて、その5000匹全てがその装置によって捕獲されている。

その範囲の広さと種を問わずの捕獲率99.9%が売りだった。

それが蚊による伝染病に悩む国や飛行場などで多く実用化され、ノーベル平和賞にまで取り上げられたのだった。

そして『粹な林』と名を上げている。

発明した後の特許で設けたお金やノーベル賞の賞金は全て、貧しい国への教育資金にしたり、蚊取り君5号の製造への寄付金として使い、伝染病に悩む国へとプレゼントをしている。

本人のコメントでは「あんな苦しくて悩んでる子供達の映像の見たら、私が普通の暮らししにくいつての。だからこれ全部送るので頑張つて私の不安を解消してください」だった。

そんなとんでもない奇抜的な事ばかりしたので、栗原 林と言う名は世界的に有名になった。

本人も、世の中を騒がせ躍らせる事が面白くてやっていたりする。「それくらいは免許使つていいんじゃないの？ 世界は今、林の造つたニューガソリンであふれ返つてるんだから、その特権としてさ。あ、そう言えばそろそろまた色んな場所から声掛かつてるんじゃない？」

「あー、最近また増えたね。そろそろもう1個凄いの造りませんか？ 癌治療の研究チームに入りませんか？ なんてオファーが幾つもくるんだよ。結構ウザいよ。それらを受け付けなくする物でも造るのかな？」

「蚊に続いて今度は人避けになるのね」

茜は林のやる気スイッチの方向性の違いに笑う。

「それに、良いダイエットになってると思うんだよ。私つて一日に絶対にハチミツ食つてるじゃない。少し油断するとすぐにぷっくり

……」

自分のぽっちゃり姿を想像してひいーと両手で自分の腹の肉を摘んで、大丈夫な感じが確認しだした。

「そうかもね。ちよつと油断すると林つてすぐだらけちゃうんだもの。車を一回使ったらもうそれに依存しちゃって……。自分にそんな感じに決まり毎を付けておいた方がいいかもね」

うんうん、と茜も頷いた。

そして茜は林のエビチリに目を向けた。

「ねえ、エビチリちよつと頂戴。メンチカツ1個上げるから」

「ほい。あ、メンチ食べる時、キャベツも一緒に食べたいけどいい？」

たつぷりソースを付けたイセエビを茜のお皿に置いてあげる。そしてメンチカツを変わりにさらって行く。

「いいよお。キャベツは無料なんだよ。新鮮な上に、甘くておいしいんだよ！キャベツだけでもOKって感じだよお。アタシが兎だったら、ずっと此処で暮らしていたい……」

「茜の兎耳かあ。可愛いかもね」

林の言葉に、茜は両手を頭の上に建ててびよこびよこ動かしだした。

「びよーんぴょんっ」

「萌えっ！！！！！！！」

突然何処からかそんな奇声が上がった。

「ん？萌え？」

「ん？なんだ今のは？」

茜と林が互いに何事かと見つめ合う。そして周りを見渡した。

だが辺りはその声に反応した職員がキョロキョロしているだけで、その後の進展が全く見受けられなかった。

「ま、いつか。」

「だね。あ、そうそう。ちづるっち遅いねえ。今日は部員募集の作戦会議をするから、一緒に食事しながらしようって言ったのに。生徒会議が少しあるからって、遅れて行くって言ってたけど、長引いてるみたいだねえ」

「そうだね。しかし、千鶴も私達と同じ2年B組とはね。殆どの生徒は見知らぬ人だっているの。測られてる様な組み合わせだ事……」

林はこの裏にある秘密をひそかに感じ取っているようだった。

「ま、いいじゃん。一緒に居られると楽しいんだし。楽しければそれでいいんじゃない？」

「ま、それもそうだね。つまらなくなるよりまし。茜と一緒に居られて私も嬉しいし。千鶴は見ていて面白い逸材。手放したくは無い存在だったし。あつと、噂をすればなんとやらだ」

林は茜の後ろから、こちらに向かってくる千鶴を見つけて手を振る。

「只今終わったので来ましたわ。ワタクシもお腹が空きました」

「あ、御苦労さまだよ」

その声に茜が振り返る。

「ん？」

「どうかしましたか茜さん？　ワタクシの後ろに何か？」

茜の目線を先を確認するように、千鶴も後ろを振り返る。

「んー、なんかね。ささつと動く影が見えたから」

「それなら私も見たけど……」

「ああ、それならワタクシの周りでは普通ですわ。ワタクシのファンが隠れて見ているのは日常的に起こっているもので、もう気になさらずにいた方がいいですわ。切りがありませんもの」

千鶴は茜の隣に座る。

「でもねえ。千鶴を見てたってよりも、アタシの方に目線がいったような」

「何それ？　千鶴ファンクラブはわかるけど、茜ファンクラブなんて出来たの？　あり得ないってそれはさ」

林が大笑いする。

「あ、でも茜ファンじゃないけどあり得るかも。ほら、部活で茜に千鶴を取られたから、千鶴を奪い返す為に茜を敵視する千鶴ファン

かもよ」

「うひゃー、なら暗闇での背中に気を付けないと。行き成りドスでグサアとされちゃう」

茜は背中に寒気を感じて振り向く。もちろん、そんなドスを持った人などいない。

「後ろ以外にも、校舎近くを歩いていると、上から鉢植えとか落としたり」

「そんな証拠の残りそんな手段を使うでしょうか？自分とばれない様に毒を盛ると言う方法が一番可能性がありますが……」

それを聞いて茜がエビチリを掴んだ箸を止めた。

「う、うわーん！ 怖くてこれ食べれなくなっちゃったよぉ！」

「私のエビチリに毒でも入っているとでも？」

「あ、そっか。ならこれは安心だねえ」

そう言っただけ大きなエビチリをガブツとほお張る。

「……大胆ですわね。あ、口の周りがエビチリソースで真っ赤に」

「あふう」 これほいしい」

茜は目をキラキラ輝かせ、口いっぱいにもぐもぐと、実に幸せいっぱいな表情だった。

「全く、そんなに口を汚して……。子供ですか。ほら、こっち向いてください」

「ん？」

茜が千鶴の方に向くと、千鶴が手元にあった布巾で茜の口元を拭いて行く。

「むふくっ」

「ほら、じつとしてくださいな」

その微笑ましい光景は、はたから見たらラブラブに見えていた。

「おーおー、いい絵だこと……」

林はニヤニヤと顔を歪ませて眺める。

「そ、それは百合ですっ！」

そんな声が突然、茜達に向けられる。

「んみゃ?」「なんじゃ?」「はっ、百合……。」

皆が声のした方に向く。だがそこには柱一本あるだけだった。

「……………なるほど。よっつ!」

林が椅子から急に飛び出してその柱に向かって突っ走った。

「え? ひゃああああっ!……!」

その林の気配を察したのか、柱の裏に居た女の子が慌てて逃げ出した。

三つ編みされた一本の下げがしつばの様に動いてジグザグとテールの中を移動していく。

身長がかなり低く、小動物と思わせる様なその動きの速さに、林は驚く。

そしてあっという間に距離を離すと、食堂から出て行ってしまった。

林もその動きを見て、出入り口の方へ廻る様に移動していたが、相手の逃げ足の方が速く廻り込めなかった。

「くっ、後もう少しの処で……。トムゾンガゼルの様にすばしいヤツ……」

逃がした獲物はでかかったと言わんばかりの悔しさで林が戻ってくる。

「あ、林がああの目の輝きをしてる。もの凄い物を造る時の……」

「本当。いつもと違って、目の色が違いましたわ」

「いや、なんか面白そうな事だったんでね。今度来た時はトラップしかけて捕獲と参りますかな。どんなの用意しとこうかな……。オースドックスに捕り餅などは……」

林が実に生き生きとした本気の目になっている。こう言うのをもっと世界に役立つ事に向かって使って欲しいと思う千鶴であった。

「お待たせいたしました」

そんな中で、千鶴が頼んでおいたメニューがワゴンに載ってやって来た。

「できるの早いじゃん。冷凍物とかないよな。まあ、千鶴へそんな

のさすがに食わせるコックじゃないよな」

「ええ、生徒会会議が終わる時に造る様に先に連絡を入れておきましたから。こっちへ来たらすぐに食べれる様に」

「便利だよねえそれって。こっちのランチじゃ出来ない事だけど」
ワゴンに載せられたメニューが丁重に次々に千鶴の前に並べられていく。

「御苦労さま。調理師とちゃんと分けてください」

そう言ってチップとして千円札を渡す。

女性ウェイターはお辞儀をするとワゴンを持って去っていく。

此処の学食は一般人が普通に食べるランチの他に、高級レストランと同じメニューだって頼める。価格だって高級レストランと変わらない。1万円クラスのだって当たり前にある。

そんな一般人が口する事がないような物を、茜はじいっと見て、千鶴に問いかけて来た。

「ねえ。これって何？ 魚だけど……。キジハタ？」

そう言って千鶴の前に置かれている料理に興味心身と言った感じで見ている。

「ええ、キジハタで合っていますわ。キジハタのソテーです。さすが漁師の家柄でありますから、この状態の魚見てもわかりますわね」
「こんな状態に盛られたキジハタなんて見た事ないってば。焼き加減や飾り方だって、私の今までみたキジハタと違うし。でも、一番近い中で選んでのアタシの感は、キジハタだと思ったんだ。漁師の子として恥じない結果でよかったよ」

茜は正解した事に嬉しくてガッツポーズを取っていた。

「これは何？ ラザニア？」

「ズワイガニのスープですわ。」

「このデザートはミルフィーユだね。載っている苺が美味しそう」
「わー……。見てよこれ。私のランチにもショートケーキがあるんだけど、この苺の違い」

そう言つて林は自分のランチに置いてあるショートケーキの苺を見せる。

千鶴のは丸ごと一個あるのに、林のは半分切られて置いてある。「まあ、しょうがないんだけどね。値段に差がありすぎるもんね。使つて苺は一緒見たいだし、この部分に文句いったら全体の材料費に比べたら赤字当然なんだし」

文句言つた物の、味と値段によつて文句言えない立場だと分かった、林は調理師や此処のオーナーさんへ謝罪の気持ちを心の中で言つた。

「しかしながら、今回、初めてお2人と食事をしますが……。その食べ物は何ですか？小麦色したトゲトゲとする丸い物体わ。そつちのエビチリはわかりますけれど……」

「ええっ！？知らないの！このメンチカツをつ！」

「ええ……。それに似た物はよく見かけていますが、この様に丸い物体で、さらには芝生の上に載せた物は見た事ありません。家畜用の食べ物ですか？」

千鶴はマジな顔してそう言つてきた。

「ひ、ひどいよっ！これが家畜の食べ物だとか芝生だとか！これはキャベツの千切り！キャベツは分かるでしょ。そのキャベツをザクザクと細かく切つた物に載せてあるの。このキャベツとメンチカツの相性はバツチリなんだからっ！疑うなら、最後の一個食べて良いよっ！」

そう言つと茜は自分のお皿を持って千鶴にぐいっとな押しつける。

「えっ？あ……。」

千鶴は一瞬考える。だが、そのメンチカツを見て喉を鳴らす。

「そ、そうですね……。良い機会ですわ。ワタクシも一般の方々の食事はどのような物か知らなくてはいけないと思っていました。ただ、周りがそれを許されなかったので、できませんでした。今なら……」

意を決するとフォークを突き刺し、そしてナイフで切ろうとする。

「そんなマナーいらないんじゃない。そのままフォークでグサツと刺してさ。口までもってガブツとね」

「ええっ？　そ、それははしたない行動ですわよ！」

「ナイフ入れる方がこっちには失礼なんだよ。まあ、食べ方は人それぞれでいいんだろうけど。千鶴が良い機会って言うなら、こっちはこっちの礼儀での食べ方しなきゃ」

そう言われて千鶴は戸惑う。

「……わかりましたわ。ジャングルの奥地では、ワタクシ達には昆虫であっても、彼らにとっては命の糧。食文化の違いはあれど、その地に居ればその地に習うのが礼儀。行きますわっ！」

「メンチカツが虫と同じって、どんだけエグイ食べ物になるんだ……」

林は苦笑しながら、世間知らずの有名なお嬢様の口に入り、その世界を広める代表としての名誉を持ったそのメンチカツの栄光を見届けた。

「カプツ！」

サクッ！

景気の良い音になり、メンチカツは食べられた。

茜と林は千鶴の第一声を静かに待つ。

サクサクと言う音からもぐもぐとし、そして喉に通って行った。

「……これは！」

目を閉じて味わった千鶴が驚きの表情をする。

「美味しいですわ！　今まで食べた中でもシンプル。だけれど、素朴ながらに深みのある味。いえ、バランスの取られた味。歯ごたえと言う触感。その奏でるサクサクの音の心地よさ。これがメンチカツ……。これは、どのような製法で作られましたのっ！」

千鶴が感激と言わんばかりにメンチカツを絶賛してくれた。

「んー、普通ならお肉をミンチにしてこねて……、パン粉とか入れて繋ぎにしたりして……。卵と片栗粉、またパン粉に付けて、後は油でさっと上げるだけなんだけどね」

「それで出来上がりますの？」

「普通のはそうだね。こっちは手が込んでそうだけども……。でも、普通の肉屋で売ってるメンチカツも負けずに美味いけどね」

「あっ、あの虹の橋商店街のお肉屋のメンチカツは美味しいよね。じゃあ、今度そっちにも千鶴を誘ってみようよ。こっちよりも千鶴には、より新鮮じゃない」

「商店街ですか……。聞いた事はありませんが、足を運んだ事のない場所ですね」

千鶴は興味心身と目を輝かせている。その未知なる世界は、千鶴にとっては遊園地となんら変わらない存在になっているだろう。子供の様に無邪気でワクワクした目をしていた。

「じゃあ、決まりだ。っていうかさ。最近の千鶴って、私達のノリによく載ってきてない？」

そう言われて顔を赤くする千鶴。

「ワ、ワタクシはただ……。庶民の事も理解しなければと心改めましたの。先ほどの様に世間では一般的であるメンチカツさえもこの始末……。狭い視野で見て覚えた世界は、ワタクシの為にならないと思います。庶民を知る為に一番身近にいたのが、アナタ方だからですわ」

千鶴はそう言う風に答えてしまいが、茜と林は互いに見合ってニヤニヤしていた。

「そっかあ。こっちはお嬢様から知る常識外れな事ばかりでもう満腹だよ。じゃあ、今度はこちらがごちそうしてあげるからね。いっぱい色んなところ遊びに行こうよっ！」

そう言って茜が千鶴の手を取る。ちよつと千鶴は気恥ずかしそうだが、茜の心遣いの思いが込められた手が暖かく幸せになる。

「ええ、是非お願い致しますわ」

千鶴は満面の笑みだった。

（ワタクシとこうして対等に見てくれる方なんて、本当……。いまませんもの……。）

「あ、そそつ、千鶴。そのメンチカツ全部食べちゃっていいからね」「え、しかし……。これは茜さんにとってはお高い食べ物ではありませんか。人へおごれる程には、茜さんの家庭は豊かでわ……」

「もお、メンチカツくらいは奢れるよ。アタシの家ってどんだけ貧乏家族？ そんなのじゃ、この学校にさえこれないって」

「このランチの値段も知らなかったのか。それ280円だったよね」「え？　いくらですか？」

「280円だよ。あつてるよ」

そう言われても尚も千鶴は混乱している。

「えつと。ああ、28000円を100で割ればいいのですわね。しばらく使わない程の小さい額でしたから、どのくらいの価値が一瞬间わかりませんでしたわ。しかしながら、その美味しさでその値段で食べれるのでしたら、ワタクシの今食べている物なんて、大した味ではないのですわね。今度此処のオーナーに言いませんと。額と値段が釣り合っていないと……」

それを聞いて茜と林は呆れた。もうビックなお金持ちとはことん自分達と違う感覚の下に生きているんだと思った。

「さて、千鶴とも打ち解けあった事だし、今回集まった目的を進めようじゃないか」

そう言つて林が仕切り始める。

「坂本先生からは、水泳部員が後3人は必要と言われた。その3人をどのように確保するかが、今回の課題になっている。諸君、何かこの問題に得策と思われる案はあるかね？」

林は何故かテーブルに肘をついて手を組み、何かのキャラを真似ているのか、上目づかいで茜達を交互に見た。

ちよつとした偉い人風になった林のノリに、茜と千鶴は笑った。「そんな物。ワタクシが頼み込めば一番早いと思ひましたわ。ワタクシのファンクラブの者に声を掛ければ、あつという間ではありませんか」

千鶴はもう決まりねと言わんばかりに自信満々に言う。

「だーかーらー。そんなんじや駄目だつてば。恭子先生も言った通りだと、自分達が取り組む種目には本気で挑まなきゃいけないと。だから、千鶴目当てで入られても、やる気のある無しでの差で、全然成長が違ふよ」

「確かにそうだね。それに、茜が言つてたやる気のある人に入つて楽しんでいきたいってのがあるし。私としても、千鶴ばかり見てやる部活は面白くないし。『部活をやる』人に入つて欲しいと思うよ」

「ですわね。ワタクシとしても、部活中にいつもあのような高貴な眼差しで見られて続けては、泳ぎの練習にはなりませんわ。寧ろ、その様な練習する姿を見せる事が、ワタクシは許せませんわ。彼女達の夢を壊しますもの」

「アイドルつても辛いもんよねえ……。私もさ。もっと周りの目を気にして行動しろつて言われるけど、私は私で居たいんだよね。それ以外の私つて、なんか面白い気がしないし」

そう言つて林は窓の外の空を見上げる。昔の出来事を思い出して、複雑に悩む表情をする。

目は少し虚ろになり、生きる事を諦めた絶望を抱えた人の様に見える。

「あい、でね！ そんなやる気のある部員を見つける為の秘策がアタシにはあるですよ！」

林の暗い過去もぶつ飛ばすくらいに林に元気に拳手してくる茜。

「はい、茜くん。キミの意見には期待しているよ」

林は茜の元気を貰つて自分自身の調子を取り戻し、また偉そうになつて調子に乗つた。

「今回はターゲットを絞り込んで、そこに集中してみようと思うんだ」

「ターゲットの集中ですか？」

千鶴はどのような事がまだよくわかっていないようだ。

「そう。今までの部活の募集は、学生全体に声を掛けていたんだよ

ね。それだと、伝える気持ちが薄くなると思うんだ。薄くなったら、その入ろうって思う情熱も冷たいんだと思う。だから今回は、一ヶ所に勝負を決めて、私達はこれをやるんだと、熱い情熱を全てにそこに注ぎ込み、相手にやる気の熱意を伝えるんだよ」

「一点集中か……。例えば強固な壁も、一ヶ所を何度叩かれればそこは脆くなり、いつかはそこに穴が開く。確かに、やる気の起きないこのお嬢様達の群れには、どこか一点に集中し、その熱意を起こさせてみないと駄目かもしれないね」

茜の提案に、林もその良さに引かれる。

「しかしそれですと、2週間の内に集めるには針の穴に糸を通す作業ですわね。狙った場所に本当にその様になる人物がいるとは限りませんからね」

千鶴がその案の欠点を考え、意見を言う。

「そう。そのターゲットの狙い目が大事なんだよね。だから、そのターゲットはもう決まってるんだよ」

「決めていきますの？ それはどこです？」

茜は窓の外を見て、その場所を指差した。

「新人生の一年生だよっ！」

そこには自分達の制服に付けられている胸のリボンの色の違うお嬢様達がいた。1年は緑、2年は青、3年は赤と学園が変わる毎にそのリボンが貰える。

「おー……、ま、定番だね」

「ですわね」

もっと凄いのを期待していた2人が、落胆する。

「けど、また此处をより絞り込みますっ！」

その言葉に林がおっ？と興味引かれる。

「ほお、何処を狙うよ？ 私は、1年全体で良いと思ったけど」

「アタシ達の一年生を思い出してみてよ。部活やる気のない人は、真っ先に遊戯施設などに行ってるじゃない。そして部活に興味ある人は、今、各部活で部活見学しているんだよ」

「そうですね。此処の人達は優雅独尊でいる人達が多いですから、ハッキリわかりますわ」

「うん。あつ。良い例を発見！」

茜は窓から見える光景の一角を指差して皆の目線を集める。

「今あそこに見えているのだけどさ。庭園でお茶を楽しんでいる人に、バレエ部が踊りを披露して、自分達の部のアピールして誘っているじゃん。けど、結局見るだけ見て、入る気は全くないんだよねは」

「つまりやるだけ無駄になっている」

「そう。そんな無駄な時間は避けよう。期間が限られているのだから」

「効率的ですわね」

そして茜は自分自身の問題についても考えていた。

「そして第二に。アタシを知る一年生は殆ど居ないって事だよ」

「だねえ……。舵守 茜って言うだけで、関わりを持ちたくないって人多いからね」

茜がタハハーと笑う。自分が犯した問題の数々を反省していた。

「けどさ、部活見学回りにしているのか、遊びまわっているのかは、結構判別付きにくいものがあるけど。ちよつと休憩にさっきの様にお茶を飲んでいる処だったかもしれないし」

林はこの案は良いと思ったが、問題点を上げた。

「それに、部活と言っても茶道や生け花部などもあつて、その方々が運動部である水泳部に興味を持つとは思えませんか」

「それも考えてあるから大丈夫だよ」

茜は胸を叩く。千鶴は茜がこの様にリーダーシップのある魅力的な部分があるのかと知った。

そんな茜にちよつと千鶴は素敵な人だと心引かれていた。

「その作戦はね。横取り作戦だよっ！」

だが、その一言で千鶴はちよつと考えが変わった。

「弓道部やバレエダンス部に貼り込み、丁度部活見学終わって出て

来た処に声を掛けて、こっちの部に入らないと言っただよ。探す手間も省けて、確実に部活をやるうとして人達だからね。弓道部とバレーダンス部は多少体を動かす運動部に入るから、水泳の様に体を動かしたい人達がいる存在も大きいと思うんだ」

「そうだね。その方が区別しやすいし、探し回る手間も省けるな。それで行こうか」

林もこの策に賛成した。

だが千鶴は思った。それって姑息ではないかと……。

「千鶴もそれでいいよね」

林の答えに、微妙な気持ちだが期限と此処の学園の特殊的な状況からこの作戦がベストと思い領いた。

「よし！ ねえ、千鶴は生徒会だから今回の部活見学のスケジュール時間は把握できない？」

「え、ええ……。その資料ならすぐにコピーしてきて持ってこれます」

「んじゃ、それで決定だね。早く食べ終わって、張り込み開始だよ」

茜は最後の林から貰ったエビチリを食べようと箸でつまんだ。

たっぷりと残ったソースをエビに付けて口まで持ってきたが……。
ぽとりっ……。

「茜さんっ！ ソースが胸につ！」

「はむっ！ ん？ んあぁーっ!？」

茜はエビチリを口の中に放り込んだ後、自分の胸にエビチリのソースが落ちていたのを見た。

「し、しみになふうー……っ！」

「布巾をっ！」

千鶴は茜の胸に自分の布巾を当ててソースを拭き取る。だが、その紺色のブラウスにくっきりと黒い感じで後が残ってしまった。
「ううー、ちよっとトイレ行って水で落としてみるよ」

そう言った茜が席から立ち上がり、慌てて食堂から出て行った。

「……ま、茜らしいな。いつでも茜の周りは静けさってものがない

んだよね。どおよ？ 茜とこれから一緒に部活やっていくのにさ」

そう言って林が千鶴に声を掛けてくる。

「ええ……まあ……。今まで見た事のない人ですわね。これから慌ただしくなりそうですが、まあ……、1年の時にも色々と振りまわされましたし、今年も同じクラス。ワタクシの目の届くところに居ておいた方が安心は致しますわ」

千鶴は取り合えず自分の食事を進めていく。

「ははっ、千鶴は茜のママかっての。でもさ、面白いよね。見ていて飽きないし……。それに不思議と見て居たくなる魅力もある。次は何してくれるとワクワクさせてくれる」

「ええ、あまり騒がしいのは好きではありませんが、彼女は迷惑と思う部分と面白い部分が混ざって、憎めないですわね」

「後の3人も千鶴みたいに、茜の魅力に引かれて入ってくるのかな」

「ワ、ワタクシは茜さんに引かれておりませんわ。ワタクシはワタクシ自身で自分のトラウマを克服する為に……」

「何言ってるのさ。私達と一緒に居たいからでしょ。茜も知っているって」

「なっ!? なあっ!!!?」

その言葉に動揺してフォークとナイフが手から落ち、床に落ちる。傍にいた女性のウェイターが瞬時に新しいフォークとナイフを用意した。

「申し訳ありませんでした」

そう言って千鶴はウェイターに声を掛ける。ウェイターはお辞儀してその場から去った。

（早い……。しかも今の動きの動作は、普通と違った。アレに近い物だったな……）

林は、此処のウェイター達からは只ならぬ気を感じた。

（まさか……。千鶴専属のその場の人達の雰囲気擬態するSPだつたりして……。ちよっと、試してみるか）

「千鶴ってば顔に出やすいんだから、そんなんじゃ私達のオモチ

「ヤだよ……」

そう言ってからウェイターをチラリと見る。

何かウェイターの手の平にきらりと光る物を見た。

林はハッキリを見た。注射針だった。

さつき千鶴が言った通り、証拠が得的しにくい毒殺に用いる物なのだろう。

（やっぱ、まあ千鶴程のお金持ちなら普通は付いているもんな。余り調子に乗って千鶴にイタズラするとやられる……）

「でも、千鶴は私達にとって大事な友達だよ。オモチャになんてしないよ。大切な、この世で掛け替えのない仲間だからね」

林は慌ててフォローを入れる。

「は、はううう……」

千鶴は林の言葉攻めで、顔を真っ赤にして落ちてしまった。

「あ、ありや？ 逆効果？ おーい、千鶴？ 千鶴ってば……。マジでそこまで落ちた？」

林はやバいと思ってウェイターの方を見る。だが、そこにウェイターの姿は居なかった。

「えっ？」

「こちらですよ」

自分が向いた方向と逆側から声が聞こえる。

「うおっ！ やっぱりSPだったっ！ 私は何もしてないっ！ 千鶴がちよつと勝手にのぼせ上ってしまっ……！」

林は慌てて席を立てて女性ウェイターから離れる。

「驚かせて失礼しました。相手の後ろに廻ってしまうのは癖でして……。しかし、感の鋭い人ですね。私がSPである事が気づきになられていたようで。先ほどの注射針は失礼しました。アレは栗原様への見せしめではなく、千鶴様へ使ったものでして」

「え、じゃあ……。今こうなっているのは、さつき近づいた時にやったのか」

「はい、少々ワタクシと栗原様とで、お話がしたいと思いましたの

で、失礼ながら小時間お休みになつてもらいました。周りが騒がれるといけませんので、舵守様の席をお借りします」

そう言つて女性ウエイターは千鶴の隣の茜の居た席に座る。林も同じように自分が座っている席に戻つて向かい合つた。

「最初にワタクシ達SPが千鶴様を陰ながら警護しているのは、ご内密でありますから。栗原様もその様に理解して頂けますか？」

「あー、大体察するよ。父親が母親が心配だから付けたいけれど、周りにそんないつでも置いておきたくない」と千鶴が言つてゐるんですよ」

「本当にさすがに読みが良い。ヘタに話をする、知つてしまわなくとも良い事も知られてしまいそうだ……」

「はいはい。気を付けるよこつちだって。ヘタに知つたせいで、お命頂戴は嫌だし。で、行き成り何？ 私の目の前に出てきて」

相手に敵意は無いようなので、林もさつきよりリラックスしてきた。

「ええ、ワタクシ達SPから栗原様、舵守様へお願いがありまして

」

「千鶴を水泳部をやらせるな。とか？」

女性ウエイターのSPが首を振る。

「いいえ、その逆です。千鶴お嬢様が自分自身で決めた事は、ワタクシ達は全力で応援に回ります」

女性ウエイターSPは一つ咳払いする。

「ワタクシ達は、千鶴お嬢様の護衛の警備に着いてから幾年も流れました。それによつて分かつた事は、千鶴お嬢様は不遇な生活をしていらつしやると……」

「さつきのメンチカツや金銭感覚で大分感じたよ……」

林はさつきの出来事を思い出した。

「ええ、ワタクシ達は確かに千鶴お嬢様をお守りするのが御役目。千鶴お嬢様を正しい道にお導きする事は仕事には入っていませんが、見ているだけで心苦しいのです。助けを出してあげたい。しかし、

ワタクシ達では表に出て接する訳にもいかず……」

女性ウエイターは千鶴に近づいて、くたりとしている千鶴を出来るだけ楽な姿勢になる様に整え始めた。

「しかし、先ほどの千鶴お嬢様との栗原様と舵守様とのコミュニケーションは、千鶴お嬢様にとって転機と見ました。どうか、ワタクシ達に変わって、千鶴お嬢様を正しき道へとお導きください。それがワタクシ達からのお願いであります」

そういつて深々とお辞儀する女性ウエイター。

その話を聞いた林はやれやれと言った感じに軽く答えた。

「あー、それ断るわ」

「えっ？」

予想外な答えに、女性ウエイターSPが首を上げて驚いている。

林は自分のコップに入っているリングジュースを一杯飲んでから答えた。

「頼まれたからするんじゃないかって……。私達から一緒に友達になりたいんだよ。そして普通に一緒に楽しみを共有したいんだ」

ちよつとその台詞が恥ずかしかったのか、顔を赤らめて目をそむける。

「でも一緒に楽しみを共有するには、こっちの事も色々としてもらうから、千鶴に色々しちゃうけど、心配しないでくださいね。ちゃんとその類は弁えておきますので」

林はこう言う台詞を言うのが苦手なので段々とぶっきらぼうになつて答えて行つた。

「ああもう。もう千鶴とは友達なんですってば。頼まれなくなつて茜と一緒に私達なりに楽しめますって。余計な感じで頼まなくなつていいんですってば」

それを聞いて何も言わずに考える女性ウエイター。そして微笑んで笑顔を送つて来た。

「アナタ方の様な人達が、この学園に居てくれてよかったです。そろそろお嬢様も目が覚めそうですのでこれにて失礼します。どうか、

お嬢様をよろしくお願いいたします……」

そう言つて女性ウエイターは再度、お辞儀すると、自分が居た位置へと歩いて行つた。

（全く……。類は類を呼ぶと言うのか。やっぱり私の周りの人も、普通の人になれないな）

林は千鶴を見た。やっぱり千鶴も自分と同じで普通にはなれない人生を歩んでいくんだろうと思つた。

「ん……。あ、ワタクシはどうして……」

千鶴がそう目覚めて周りを見回す。

「はっ、そうですわ！ 林さん、ワタクシは決してアナタ方を……」

「ねえ、千鶴」

千鶴が言いだすの遮ぎるようにズイツと近づいて、林が強引に割つてくる。

「な、なんですか？」

その押に負けて千鶴は椅子ごと後ろに下がる。

「プリクラって撮つた事ある？」

「プリクラ？ いえ、耳にはした事がありますが、一度も……」

「じゃ、帰りにプリクラ撮りに行く事決定だね。時間はあるよね？ 私らとの結束記念プリクラを撮ろうじゃんか」

「え、ええ……。ってワタクシは……」

「もう、いいじゃんよ。私達って友達だよ。っね」

そう言つて今まで林が千鶴が見なかつた様な笑顔を見せる。

それは本当に信頼した、相手を疑う事をしない、明るくすがすがしい笑顔だつた。

「……………」

千鶴はその観た事ない林の笑顔に見とれた。

「もお、ほら。食事進めなきゃ。食わないなら私も食べるよ」

「あ、ええ……。でしたらこちらのラザニアをどうぞ」

「あ、ひっどいー。さっきの私の間違えを。スープでしょそれ。もう……………」

そう言っ て林は面白そうに笑う。

それにつられて千鶴も笑い出す。

（茜さんもそうですけれど……。林さんも素敵な魅力をお持ちですわ……。）

林は千鶴からズワイガニのスープを受け取って一緒に食べたのだった。

造ろっつ！水泳部っ！　　ゝ　　2　　ゝ（後書き）

自分がいた学校には、学食なかったなあ……。

そんな夢をここに載せてる感じです。つつか、ありえねーなこの学食は。

夢見た学食をさらにランクアップさせたのがこの学食です。

次回は、水泳部のライバルとなる弓道部の話。

その弓道部には、茜達が苦勞の末、ようやく出来たテニス部に入った2人がいます。

その彼女たちの話になります。

造ろっつ！水泳部っ！　　3　　

　　3　　

ここは弓道部の練習場。

今まさに一年生の見学オリエンテーションがここを訪れている。
一年生が陳列する席の前で、部長らしき人物が前に出て声を張り
上げている。

長く伸ばした黒髪は後ろに束ねられている。顔立ちはとても精錬
された凛としているとも凛々しい人だった。

「皆さん。ごきげんよう」

その声に、おしゃべりしていた一年生も静かになる。

「新一年生の諸君。ようこそ、我らが弓道部へ。ワタシは部長の銀
華 美鴨と申します」

銀河 美鴨。彼女は千鶴と同じく2名いる生徒会副会長のもう一
人である。ちなみに2年A組に居て、茜達とは違ったクラスである。

「我が弓道部は去年の栄えある全国大会で名高い選手を押しつけ、
弓道会では名も無き我が学園が1位と2位と独占し、弓道会に名を
刻んだ名誉ある部になりました」

その発言に一年生は拍手喝さいを送る。しばらくその拍手に酔い
しれてから、制する様に手を上げる。

「君たち一年生も、我が弓道部のその栄光を聞いて、見学に来たの
だろう。だが、弓道はそんな甘くは無い競技である。この美鴨も2
位と言う座に着くまでは、その努力は他の部員よりも長く、厳しい
ものだった。だが安心したまえ、このワタシや1位になった狐紫と
6位だった時雨とが君達を指南し、高見へと導こう。実力あるワタ
シ達が教えれば、君達の中にもワタシや狐紫を越え、栄光を手にする
者が現れるかもしれない」

その言葉に一年生が華やいだ。

「百聞は一見に如かずっ！その才能を見てもらった方が早いだろう。まずは全国6位の實力から見てもらおう。時雨！」

その名を呼ばれて、静かに鎮座する部員の中から一人立ち上がる。
押霧 おしぎり 時雨 しぐれ。茜達と同じ二年B組になった。

そして昔、茜達と一緒にテニス部をしていた人物の一人だった。顔は美少女と言うよりは、美青年に近く、髪も短めに切ったベリ―ショートヘア。長身でスレンダーな体系がさらに美青年に引き立てている。

その容姿に一年生から黄色い悲鳴が上がる。

「2年B組。押霧 時雨といいます」

そう言ってお辞儀する。

「やだ、かつこいい……」

「いや〜ん♪ 私、超好だし〜♪」

「王子様よ。王子様っ！」

一年生から色々と声が聞こえてくる。

「えっと。一応言っておくけど、ボクは女だからね。ボクって表現するのは、ちょっと生い立ちに色々あって、この口癖は身に付いてしまっただけに直せなくなっているけど……」

「彼は去年の12月に入っただが、全くもって弓道を知らないド素人だった。しかし、ワタシと共に昨年の部長であった桃杉様に指導してもらい、たった2カ月で6位になる程の才能をもった人物だ。ちなみにあだ名は、『王子様』で問題はない」

王子様と言うキーワードにさらに悲鳴が上がる。

「あの、美鴨部長。そのあだ名はもう辞めませんか？それと彼ではなく『彼女』と表現して頂ければと……」

「さ、話は以上だ。君の實力を見せたまえ」

時雨の話を聞いていないで、さっさと進行していく美鴨だった。時雨はため息を一つついて諦め、射程の位置に立つ。

「君達には弓道の射法八説を見てもらおう。これは基本であり、大切な事だ。まずは足踏みから始まる」

美鴨の説明が始まると共に、それに合わせて時雨も動作をおこなって行く。

一つ一つの動作が弓を引く者、周りで見る者の周りの空気が気に満ち溢れて行く。

その動きはまさに芸術と言える程、美しく、見る者に麗しい心を与えてくれる。

そして『会』。弓道で一番よく見られる弓を引いて停止している状態になる。

一年生はその静けさと時雨の集中する気に押されて、瞬きを忘れて息をのむ。

白黒の円の的は直径36cm。時雨の位置から60m離れている。時雨の位置から見れば、その的は1cmの大きさも満たないだろう。さらにその場所は屋根の空いた中庭の様な場所。時折、吹いている風が放たれた矢をずらすだろう。

時雨は時を待った。長い様で、その短い間を少しも気を途切れさせずに、的だけを見続ける。

「……………っふ！」

息を吐き出しだと共に弓の弦を掴んでいた指を離す。

矢は一瞬にして的へと飛んで行った。

ザクッ！！

紙を破るその音が鳴る。

放たれた矢は見事に的の真ん中を射止めていた。

「おおっ！」

「凄い、真中に当たりましたわっ！」

「カッコイイッ！！」

一年生から声上がる。

だが、その声を無視して時雨は次の動作を始める。矢筒からまた一本取り出した。

「まだ続くよ。今回はあの的に30本。一本も外さずに射止めて貰う」

一年生が驚きの表情をする。

そうして時雨はまた会の状態になり、精神を研ぎ澄ました。

そして2本目を当て、3本、4本目と続けて変わらずに……。

それは回を重ねるごとに時雨の疲労は見てもわかって来た。

若干手が震えたり、吐き出す息も荒くなっている。前髪やおでこには汗の滴が出来ていた。だが、その集中力は一時も途切れてはいなかった。

その成果は的に全て矢が刺さっている事に証明されている。

並大抵の集中力、才能や鍛練がなければ此処までの長時間を連続でやり、当てる事はできないだろう。

最後の30本目の会が始まった。

29本が的に居留められている。もう何処に刺さるのだと言わんばかりに矢が的に密集している。

時雨は最後の最後まで気を緩めなかった。額に汗が垂れ、例えばそれが目に入ろうとも雑念を全く捨て、的に集中して来た。

それを見守る全員が、最後のこの一本まで、時雨に合わせて身が固まってしまう、見とれてしまっていた。

時雨の息遣いが変わろうとしていた。その時、時雨は矢を放つ。

そのその一瞬を、もっとも集中して邪魔されたくない時に、美鴨が時雨に話しかける。

「最後の一本だ。外すなよ」

「っ！」

その言葉に時雨の片目がピクリと動く。今までの張りつめた気が一瞬だけ揺らぐ。

だが時雨は呼吸を合わせる。

「っは！」

矢が放たれた。

その振動で前髪の汗も飛ぶ。その滴がゆっくりと落ち、太陽の輝きでキラリと光る。

ザクッ！

そう音が鳴ると同時に、時雨の表情が強張る。

矢は的に当たっていた。だがその矢は一番外側の黒丸に刺さっていた。だがそれは今まで刺さって来た矢と違って、何かが微妙に違う、本当にギリギリに迫った刺さり方だった。

「ふむ。ギリギリだったか。だが、本番じゃないからだろうな。次は外すぞ。まだまだだな、時雨。例えどんな状態でも気はそのだけに集中しろ」

時雨は息を思いっきり吐き出し、残心をして礼をする。

「取り合えず的には当たった。30本中30本の命中。会心だったよ。彼の努力と技術に拍手を送ろう」

そう言って美鴨が拍手すると同時に一年生や部活仲間からも拍手喝さいが上がる。

時雨は汗を拭き。また一例すると、自分の座っていた位置へと戻る。

部員仲間から労いの言葉を時雨は貰い、照れ笑いを浮かべていた。その時雨達の座っている部員の何名かが立ち上がって、何やら物を持ったりして動き出した。

「さて、次は2位のワタシの実力を披露しようか。彼のように30本やっては時間が掛かってしょうがない。だが、高度な技でなければ皆も先ほどの神業からでは、ワタシの妙技を見ても冷めるだろう」

そう説明する間にも先ほどの部員がセット完了しました。と言って自分達の位置へと戻って行った。

「ワタシが今からするのは、あの3本の薔薇を一本の矢で射抜こうではないか」

そう言って指差したのは、花瓶に刺さった白いバラが40m先に赤いバラが60m先に配置されていた。

そして最後の一本の青いバラ。それが100m地点に配置されている。遠目で見て、アリよりも小さく見えてしまう。

あの小さく見える薔薇を3本同時に居抜くなんて芸道が出来るのか。

またも一年生から驚きの声上がる。

「では、始めるとしようか」

美鴨は自分の弓と矢筒を取ると、その薔薇と自分の位置が一直線になる場所を見定める。

そしてその場所が決まり、足踏みを開始する。

美鴨の射法八節は時雨の気迫が溢れるのと違い、とても優雅な動作で始まる。

気が高まるというよりも、見とれてしまう程の美しいフォームで動いて行く。

会の状態になっても、余裕のオーラが出ていた。

一瞬訪れた緊張感の後、それがあつと言う間に矢が放たれた。

それを見ていた一年生は、その一瞬の行動に追い付けず、目を丸くして放たれた矢を目で追っていた。

飛んで行った矢が最初の一本の薔薇が花弁を散らせ、二本目を射抜き、そして最後の一本も散らした。

「ふっ……」

美鴨が鼻で笑い、そして余裕の表情でその散り舞う薔薇の花弁を眺めた。

あつと言う間の出来ごとに、一年生はぼかんとしている。

美鴨は残心をやって礼をすると、自分の持っていた弓と矢筒を近くに來た部員に持たせて、一年生へと近づいていく。

「ワタシは時雨と違って早打ちの方だね。だが、この部員の中で誰よりも射法八節の美しさは負けては無いと思うけどね。どうだったかな。ワタシの射法八節は」

「素晴らしかったですっ！」

「美しいっ！ 実に美しいっ！」

「美鴨様っ」

一年生からの歓声に美鴨は満足の顔で浸る。

「これが二年にしての部長の実力。銀華 美鴨の実力さ」

そう決め台詞を言う。

尚も上げられる歓声に少し浸ってから制する様にまた手を上げる。
「さて、メインディッシュと参ろうか。彼女は超人だ。ワタシが努力で全国で2位まで上り詰めたのだが、彼女はその得意稀で手に入れた能力で1位になった。ワタシも彼女の能力には全く敵わない。紹介しよう。瀧 狐紫だ」

そう言われて、静かにゆっくりと立ち上がる。

変わった名前の瀧 狐紫。彼女も茜達と同じ2年B組になった女子だった。

そして茜達とテニス部を造った四人の一人。

長い白髪のを後ろ束にしたふわふわのポニーテール。身長は160センチと年頃の身長。体付きだって平均的ではあるが、誰もがその特徴ある物に目が行ってしまっている。

「彼女の左目と首につり下げているボードが気になるかい？」

そう美鴨が言う。

狐紫の左目には自分の家の家紋なのか、シャクナゲの花がデザインされた眼帯と、首からかけられた白いボードがあった。

「狐紫はこの部活に入る前の4ヶ月前に大事故に遭い、左目の視力を完全に失い、そして脳に損傷を受けて言葉も失った。その左目は見せるかい？」

そう美鴨が言う。狐紫はその右目だけで美鴨を見ると、首を振る。

「そうか。彼女は声を発する事が出来るのだが、言葉にする部分の脳が損傷したらしく、自分が発したい声が出ない状態である」

「ええ、らうあ、かあー、びっ、まうー。きば、ああ、ふいーりえ」

そう言葉を発しながら、懐から取り出したマジックで、白いボードに文字を書いていく。

そしてボードをひっくり返して一年生の方へと向ける。

『こんなのですが、よろしくお願いします』

「言葉が上手く出ないだけで、彼女は普通に言葉は理解できる。多少会話に不便だろうな。だが、彼女は失った物の分、手に入れた物はこの弓道では化け物並みの物を手にした。その神業をとくと披露

しよう」

その説明の後、先ほど矢を30本放った時雨が立ち上がり、的のある方へ走りだした。

「今からやるのは、口に加えたマツチに火を付けると言うものだ」

ええ！と一年生からまたもや度肝を抜かれた声が発せられた。

そう言つて狐紫の矢筒から一本の矢を出して見せる。

「この矢の先にマツチ箱の黒い部分がテープで張られている。マツチを折る事なく、点火させなければならない。ギリギリの摺れ方でなければ、マツチには火が付かないだろう」

時雨が60m先で止まり、口にマツチを加えて待機しだした。

「さらに彼に当ててしまわない様にとのプレッシャーの中でやらなければならぬ。先ほどのワタシの薔薇とは違い、重い責任がのしかかつてしまうのだ」

遠くに居る時雨が、何やら手や腕を動かしている。その動きに狐紫も答えて動かしている。彼女達は簡単な手話で会話ができる。

頑張れ、やら大丈夫と言う会話をしているのだろう。

「だが、一番の問題は他にもある。これは運もいれば、彼女の实力でなってしまうものである。それは、この矢の羽である」

美鴨は矢の羽を触る。

「この羽でせつかくマツチの先で擦っても、この羽が当たつてしまえばマツチは飛んでしまう。この羽は4つ付いている。その4つの一つの隙間に、マツチを通さなければならない」

その説明を聞いて、この技がどれほど高度な物かを一年生は思い知った。

「では、お披露目しよう。神の偉業をつ！」

そう言われて狐紫は手話を辞めて、白いボードを首から取り、美鴨に渡す。

時雨も横向きとなり、目を瞑る。いつ来るか知らない矢を、ひたすら静かに待ち続け始めた。

狐紫は自分の射る場所を決めると、射法八節を始めた。

「彼女の聞き手は右なのだが、見えているのが右目だけなので、ワタシ達とは違い逆になってしまう」

そう、彼女は右利きではあるが、左利きの人と同じ動作をする。

「彼女が失った物の代償に授かった物。それは右の視力が10・0とマサイ族も越える視力を持ち、驚異的な動体視力である」

狐紫が集中力を高める中で、一年生に狐紫の説明を始めた。

「人間が一秒間に24回から30回は光を感知し、認知するのに対し、狐紫は224回をも感知し、認知すると言う驚異的な動体視力を与えられた。だが、それを使うのはかなりの疲労が激しいらしく、普段は普通と同じ状態であるが、集中するとその様になるらしい」

狐紫は美鴨の説明に差ほど気にせず、会の状態に入ろうとする。

狐紫の目には、皆から見た位置からでは全く見えない、そのマッチがハッキリと見えているのだろう。

「その動体視力の速さで狙いは一瞬にして定まり、すぐに射抜く……」

狐紫は会に入る。

そしてすぐに矢が放たれる。

「……………っ!？」

そう皆が思っていた。

美鴨もそう言ったが、狐紫は動かなかった。

狐紫は時雨が加えるマッチを見ずに、美鴨と一年生たちが居る方を見ていた。

その様子に美鴨が眉を吊り上げる。

「どうした狐紫っ！何かあったのかっ？」

「くっぴっ！えーだっ！まーっ！」

狐紫は完全に会の状態を解いて、美鴨達の方に指を刺して何かを言いたそうにしている。

「ん？」

美鴨と一年生は自分達の後ろを振り返る。

「なんだと言いたいのだ？何も居ないぞ？」

「みいいーっ！ ふあっぱっ。れっ！ ふあっぱっ！」

狐紫は自分の懐に入れているマジックを取り出した。だが、自分の大事な白いボードが無い事に気が付く。

「ボードか？ ワタシが預かっているが」

そう言つてボードを見せて振る。

狐紫は急いでそのボードを受け取ろうと向かつて走った。

だが、その動きをすぐに止めた。

「ん？ さっきからどうしたのだ？ こむらさ……きいいっ！？」

狐紫は手に持っていたマジックをその場に捨てると、矢筒に入っている矢を取り出してすぐに矢を射抜く体制に入った。その矢先は、一年生が座っている位置だった。

「な、何をやっ……っ！」

その美鴨の制する声が終わる前に、狐紫は矢を放っていた。

「キヤアアー……ッ！」

迫り来る矢に一年生は悲鳴を上げた。

頭を抱えてしゃがみこむ者。隣の人の背中に廻つて隠れたりする者。

一年生は突然起きた事にパニックになっていた。

ヒュッ！

その矢が彼女達の頭上を越えて行った。

ガツンッ！ カランッ カラン……。

壁に矢が辺り、跳ね返つてその場に転げ落ちた。

「……………」

その惨劇に、一同は言葉を失い、一瞬の静寂が辺りを包む。

その場所最初に裂いたのは美鴨だった。

「な、何をしているのだっ！ 狐紫っ！ 人に向かつて矢を放つとはっ！」

「え、えうあ……。きゃーぴっ！」

狐紫は何かを訴えようとする。

「言い訳は無用だっ！ オマエは弓道会でやってはいけない事をし

でかしたのだぞ！ キサマは破門だっ！ この部活から出て行けっ！」

そう言って手にしていた狐紫のボードを思いっきり彼女に投げつけてきた。

狐紫は勢いよく飛んできたボードを驚く事なく軽く掴む。そして床に捨てたマジックを拾い上げて何か簡単に書いて見せつけた。

『ハチがいた』

「ハチ？ ハチって……。蜂か？」

そう言われた狐紫は必死に頷く。

「ど、どうしたんだよ狐紫っ！」

マツチを手にしてこっちに走って向かってきた時雨が狐紫に話しかける。

狐紫は時雨に手話で会話する。

「一年生の上にススメバチが飛んでいた。危なかった。でも、注意出来なかった。すぐにどっか行ってくれと思った。だけど、ススメバチが一年生の頭に近づいた。もう危なかった。ヘタに刺激したら刺される。そして、書くより、打った方が早かった。ススメバチは倒した。だそうです」

そう時雨は狐紫が言いたい事を変わりに言ってくれた。

美鴨と一年生が、先ほどの矢を見た。

床にはその矢とススメバチがつぶされた状態で転がっていた。壁にはススメバチの血の跡が付いている。

「あの距離から動きが読めないランダムで動いている、あの小さなススメバチを射抜くとはね……。狐紫はさすがだね」

そう時雨が言った。

その言葉に一年生の一人が声を張り上げた。

「す、すごいですうっ！ 神業ですうっ！」

間延びした声が続いて一年生たちが続いた。

「見るのに集中していて、近くに飛んでいたなんて、全然気が付かなかった……」

そしてやんややんやと一年生たちが狐紫を湛え始めた。

「あの一瞬で当てるだなんてすごいっ！」

「私達の救世主ですう〜！」

「蜂って大嫌いなやつ！　ありがとうございますっ！　助けてくれ
てっ！　ありがとうっ！」

一年生たちに狐紫は囲まれる。握手されたり、抱きつかれたりしている。

そんな狐紫を面白くなさそうに美鴨は見ていた。

「で、どうするのですか？　狐紫は部活を破門ですか？」

そう時雨が美鴨に尋ねて来た。

「そ、それは……。人に矢を向けて放つ事は、弓道としては……」

そんな言葉を聞きつけて先ほど最初に声を張り上げた女子が美鴨に駆けつけて言うて来た。

「でもお、狐紫先輩は言葉は話せなくて、必死にわたし達に訴えかけても出来なくて、仕方なくやった行動なんですよお！　わたし達が大怪我する処を救ってくれた行動なんですう！」

そう言う女子の隣にもう一人駆け寄っていて言うてくる。

「そうです！　やった行動はどうあれ、これは正義です！　褒め称えられるべき行動ですよ！」

そうやって続々と一年生がやって来て狐紫を庇い始めた。

「それに王子様にマツチを加えさせて、そのマツチに火を付けるって言うのも、人に向けて打つてると同じですよ。このアイディアは部長が出したものですよ」

部員の中からも何名か狐紫を庇う声も上げられて、数で責められた美鴨は屈した。

「わかった！　狐紫の部活の破門は取り消そう。彼女の正義ある行動に拍手を送ろう！」

そう言うて美鴨は拍手する。それに釣られて一年生も部員の何名かも狐紫へと拍手を送る。

そんな狐紫は顔を真っ赤にして照れてしまい、時雨に助けを求め

る様に後ろに回って隠れてしまった。

「可愛い〜！」

「顔が真っ赤になってる先輩！」

「王子様に守られたいっ！」

やんややんやと時雨と狐紫は囲まれて騒がれてしまった。

「ごほんっ！」

美鴨がわざとらしい大きな咳を出した。そして皆の注目を集めた。
「トラブルはあった物の、オリエンテーションを再開しようではないか。時雨、また配置へ戻ってくれたまえ。狐紫も今度は頼んだよ」
そう言って美鴨が進行を進めようとする。だが、部員の一人が美鴨へ言った。

「でも、もう時間的に私達、弓道部のオリエンテーションは終わりに近づいています。さすがにこれからやるには、時間がありません」
そう言われて、壁に掛けてある時計を皆が見た。時間は2時を回ろうとしていた。

「くっ……。しかし、少し延長してもいいでしょう。彼女の神業を皆さんは見たいと思っていますでしょうし。」

そういう美鴨の言葉だったが、一年生はノリ気ではなかったようだった。

「ススメバチを打つよりも凄いかな？」

「ワタシはススメバチの方が凄いと思うけど……。でも、マッチの方も見て見たい気もあるんだけどね」

「他の部活の見学時間も迫って来ているしなあ……。そっちにも行きたいよね」

部活見学オリエンテーションは部活全てがその活動が決められた時間で行っていた。余り重なった状態で部活見学が行われると、他を見学したいのに見れないと言う配慮から決まった事だった。

そして弓道部のオリエンテーションは2時に終了の決まりになっている。

そんな中、狐紫もボードに書いて見せてくる。

『2回もあれ程の集中をすると疲れしました。今も少し右目が痛みます』

「大丈夫？熱い布巾で目を当てて、休めようか？」

一人の部員が狐紫を気遣ってくれる。

狐紫もその言葉に力なく頷く。

「もう狐紫もこれじゃ無理ですね。これで閉めに持って行ってもいいんじゃないですか？」

時雨が美鴨に言う。美鴨は余り表顔に出してはしていなかったが、雰囲気からして実に悔しそうなが出ていた。

「そうですね……。では、弓道部の部活見学オリエンテーションはこれにて終了に致します。一年生の皆さま。最後は飛んだお騒がせになりました事、申し訳ありませんでした。けれど、弓道部の実力は皆様にお見せした通りです。全く弓道の知識が無い方でも、ワタシ達は確りと皆さんのサポートをしていきましょう。そして初めての方でも実力を発揮できるのは間違いありません。弓道部への入部ワタシ達はお待ちしております」

「よろしく願いますっ！」

『皆さん、ごめんなさい。よろしく願います』

美鴨と共に、部員全員がお辞儀する。

これにて、弓道部の部活見学オリエンテーションは終わったのだった。

弓道部の部活見学オリエンテーションが終わった後、部員は後片付けをしていた。

それを美鴨は指示を出して、片づけを見届けている。

美鴨は時雨から返されたマッチ箱を握りしめていた。そしてそれを見る。

「失敗したか……」

美鴨そのマッチを近くのゴミ箱へと投げ捨てた。

（あの女狐にマッチに火が付かない恥をかかせる為、湿気させた物

を態々用意したっていうのにな。その栄光に泥を塗ってやろうと思
っていたのにね……)

表情には出てない物の、その不穏な空気が周りにひしひしと伝わ
っている。

美鴨の前を通り作業する部員は、気が気でないのか足早に通り過
ぎている。

その美鴨が一人の部員を見て、捕まえた。

「おい。そのゴミ箱のゴミを捨ててきなさい」

「は、はいっ！ わかりましたっ！」

近くに居た部員に命令を出して、マツチの入ったゴミ箱は持つて
かれた。

(ついに頭も狂って、あんな行動を起こしたと思ったのに……。部
活を追いだす良い口実になるかと思えば、蜂だって？ 全く……。
蜂と言えば総合成績でワタシを抜いた栗原 林の奴隷じゃないか。

あの女王蜂め……)

美鴨はそこに放置されていた物に気が付いた。先ほど、倒された
ススメバチだった。

お嬢様は基本的に虫が大っ嫌いで触りたがらない。誰も速戦して
そのの駆除に取りかからなかったのだろう。

(……ワタシこそナンバー1でなければいけないのだ。それなのに、
訳も分からない能力で弓道でワタシを蹴落としおって。そしてあの
女王蜂っ！ ああ、忌々しい2人っ！)

美鴨はそのススメバチを踏みつけた。そしてゴリゴリと足を動か
し、踏みにじった。

(あの忌々しい2人を退学に追い込めない物か……。そうだな……。
最近、また舵守とつるんで水泳部を造ろうとかあったな。それを良
い具合に使って、学園から退学にできたりする行動へとできないも
のか……。)

踏みつけていた足を上げる。そこには原型を留めていない、触角
やら足やらがバラバラに散らばり、体液がデロツと飛びだした蜂の

残骸があつた。

そこに先ほどゴミ箱の中身を捨てて来た部員が戻つて来た。

「御苦労さま。それとその蜂とこの足袋の処理も頼んだ。さつさと捨ててきなさい」

そう言つて美鴨は自分の足袋を脱ぎ棄てて渡すとその場をとつと後にした。

その部員がススメバチを見た。そして青ざめた。

「む、無理……。なんで、こんなの……。ふえーんっ！」

「どうしたんだよ？ 何泣いてるんだ？」

どう対処していいか困つていた部員は振り向いた。

「ああっ！ 王子様っ！」

「ははっ、もー……。王子様が。まあ、いいか。で、どうしたんだよ？」

「これです。私にはとてもこれを処理する勇氣はないです……」

そう言つてススメバチを指差した。

「ああ、これか。誰も片づけてなかったのか。まあ、そりゃそつか。いつもボクが虫系の処理してたんだし。狐紫を介抱して忘れていたよ。すぐやるね。あ、その足袋も捨てるヤツ？ じゃあ、貸して」

そう言つて時雨は、美鴨の足袋を受け取るとそれでススメバチを拭いとり、拭いていく。

「わあっ！ ありがとうございますっ！」

部員は大喜びでお辞儀して来た。

「じゃあ、これ捨ててくるよ。しかし、この金系の刺繍の入っている足袋は……。美鴨のだよ……。相変わらず勿体無い使い方するよな」

そう言つて去つて行く時雨をその部員は見送った。

「ああ、ステキすぎます。時雨王子様♪」

こうして、時雨の王子度がまた上がったのだった。

造ろうつ！水泳部っ！　　3　　（後書き）

造られてまだ5年。部活も出来たばかりで、独特な雰囲気醸し出す。

そして、そこはお金持ちお嬢様たちの集まる楽園。

普通校では絶対ないような部活がそこに造ろうつて事で、こんなことに……。

っていうか、孤紫が特殊すぎなんですが、そんな彼女じゃなければ助けにならない場面がこれからあります。

それが彼女が失い、与えられた物の定めと義務になります。

次回はついに茜達が部員獲得に動き出す！

茜の考えた横取り作戦は功を制するか……。そして、新しく入ってくる部員はどんな人たちなのか……。

次回へ続く。

造ろっつ！水泳部っ！　　4　　

　　4　　

お嬢様の2人が、弓道部の練習所から出てくる。

弓道部の見学オリエンテーションを見ていた一年生の中の2人だった。

「ん、弓道部かぁ。なんかわたしには微妙かもお……」

指を顎に当てて首を横に傾けて、んむむ、と考え始める女の子。「私もそんな感じよ。私達が求めていた物が違うね」

もう一人の女の子もその女の子の問いに答えながらしなやかに歩いて行く。

一人は腰まで伸びた長くツヤのある黒髪のアート。大和撫子と言われればまさにそうだろう美人だ。

極めつけはグラビアアイドルの誘いが絶対に過去にはあったであろう、制服の凹凸が激しい事この上ない程のプロポーションの持ち主だろう。

ただ、口調やしぐさからおっとりとした性格が窺われるが、それも味と言えばその体系と性格はマッチしていると言える。

もう一人は髪を黒髪に先端だけを金髪と言う部分染めしたロングツインテールな女の子だった。

こちらは多少、目元が鋭く釣り上がって睨みつけられる印象を受けるが、そこを特徴としてみればとても美人である。

体系はグラビアと比較したらかわいそうだが、美しいスレンダーな体系が好みと言えば程良い体系である。

「部活をやってみたい気持ちはあるけれど、どの部活も見学をしていくうちにやる気がなくなっていくわ……」

「だねえ。失礼だけど、先輩達が嫌だなあって感じるよね。どお？　わたしはあんな風な部活だとやっつく気持ちしないよお」

見た目のぼわぼわとした感じからは想像できないが、彼女は物事をズバッと言う体質の様だった。

「そうね。厨二病が多いのもあったね。部活を紹介しているより、自分を見させるように紹介していた感じがするよね」

先の弓道部以外のバレエダンス部、花道部、美術部など、自分のを見てよーラが強かったようだ。

「周りはいあまり気にしてなかったみたいだね」

「だねえ。憧れの目で見ってたねえ。あゝ、でもわたしは狐紫先輩は憧れるかもあゝ」

「ああ、アレは凄かった。私なら王子様かな。ああゝ、とてもステキだったわ……」

2人は先の先輩達の活躍を思い出してうつとりする。

「……どうする？ 弓道部に入る？」

「……もゝ、部活なんかやらなくてもいいんじゃない？ 確かに

あの先輩達はステキだけど、あの部長さんは嫌いゝ」

「確かにね。あの部長が仕切ったり、指導されるのは私は耐えられそうにないわ」

女の子たちはあの部長とは性格が合わない様だった。

「私達はやっぱり部活動向きじゃないのかもしれないわね……」

「でもあゝ、なんかこのままでいいのかなって気がしない？ ただこの学園で勉強するだけの3年間って……」

それを聞いて女の子たちは悩む。

「それはあるからこうして部活見学してるんじゃない……。やつぱり、なんか青春って物を味わいたいじゃない。中学校の時の私達を振り返って、もうあんなダラダラとした青春は辞めようって思ってお互いに始めようって言ったんじゃない。けど、最後に残ったのは合唱部だけだわ……」

そう言ってツインテールの女の子はグラビアの女の子に目を向ける。

何も言わずとも理解したのか、首を思いっきりブンブンとふった。

ツインテールな女の子も苦笑いしながら頷く。

「次のオリエンテーションは何処がやるのお？」

ツインテールな女の子はその質問に手に持っている一年生に配られたパンフレットを開いて確認する。

「……その合唱部だわ」

「じゃあ、パスだねえ」

ツインテールな女の子はパンフレットをさらに見ながら答える。

「じゃあ、少し休憩しようよ。合唱部が終わって、次の見学は15時半からのオカルト研究部……。この学園にもあるんだね……」

「わあ、わたしは絶対に無理だわあ」

「これもパスだね。そうすると……。45分くらい休めるか。結構長いわね……」

「でもお此処の学園って遊戯施設がたくさんあるよお。ちょっと遊んでたらずくだよお」

「そうしようか。まあ、喉が渴いたし、庭園の喫茶店にも行こう」

グラビアの女の子も頷くと2人足並みそろえて歩き出す。

「やつぽおおおつ！ その2人っ！」

何やら遠くの方で騒がしい声が聞こえてくる。この学園に似つかわしくない大声だった。

「なんでしょお？」

「初めて聞くよ。こんな風に声を出す人なんて……」

その声をした方向を向く。彼女達から見て右斜めからだった。

見知らぬ先輩が走りながら手を振ってこちらにやって来ている。

どうやら声を掛けられたのは自分達の様だと理解した。

「私達に用事があるみたいですね……」

「ワタシ、あの人とは知り合いじゃないよお？」

その先輩は思いつき走り走っていると2人の前を地面を滑りながら通り過ぎて行った。

2人はぼかんと、その光景を見送った。

先輩はいやはやと手で頭をかきながら戻って来た。

「あははっ！ 急には留まれないウリボーでした。てへっ」
その先輩はペロツと舌を出しておどける。

2人は顔を見合わせる。そして心の中で会話しあった。

（私にも、見たら忘れられない程の天然な人、知り合いじゃないわよ）

（そうなんだあ。あつ、でもわたしは……、この人とどつかであつてる感じがする……）

（それは何処よ？）

（ん、ごめんねえ。どこかは忘れちゃったのお）

（これだけインパクトのある人を忘れますかい……）

「ねっ、ねっ！ 2人ともっ！」

見知らぬ先輩が2人に声を掛けてくる。取り合えず、その人が自分達への目的を聞こうと振り返る。

「2人は弓道部を見学していた一年生かな？」

「えっ？ まあ、そうですね……」

「さっき見学してきましたあ」

「そうなんだあ！ よかった、間に合って……。染みを落としていたら時間掛かつちゃって、見学が終わって解散してたら見つからなかったところだったよ……」

先輩が安堵のため息をついて、走った後に出て来た額の汗を腕で拭った。

2人は一体なんだと言わんばかりにお互いに目を合わせて会話する。

「茜っっ！……！ どおっだあっっ！……！」

そんなまた大声が先ほど先輩が走って来た方向からまた聞こえて来た。

先ほどの先輩の走りよりは普通に駆け足でやってきた先輩が2人、3人の前を通り過ぎる事なく留まった。

「ゲットだぜっ！ まだ2人残っていたよあ」

「はあ……はあ……。きよ、今日は1カ月分の……、はあ……、走

りをしていますわ……、ひい……絶対に……っ」

走って来た2人のうち、一人は死にかけていた。膝に手を付いて背中を折り曲げている。

「ん……？ えっ？ ま、まさかっ……」

ツインテールな女の子はその青色に染まる先輩をしゃがんで覗きこんだ。

「あっ……ああーっ！！！！ あ、ああまがさきの天ヶ崎 千鶴ちづるだあーっ！！！！」

「ほえ？聞いた事あるようなあ……」

「なっ？ アレだよっ！ この間話した面白いドラマに出演中の今話題になつて大金持ちの俳優のっ！」

「ああ……。 あっ、理恵役だった人だっ」

千鶴が出演した役の人の名前が上げられた。こう言う風に思い出す人は、大抵その役の人を知らない事が多い方である。

「はいはいっ！ その千鶴の友達、アタシは舵守かじもり 茜あかねっ！ O型の蟹座だよっ！」

聞かれてもいないのに茜は自分の自己紹介を شدした。

「えっ、何っ？」

「蠱珠むしう 羽音はねおとと申しますう。 わたしもO型の蟹座なんですよあ」

ツインテールな女の子は即座に何事かと理解できなかったようだが、茜のマイペースと一緒にだった羽音は律義に同じように答えを返したのだった。

「わあっ、そうなのお」 アタシは7月15日だよ」

「わあ、惜しいですう！ 7月16日なんですよあ。 後一日違うと一緒にでしたのに……」

「本当だっ！ 惜しいっ！ でも、此処まで一緒だと奇跡だよねえ」

「奇跡ですねえ」

何か物凄く波長があつたらしく、2人で両手を合わせてイエーイと喜んで跳びはねている。

「ははっ、なんだ。類は類を呼ぶと言うが、新一年生にも茜と同調する人物がいたようだな」

「ああ、茜さんが2人もいると世話が焼けますわよ。どうか茜さんよりは落ち着いた人であると願いたいですわ」

林に背中を擦られていた千鶴もスタミナが回復したのか、今は背筋を元に戻して乱れた髪や制服を整えていた。

「さてと、先に名を名乗るのが礼儀であるからね。私は栗島 林。

私達は同じ2年B組の者達だ。私は敬語や尊敬語など気にしない体質だから、林と呼び捨てて構わないよ」

そう言っただけで林は気が抜けそうならへらへらとした顔で手を振っている。まあ、親しみやすい顔つきと言えはそう言える。

「ワタクシは天ヶ崎 千鶴ですわ。まあ、先ほどの会話からして、知っているようですけれど、一応ですわ。ワタクシは林さんの様には行きませんわよ。礼儀は確りとお願ひします。まあ……、あまり硬くなりすぎない程度にお願い致しますわ」

千鶴はそう言ってから顔を赤くする。

「何言っただよ。素直にフレンドリーをお願いって言っただら？」

「なっ!? そ、そんな事思っていますせんわよっ! まだっ、その……お、おとも……だちでもありませんのに……」

『千鶴はお友達になりたそうにこちらを見ているようだ』

林は機械の様な口調でそう言う。

「だ、だからっ! 何を言いますの林さんっ! その口調辞めなさいつ! 止めますわよっ!」

千鶴は林の口を押さえようと手を伸ばすが、林がその手を掴みもみ合いになった。

茜と羽音は尚も自分達の好みや最近発売されたお菓子の味の感想などを話して盛り上がっているし、尚ももみ合いをする林と千鶴。

その光景をの中で、ツインテールの女の子は一人ポツンとしていた。

「い、いったいなによこれ?」

行き成り現れて自分の前でおしゃべりや喧嘩をする人達に、いたい何しにきたんだと疑問になっていた。

「あ、あの……。私達には何か様で来たのですか？」

取り合えず喧嘩する2人は手を出さず、羽音と会話する茜に声を掛けて見た。

「ん？ ああーっ！ 本来の目的を忘れるところだったよっ！」

そう言っつて茜はもみ合いする林達に向かった。

そして林と千鶴の肩を揺さぶる。

「ふえっ？ なにほしますのっ！？」

「はひ？ どうひたよ？ 茜？」

もみ合いをする2人は互いに口を引つ張り合っていたが動きが留まり、茜に注目する。

「あはは、変な声っ！ で、じゃれあい後は後にして、今回の目的を始めるよ」

「あ、そうだった」「ああ、忘れてしまいましたわ」

2人はそう言っつて離れた。別に互いに誤らなくとも、許し合っている様でギクシャクはしていない様だった。茜はそれを見て大丈夫と判断して、話を一年生たちに進め始めた。

「なんかドタバタとしちゃったけど、改めまして舵守 茜です。こ

っちは栗島 林^{くしじま はやし}。そして天ヶ崎 千鶴だよ」

「どもね」「ごほんっ……」

紹介された2人は、林は手を振って、千鶴はまた乱れた服を直しながら咳払いする。

「えっと……。ハートちゃんはさっき自己紹介してくれて知ってるけど、ツインタールちゃんは名前なんていうの？」

そう言っつて今度はツインタールの女の子を的にしてきた。

「あ、えっと……。神崎^{かんざき} 希美子^{きみこ}です」

そう言っつてお辞儀する。

「なあ、行き成り話しを追ってすまんが、ハートちゃんって、羽音さんのあだ名？」

「そつだよぉ」

「そつなんですぅ。はおとつて読んで、ハートつて呼ばれるんですぅ。先輩達もどうぞそつ呼んでください」 気にいつてるんですぅ」

「じゃあ、ハートちゃんつて言わせてもらつよ」

「あの……、ワタクシは申し訳ありませんが……」

千鶴がそつお断りしようとするのを茜がええーっといちやもん付けて来た。

「もお、いいじゃん。硬い事言わないで、ちづるっちとかハートちゃん、キミたんとか付けあつて呼ぼうよぉ」

「……えっ？」

希美子は一瞬自分がキミたんと呼ばれた事に反応できず、えっ？と驚くが自分の話を刺し込めないまま会話が進んでしまっていた。

「しょうがないのですわ。家柄が厳しいのでそんな会話をしていたら、いつボロが出てしまうか……。いつでも厳しくしていませんといけないのですわ」

「まあ、あんまり気にせずいこう。それよりも本題進めないと全く進行していかないし」

林が話しに割入つて進めてくる。

「そだね。それじゃあ自分達が2人へ声を掛けた理由なんだけど……」

……」

林の指摘に茜が進行を進めて行くようだ。

希美子は自分のキミたんはどうしようかと悩み始めたのだった。

「ハートちゃん、キミたんに声を掛けたのは、アタシたちのやる部活に入らないかって事で、誘いにきたんだよ」

羽音と希美子は互いに目と目を合わせる。

「部活動のお誘いでしたかぁ。わたしたちの処まで態々起こして頂いて、恐縮ですぅ」

羽音は何も気にしてないようだったが、希美子はそれを伝えるのに今までの惨劇はなんだったのかと、頭を抱えてさらに悩みが増え

てしまったようだ。

「最初のは、いったいなんだったのだろう……」

希美子がぐるぐると悩みの渦に居る中、羽音はマイペースに話を進めて行く。

「処で、何処の部活動でしょうか？漫才部でしょうか？」

やはりズバツと自分の物事を言う羽音であった。

「漫才部ってあったけ？」

羽音の問いに茜が林と千鶴に向いて質問する。

「聞いた事ねーよ」「ありません。絶対にこの学園にはありませんわ」

2人とも呆れて答える。

「無いつて事でね。ごめんね。色々と騒いで迷惑かけちゃって……」

「いえいえ、なんか面白いのでわたしは気にしていませんよぉ」

「ははっ……」

羽音はニコニコ、希美子は遠い目でふつと笑う。

「でね、アタシたちがやるのは水泳部なんだよ」

「水泳部ですかぁ？」「水泳部？」

希美子は手に持っているパンフレットで部活動覧を見る。それを羽音も覗きこんだ。

「あ、水泳部はありませんわよ。だって、まだ部が出来ていませんもの」

その答えに千鶴を2人は見る。

「実はさ。今日から造ろうつて事で部員を集めているんだよ。部活として成立するには最低でも部員が6人いなきゃならないんだ。今の私達で3人。後3人募集中なんだよ」

「じゃあ、まだ部活動として活動記録は0でしょうか……」

「ええ、見学するにも練習もしていなければ、見学オリエンテーションに参加すらしていません。0から始める事になりますわ」

羽音と希美子はその事情に驚いて目を合わせて会話する。

（まだ部活ができてないって、マジでいつてるのよね？）

（でもお、まだ此処ができて5年だからあ、これからまた造る部活もあると思うよお）

（まあ、そうかもね……）

「2人とも。新しく造る部活って事で、悩んでるでしょ？」

茜が2人の心の会話を悟って話しかけて来た。

「あ、はい……」「まあ……、そんな感じです」

「大丈夫。どこだって初めは0からだっただけだから。今ある部活動だって、5年前までは今から造る水泳部の様に0からだっただけ、オカルト研究部なんて去年の夏に出来たばかりなんだからね」

「そうなのおっ！？」「オカ研マジですか……」

その事実には2人は大いに驚いた。

「なんなのでしょうね……。ワタクシ達の代はちょっと変わった気質の持ち主が多いですわね……。茜さん以外にもトラブルメーカーとなる人が多いのは確かなのですわ」

「その時代の育ちの環境からなんだろうね。私の様なのが出ると関わりが深いのかもよ」

「オカルト研究部も、まさかのツチノコを活かしたまま発見し、捕獲と言う大義を成し遂げましたしね。本当に、おかしい人ばかりなのですが天才と言える者ばかりですわね……」

「バカと天才は紙一重だぜえ」

林が自分を指差して笑う。

「あの世紀の代ニユースの発端がここっ！」「わあ、すごいですっ！」

衝撃の事実が露わ露わとなっていた。

「まあ、最初は本当に部活として成立せず、部室もないただの喫茶店で集まるオタク集団だったんだけど、その大義をしたお陰で部活として認められて、部室や部費も出る様になってるんだよな」

「そうっ！ 未来とは、何が起こるかわからないものなんだよっ！」
茜はビシッと2人に指差す。

「今から造る水泳部だって、何が起こるかわからないっ！ この水

泳部からオリンピックに出て金メダルを取る者だって出るかもしれない。可能性は0じゃない。可能性と言うのは自分から造っていける物なんだよ！」

そう言ってから茜は林と千鶴の手を繋いで、三人並んだ。

「こうして集まって部活を造って0から始めるのは、今かないイベントでもあるんだよ。アタシ達が造る部活は、アタシ達で色を付けて行くんだよ。みんなが造る部活は、他の部活にない物にだって出来るんだから」

「ははっ、なんかオカルト研究部の様な濃い部活動になりそうだけどね」

「そんな事言ってしまったら、茜さんに付いて行ける人でなければ、部活をやっていけそうにありませんわよ……」

「えへへっ、みんなが仲良しな部活ってことじゃん」

そう言っただけ茜が笑う。

「美鴨の様なサツバツとした環境じゃないから、笑って居られる事は確かだな」

林もそう言っただけ笑いだす。

「もう……。少しはワタクシが居る事を忘れてはいけませんわよ。ハメを外し過ぎたら、ワタクシがちゃんと忠告致しますわよ」

千鶴がくすつと笑う。

『……………』

一年生2人は、そんな3人を見て茫然としていた。

「それで、どうかな？ アタシ達が造ろうとしている水泳部。一緒に造って行かない？」

茜は一年生2人に問いかける。

希美子はどうしようかと悩んでいた。

確かに今まで見て来た部活、これから見る部活の中では、この水泳部は他を抜いて変わっていた。

ただ、今まで見て来た環境と違い、この場所は……暖かい感じがした。

自分は水泳部に入ってやっていけるのだろうか。

泳ぎは出来る方だが、部活としてやっていくくらいになるのだろうか。

そして、自分と一緒に部活をやって行こうと言った羽音は……。

そう思っ羽音と目と会話しようと目を送るが、羽音は先輩達を見るばかりで、目を合わせて会話をしようとしてこない。

そんな羽音が突然、両手を胸に持って来て、一歩前に出た。

「わたしっ！ この部活やってみたいですっ！」

今までほわほわとした口調から一変して、ハッキリとした声でその言葉が放たれた。

「あ？ えっ？ ハート……」

希美子は突然の羽音の行動に、手を伸ばして羽音の肩を掴もうとする。

だが、掴む前に羽音は希美子に振り返って会話してくる。

「ねえ！ やろうよお！ 希美子っ！ わたし、この水泳部やっていきたいよおっ！」

そう言っ希美子に迫ってくる羽音。その気迫はぼわぼわした中に津波の様に押し戻せない強い力がこもっていた。

「わ、私は……」

希美子は羽音がやると言うなら、自分も思った。

ただ、本当に自分がこの部活をやれるのかと、その心配が引っ掛かって、まだ上手く言葉が纏まらなかった。

「その……。どうしよう……」

希美子は迫ってくる羽音から顔をそむけて悩みだす。

「キミたんって、泳げない？」

だが、そんなそむけた先に茜が先回りしていて、行き成り声を掛けられた。

「えっ？ いえ、人並みに泳げる事は泳げますよ……」

「そっか。泳げないから不安になってるのかと思ったよお」

「ちよっと、茜さんっ！」

千鶴は茜の続きを悟って、止めようと手を伸ばそうとするが、林に後ろから羽交い絞めされて制止させられてしまう。

「は、はなしてえ〜！ 言つてはダメえ〜っ！」

そのままズルズルと引きずられていく千鶴。

希美子と羽音はその光景を茫然と見送った。

「もお、千鶴つてば……。別に千鶴が泳げないとばらすつもりはなかったのに、自らさらしちゃうんだから……」

「あ的那天ヶ崎先輩が、泳げないんですねえ……」

「それなのに……水泳部に？」

「そうだよ。千鶴はねえ……。なんか自分の泳げないトラウマを克服する為に入るんだって言ってたよ」

「そうなんですか……」

泳げなくても泳ごうとする為に水泳部に入る。目的があるから入ったんだと希美子は思った。

「でも、それ以外にもやっぱり、楽しみたいからなんだと思うよ」

「楽しむ？」

「そうだよお。アタシも林も千鶴も、楽しんで部活したいから造るんだよ。確かに、競技にでて成果とか出さなきゃだけど、それ以前に、楽しく部活をやるんだ。そうしなきゃ、このアタシ達の青春が楽しくないじゃん」

「あつ……」

青春を楽しんでいきたい。当初、希美子たちがそれを目的に部活を探していた事だった。

今まで見て来た部活は、成果や自分を磨く事に精一杯努力をしている物ばかりだった。

部活と言う物は、己を磨く場所であつて、遊ばじゃない。

そう思ってしまった。だから、自分がこの部活で役立つ存在になるかが不安だった。

人並みに泳げる。だが、それが何処まで伸びるかが不安あった。部活にはいらない存在になるのではないか。そんな不安があった。

「あ、そうそう。後で聞いて知った話なんだけど。あの新しく出来たプール。競技用プールなんだけど、波を起こす装置があるんだって！アレ使って遊びたいねえ……。水泳部が独占しちゃば、使っちゃってもいいよねえ……」

「波が起こせるんですかあ！わたし、うきわでぶかぶかしてゆらゆらと漂いたいですう」

茜の言葉に、羽音は目を子供の様にキラキラ輝かせていた。

「ねえ、一緒にぶかぶかしよう」

そんな子供が2人目の前で会話している。

「……ぶっ」

希美子が笑い吹く。

「ん？どうしたの？」「希美子？」

希美子の様子に2人はキョトンと振り向く。

「あはっ……。あはははっ……。何をにや、……。悩んでいたんだろっ！ああ、もう噛んだしもおーっ！あはははっ！」

もう希美子は自分のおかしい気持ちに歯止めがきかなくなってしまうていた。

「茜さんっ！言ってしまったのですねっ！ワタクシの羞恥をつっ！」

林に引きずられて行った千鶴が戻って来て、希美子の様子を見て自分の事を笑われているのだと勘違いしていた。

「え？別に言っただけ？」

「ですう。泳げないって言っていますけどね。千鶴先輩が自分で泳げない事をお主張してましたのでわかりましたよお」

「えっ？」

千鶴は固まる。

「だから言っただけじゃないか。千鶴は顔や態度に出やすいんだって。」
戻ってきた林が千鶴の肩を叩く。その軽い力でも、今の千鶴のは重く、千鶴は崩れ去って灰となった。

「あーりゃりゃ……」

林は千鶴に合唱する。

そんな光景を見て、希美子はもうリミッターが外れたかの様に笑っただけだった。

「あはっ、あははーっ！ あ的那天ヶ崎 千鶴がこんな……っ！ ぶははっ、もうダメ、苦しいっ！ あははっ、面白いね。もうっ。あはははっ！ げほっ！ げほっ！ はあ、あははっ！」

そんなに笑う希美子を心配に思ったのか、羽音は背中を擦ってくる。

「ご、ごめんね。ああー、もうっ！ なんだろっ。今までの中で一番笑った様な気がする」

希美子は泣き笑いで出た涙を手で拭いながら尚も笑い、答える。

「あははっ！ もう、私もやろっ！ この部活をねっ！」

その言葉に茜達先輩3人がピクツと耳を立てた。

「私も一緒に楽しみたいよ。こんなにも、ぶふっ……、面白く笑える部活なら、楽しい部活になりそう」

「本当っ！ やったあーっ！」

その言葉に茜が林と千鶴の手を取って万歳する。

「おーしっ！ 2人ゲットだぁ！」

「まさか、この策でこう上手くいくとは……。ふふっ、全くですね」

千鶴は微妙な顔で笑うしかなかった。

「あ、そだ。ほい、希美子」

そう言って林は空いている手で希美子の手を握り合う。

「え？ どうしました？」

その行動に4人ともどうしたんだと林を見る。

「和にでもなるうかなあってね。これから一緒に部活を……、あ、まだ後一人だけださ。同じ仲間になったとしてね」

「ああ、それいいねえ！」

「それいいですう！ やりましょー！」

そう言っ羽音は希美子と千鶴の手を取った。こうして5人の和

が出来た。

「よおしっ！ それじゃ、音頭は千鶴に任せてみよっか？」

「ええ！？ ワタクシですよっ！？」

「ほらあ、がんばってー！」

千鶴は突然ふられた事だが、生徒会副会長をする身。速戦して物事をやる事の多い場面が多いので、何も嫌がらず音頭を取り始めた。「ごほんっ……。後一人入れば水泳部も部活としてようやく成立しますわ。ワタクシたち、この5人の和に後一人が加わります。この和を確実にする為、残り一人の部員を全力で探し出しますわよっ！皆さん頑張りましょうっ！」

『おおーっ！』

千鶴の言葉に皆が怒気を上げた。

その掛け声は、この学園には似つかわしくないものだった。

だが、とても明るく、希望と強さに満ち溢れた青春の掛け声だった。

造ろっつ！水泳部っ！　　ゝ　　4　　ゝ（後書き）

自分は色々と部活をやっていましたねえ
誘われるがままに……

だけどそのおかげで色々な経験ができました
何が起るかわからないけれど、とにかくやって経験積みめば、何か
役立つ事もある

だから逃げずにやってみようと言う精神を学びましたねえ
そんな人生の一つがこの章にあります

次回は、謎の少女、現る。

造ろっつ！水泳部っ！　　5　　

　　5　　

時間は4時を周ろうとしていた。

今、茜達は校舎の廊下でたむろっている。

「うう、これで24連敗だよ……」

茜が項垂れてそう言った。

「そうですわね……。まあ、予期していた事でしたわ」

「だけど幸先はいいんだ。後一人、必ず見つけ出そう」

林達も今まで散々部員を募集する為に歩きまわり、疲れてしまっているのか壁にもたれかかっている。

「けど、もう見学オリエンテーションはさっきの部活で終わりました。探すにしても、帰宅する人達と混ざって、部活にやる気のある人を区別するのは難しいですよ」

「73人も声を掛けて、全滅つてすごいですう。先輩達が言った通りな事になっています……。これが、ルリビタキ学園ですかあ」

羽音がふわふわとした感じで廊下の窓から見える学園の中庭を眺める。そこには羽音と同じような雰囲気が流れている。

「はふう、疲れましたあ。今日はどうするのですかあ？」

そんな羽音はマイペースに先輩達に自分の案を言う。

「んー……。今日を逃せば明日から通常授業が開始。見学者を見つける事はできなくなるし、放課後が短くなるから搜索時間も減る。厳しいものだな……」

林が顎に手を当てて考えながら歩く。

「だね。でもさ。今日中に3人も見つかるとは思ってなかったよ。

2人見つかっただけでも運がよかったんだよ」

「そうですね。でも、この先はどうしましょう？今日はこの辺りにする前に、やはりもう一人見つける努力をした方がいいかしら？」

「んー、だけど疲れるだけかもね。今の時間帯だと、本当にやる気のない人達が多いと思うし。なら、次の策で行こうか」

「おお、次か？」「まだありましたの？」

「ふっふっふっ、千鶴に言われて色々と考えながら行動してるんだから。今回はいつものアタシとは違うんだからねっ！ 千鶴が教えてくれたからだよ。ありがとう、千鶴」

そう言って千鶴の手を握って感謝の笑顔を送る。

「えっ、べ、別にアナタの為じゃありませんわ！ ワタクシの為に！ この部活が上手いかなければ、ワタクシの為にもなりませんからね」

「アレ？ そういう忠告したのは、部活をやるうと言っ前だったと思うけどねぇ」

「ええっ！？そ、そうでしたかしら？ワタクシは忘れちゃったわよ…」

…」

林の指摘に、千鶴がオドオドする。そんな千鶴を林は面白そうにニヤニヤとしながら見て笑っていた。

（ツンデレだわ……）

（ツンデレですねえ……）

羽音たちも千鶴の性格について悟ったようだった。

「で、どういう策があるんだ？」

「それはね。朝早く来た1年生たちに声を掛けてみようと思うんだ」

「朝早くですか？ 私は苦手です……」

「わたしは朝は早いですう。外のお掃除で毎日起きてますよう」

「まあ、登校時間に無理があるならアタシと林に任せてよ。アタシたち結構朝早いしね」

「そうだね。任せておいてよ」

「ワタクシも大丈夫ですわ。茜さん達と一緒に付き合いますわ。ところで、その朝に来た1年生を勧誘するのには、どのような意味がありますの？」

「ん？ それはね。朝早く来る人達は、真面目な人達、何かやる気

のある人達、そして時間のある人達だからだよ。女の朝の支度は忙しかったり、ゆっくりだったりするじゃん。遅く来る人達の性格的には部活をやると言うより自分の事向きな人達だと思うよ。だから大体遅く来るお嬢様たちは、部活には向いてない方なんだと思うよ。朝早めに来た人達なら、まだ部活をやるうとしてくれる人達の可能性が高いんだよ。」

その茜の説明に、一同がおお、と驚いた。

「今回の茜は冴えているな」

「成長していますわね。まあ、この間までが散々な結果を出していますし、それらを踏まえてやっと進歩したのでしょね。今回の茜さんは信頼がおけますわね。ワタクシはアナタの指揮に従いましょう」

茜はてへへっ、と頭をかいて照れている。

「……ん？」

茜が突然、後ろを振り向く。

その様子に林と千鶴がどうしたのかと茜と一緒にその方角を見た。

「どういたしましたの？」「部員になりそうな人物でもいたか？」

「じい……」

そんな茜は目を細めている。

林達もその茜のしている方を見るが、そこにいるのは2、3年生の生徒たちだった。

「茜。何かいるのか？」

林は茜の隣に来て、茜が見ているだろうその先と一緒に見る。

「やつぱり……、つけられてるよ」

「それはワタクシの日常ですわよ」

茜の言葉に千鶴が否定する。

「ううん。ちよつと違うんだよね……。アタシだって千鶴と一緒にいた時に感じた千鶴ファンたちの視線はわかるよ。でも、これはちよつと違う感じがする」

茜は一点を見つめた目を、林達に向きなおした。

「ごめん。あんまりにもこつちが見てた物だから、もうどっか行つた見たいだよ。心配かけてごめんね」

「これってほつといてもいいのですか？」

「何か問題が起こった後では遅いですよ。今のうちに対処しておきませんといけませんわあ。どおしましよう」

羽音たちが色々と思案を始めた。

「本当にワタクシのファンではありませんのね？　ワタクシのファンでしたならば、追い払ったり注意したところで、散々湧き出るので切りがないので、飽きるまで放置が的確ではありますけれど……」

「お昼に食べた時に話した、千鶴を奪う為の者が、茜を妬んでの者の可能性もあるけどね」

林はまだ茜が見ていた方を見ていた。

「……………ふむ。もしかしたら持つてるかもな……………」

その一点を見つめながら、何か思いついた時に林が見せる、顎に手をかける仕草をする。

「なんか思い付いたの？」

その様子をみて茜が林に問いかける。

「いや、なに…………。ちよつとした事をね…………。何か考えるよりも、そいつを捕まえた方が早いかと思つてね」

「捕まえるのですか？」

「大胆ですわね」

その林の提案に一同が声を上げる。

「捕まえてどういった件で付きまとうのかを知った方が、確かな答えがでるだろう」

「まあ、そうですね。でも、捕まえるにしても、今の様にすぐにいなくなつてしまいますよ。どうするのですかあ？」

そういつて羽音は茜を見る。

「え？　アタシ？　ん、そうだね…………。二手に分かれて、どちらかの後ろに付いたのを確認した後、もう片方が捕獲対象の後ろに

廻り、挟み撃ちにするってのがいいかもしれないよ」

「それが妥当ですわね。ワタクシもそう思い付きましたわ」

「そうですね。それじゃ、どういう風に別れますか？」

茜の案を聞いて、林を除く4人が思案し始めた。

「ん、多分ね。アタシが千鶴に付きまといてるんだと思うの。だから、アタシと千鶴が一組になって、林とキミさんとハートちゃん、後ろから挟み撃ちにしてほしいよ」

「そうですね……。わたしと希美子で頑張りますねえ」

「任せてください。先輩達の背中が私が守りますっ！」

そう2人が気合を入れる。

だが後方チームの中にもまれる林は、考えを辞めて話した。

「ごめん。私はちよつと違う作戦で行こうかと思ってる。そっちの方へ行つていいかな？」

「ふえ？ 林は何をするつもりなの？」

「いやあ、なんか思い当たる節があるんだ。だからこのやり方だと失敗するだろうと思ってるね。だから私はちよつとした事を思い付いたんだよ。まあ、それがが上手くいくかは、保証はしないけどね。ただ、私なりに面白いから、やってみたいと思っただんだよ」

そう言った林は実に面白そうに眼を輝かせた。

「うわ、出たよ……。林が本気になる時の眼が……」

「これがあ、伝説が生まれる瞬間の眼なのですねえ」

「ま、私の作戦はある道具が必要なんだが、それを調達して設置してくる。その道具があるかどうか分からないんだけどね……。まあ、多分あるだろう」

そう言った林は早速行動を取り始めた。

「私はちよつと別行動に移させてもらうよ。こっちの準備が出来たら連絡するよ。まあ、そっちの成功も祈ってるよ」

林は茜達から離れてる。

「ちよつと今の聞いてたら付きあつてほしいんだけどね」

林が茜達からちよつと離れてからそう独り言を言った。そして廊

下の角を曲がつて茜達の視界から消えた。

「いいのですか？ 林先輩を行かせて……」

希美子が林の後を心配そうに見ていた。

「大丈夫だよ。それに、林はあの状態で思い立ったら即行動、誰にも止められないんだよ」

「ですわね。林さんは、林さんで任せましょう。気になるのが、ワタクシたちでは失敗すると言っておられましたわね。その理由を知らせず立ち去ったと言う事は、ワタクシたちが試させていられるのでしょうか」

「だね。茜はアタシと勝負を仕掛けて来たんだよ。よおっしっ！

こっちだつて頑張っちゃうんだからっ！ 皆っ、準備はいい？ 何か他に聞いているおきたい事とかある？」

その茜の質問に、三人は首を振る。

「よしっ！ それじゃ、謎のストーカー捕獲作戦。開始だよっ！」
「おおーっ！」

こうして、2人の学園内のふとき者達の知略合戦が始まりを開始した。

茜と千鶴が学園の屋上から、夕陽を眺めている。

この学園の屋上は、地球温暖化対策の為に屋上緑化されていて、園芸の方々が管理、設備した花壇や植林、人工芝生などの設備がされている。

そして何故、茜と千鶴が此処にいるかというと、此処へ来るのは6か所しかない屋上への階段が設備された、逃げ道の限られた空間だったからだ。

そして何よりも、花壇や植林が迷路の様な構造になって、壁は植林によつて高く植えられ先の見通しが利かなくなっている。それによつて隠れるのにはいい障害物が多い。

そして何より人氣が全くない場所だった。

これほど美しく設備された場所に、普通の人は好んで集まってく

るだろう。

だが、お嬢様達は日焼けを気にして、この場所を利用する事は滅多にない場所であった。

現れる様にするならば、相手の思考を考えて、現れやすくするにもうつつつけ。そしてこちらにも、逃げ道を限定させるという、立地条件が整った場所だった。

「茜さんの案には驚きますわね。此处を選ぶ理由に、文句が付けられませんか」

「あはは、でもごめんね。夕日とは言え、千鶴を日焼けさせちゃうんだから」

「気にしていませんわ。この程度であれば、日焼け止めでなんとかなりますもの」

そう言つて照らされる夕日を眩しそうに手で隠しながら眺める。

「それに……。こうして眺める夕日が、こつも美しい物とわかりましたもの。今まで、周りの人達が気にしているので、ワタクシも避けていたこの場所でしたが、この様に心清々しい場所と知らずに居た事を後悔しておりますわ。ありがとうございます。」

「あはは、天気がいい日はアタシたちはよく日向ぼっこに使つてるんだよね。それにお昼御飯もお弁当だったら此处に来て食べたりもするんだ」

そう言つて茜が、腰かけているベンチに深く背もたれし、手を上にあげて、んゝつ、と背伸びをする。

「まあ、そんな事をしていらしたら、体が真っ黒になりますわよ。

まあ、茜さんは漁師の手伝いと言つて海に出ているからですか、常に焼けていますかね……」

「あはは、もうこの肌の色は天然になつちやてるんだよね。もう、千鶴みたいな真っ白にはならないと思うよ。でもさあ。あんまり日に当たらないのも悪いよ。体はお日様を浴びて元気に育つものなんだよ。植物だつてお日様が出てくれなきゃ、枯れちゃうんだよ。千鶴たちが、あんまりにも日焼けを気にし過ぎて日を浴びてないと、

あんな風に茶色になってかさかさになっちゃうかもよ」

「うっ、それは嫌ですわね……。けれど、お肌の手入れは欠かさずしておりますのよ。エステや化粧水、適度な運動に美容食品など。ワタクシ達も努力は怠っておりませんわよ」

「だね。千鶴たちの肉質や肌触りって、アタシ達と全然違うんだもんね。まあ、日焼けすると癌になりやすいってのも言われるし、浴び過ぎてもダメだもんね。どっちが良いかなんて、あんまりまだわかってないよねえ」

「そうですね。様は、その人任せがいいのではありませんか？」

「だねえ。その人が思う様に生きるのがいいかも。もし、日焼けしない方が正しい、なんて言われたら、アタシはもう海に出れないもん。そんなの嫌だし、だからと言って千鶴たちが漁に出るのが良いなんて言われて、それで楽しいと思ってくれないし」

「ええ、その通りですわ。けれど、まあ……。その……。ワタクシはちょっと心は改めましたわ。この場所が気に入りましたし、多少日焼けは傘などを利用して我慢をして、茜さん達と一緒に、お昼を……。た、食べるのもいいかと思いましたわ」

その千鶴の言葉に茜は瞳を輝かせて千鶴に接近した。

「ホントッ！ やったあーっ！ これから千鶴とも一緒に此処でお弁当食べられるんだねっ」

「た、たまにですわっ！ そんなに一緒に食べていましたら、ワタクシの肌にダメージが多くなりますものっ！ 気が向いた時ですかねっ！ いつも一緒ではありませんからっ！」

千鶴がそうツンツンと照れながら言った。

「えへへ。最近、千鶴も一緒になってくれて嬉しいなあ」

茜が千鶴を見ながらニコニコしている。

「っ！？」

その茜の笑顔が突然、一瞬固まる。

その様子を千鶴が察して、何気なく話を振る。

「それにしても、水泳部も後一人ですわね。今日で2人は、本当に

幸先が良い結果になりましたわね」

「うん、そうだね。アタシもこの作戦がこうも上手くいくとはね。もしかしたら、明日の朝で最後の一人も見つかっちゃうかもよ」

茜は携帯を手に取りながら打ち始める。

「もし明日の朝で見つかったのだしたら、この学園も変わりました物ですわ。今までの先輩方が気付いた物が、今年の一年生で少しずつ変わって行くのかもしれませんがね」

「そういう方針で、今年の一年生は、キミたん見たいな気質を増やしたんじゃない？ あんまり良くない空気だとか問題になっていて」「あの学園長も、何を目的に行動しているのか、掴みにくい処が多いですわね」

茜は携帯でメールを送ると自分のポケットに携帯をしまった。

そして千鶴に小声で話し始めた。

「準備は整ったよ。さて、一番近くの出入り口はハートちゃんが押さえてくれてるけど、残りの5か所に逃げ込まれたら、せっかくおびき寄せたのにパアだね」

「ええ、立ちまわりが重要になりますわね。最初に希美子さんが後ろから捕獲してくれれば、問題はないのですが……」

「もし、それで逃げたら、アタシとキミたんてで追い掛けるね。そして千鶴とハートちゃんは先読みして出入り口へ先回りして封鎖はお願いね」

「任せてください」

「連絡が来ましたわあ」

羽音がポケットからマナーモードにしたバイブレーションする携帯を取り出す。

そして中身を見て、それを希美子にも見せる。

「よし、手はず通りに行こう」

そう言って希美子達は階段付近の廊下から屋上の階段へ向かい、階段を上がって行く。

「頑張ってください」。わたしは、絶対に此処を死守致しますわぁ」
「無理はしないようにね。って言っても、合気道２段だものね」

「でも、追いかけたりする走るのは苦手ですわぁ。そこはあ、希美子に任せるね。希美子も、捕まえる時に抵抗されてえ、怪我しない
でね」

「うん。気を付けるよ」

そして希美子は屋上のへ辿り着き、扉を開ける。風が一瞬中へ吸い込まれる様に吹き、そして扉は閉まる。

「じゃ、行つて来るわね」

「無事に終わる事を祈っていますわぁ」

希美子は羽音と別れ、先輩達が指定した場所へ、気配を消して近寄る。

周囲を良く見渡しながら、時に角で止まってこつそりとその先を見てから、角を曲がったりしていく。

そういう機敏な行動を見てみると、この様な事はとても慣れた様子だった。

（茜先輩達があの位置だとすると……。この辺りからなら見やすいし、声も聞こえやすいわ）

そう言つて、より慎重に付近を搜索する。

カサカサッ……。

そう一瞬だけ、本当に小さいながら希美子の耳には音が聞こえた。その場所へ音も無く近寄ると、植木に体をつっ込んでいる不審人物を発見した。

その向いている矛先は、紛れもない茜達の方角だった。

小柄な体格で、希美子の身長よりかなり低いと思われる小さい女の子。だが、制服はこの学園の物である。

（大胆な盗み聞きしているわね……。あんまりこつ言つ事には慣れてない様子ね）

希美子はゆつくりと気配を殺しながら近寄り、捕獲する体制へ入ろうとする。

そして後5歩近付けばと言う処で、問題が起きた。

「そうなんだよ。あのマツチ。持った時に分かったけど、湿気ていたんだ」

そんな話し声が不審人物と希美子が居る場所へ近づいていた。

「あうっ!？」

不審人物が頭を突っ込んだ状態から元の体勢に戻る為に植林から抜け出した。

「ふう……。んっ？」

その不審人物は希美子の存在に気が付いた。

希美子との不審人物の距離感。そして希美子から感じ取った異様、そして茜達と一緒に居たのを目撃しているのを不審人物は知っている。

「ひゃあああああっ!？」

すぐに自分が捕獲される事を悟ったのか、物凄い瞬発力で希美子からダッシュで逃げだした。

「くっ!？ 逃がしましたっ! 茜先輩っ! 千鶴先輩っ!」

そう言って希美子は大声をあげた。

「第二作戦開始っ! 千鶴っ! お願いなっ!」

「ええ、ちゃんと目撃出来ましたわ。あの先なら羽音さんの処へ向かいましたわね。ワタクシは第4エリアの階段へ向かいますわ。」

そう言って茜と千鶴は別れた。

「キミたんっ! ハートちゃんの方へ向かってくストーリーカーを追いつけて続けてっ! アタシは逃げ道の方へ先回りする様に動くからっ!」

「わかりましたっ!」

希美子はストーリーカーを追って走り出した。

「うわっ!？ なんだっ! 危ないっ!」

「わううだーおーっ!」

「ひいひいひいっ! ご、ごめんなさいっ!」

ストーリーカーは物凄い勢いなのに角をほぼ直角で曲がって行く。

その先で先ほどの近づいてきた人達と接触した様だった。

（早いっ！？ それに何あのコーナーの曲がりっはっ！ 追いつけるかこれ……）

希美子はストーカーの後を必死に追いかけた。

その途中でストーカーと接触した2人と出会う。

「ごめんなさいっ！ 通りますっ！」

「わっ、またっ！」

「はふっ！ まーごっ！」

時雨と狐紫を脇を通って、希美子はストーカーの後を追う。

「此処は通さないですおおっ！」

「あうっ！？」

羽音のいつにも無い気合が入った声が聞こえて来た。

どうやらストーカーと接触した様だった。

「待つですうっ！ 勝負するですよっ！ 勝てたら通しますうっ

！」

羽音が何やら挑発しているようだが、ストーカーはそんなの聞かずに逃げ続けて行くようだった。

「だ、だめですう。 追いつけません。 羨ましい程に俊敏ですう。」

「

「ハートっ！ どっちの方に向かったっ！？」

希美子は羽音に向かって声を掛ける。

「希美子っ？ 第4エリアの方ですわぁ！」

（よし、さつき千鶴先輩がそっちを抑えるって言うてたわ。 逃げ場はないからねっ！）

希美子は第4エリアに向かって走った。

そしてストーカーの背中を見つけた。

「待てっ！ 見つけたわよっ！」

「はうっ！？」

ストーカーは希美子を見るなり、走り出した。

「掛かったねっ！」

そのストーカーの目の前を、角から突然出て来た茜が現れ、道を塞ぐように立った。

「茜先輩っ！」

「待ち伏せ成功っ！」

茜はしてやったりと、ドヤ顔をした。

茜が目の前に居るのにも関わらず、ストーカーはスピードを落とさず、突っ込んでいた。

茜とストーカーとの距離が近づく。

するとストーカーが左へ抜けようと動いた。

その行動に茜が反応し、進行方向へ受け止める様に動いた。

だが、それがフェイントだった。

左へ動いたストーカーは急に右へ抜ける様に走りを変更した。

（そんなのアタシには読めてるんだからっ！）

そのフェイントに瞬時に反応した茜はすぐに体をそちらへ持つて行った。

「っ！？」

ストーカーは先を読まれた事に急きよ察知した様に体が硬直する。そしてストーカーは勢いとは裏腹に、ガッ！と急ストップでその場に留まった。

「コミカルな動きするじゃんっ！」

茜の方に向かってこないと分かったので、茜はストーカーへ飛びついた。

だが、その飛びついたのを小柄なストーカーがひらりとかわす。

そしてその脇を抜けると、一気に駆け出した。

「しまったっ！ アレもフェイントっ！ 凄い瞬発力で抜けられたっ！」

「フットワークの軽さが異常すぎますっ！」

追いついた希美子が茜に言う。

「もぉーっ！ 林が言ったのはこれだったのぉっ！？」

茜と希美子は、逃げるストーカーの後を追って駆け出して行った。

夕日が地平線へ沈み込む頃。

茜達の鬼ごっこは20分も続けられた。

逃げようとする階段は千鶴と羽音が的確に封鎖を続け、そして茜と希美子が封鎖出来てない階段付近へは行かせない様に追いこむ。

そんな繰り返しで、中々捕獲に至らない。

疲れが見え始めた両者は、走る事をせず、迷路の様な屋上にひっそりと息をひそめ、行動していた。

そんな様子を時雨と狐紫は、しげしげと見届けていた。

「いったいなんだっていうんだ……。茜たちは新しい遊びでもしているのだろうか……」

そう時雨が狐紫に言う。

狐紫は時雨と分かりあえるジェスチャーと手話で話しを شدした。

『此処は迷路みたいになっていて面白い場所だからね』

「まあ、ホント入り組んでるよな。ボクも狐紫が一緒じゃなきゃ、ちよっと迷ってるかもしれないぞ。狐紫はこう言う処好きだよね」

『大迷宮とか大好き』

「じゃあ、今度はそこへ遊びに行こうか？」

狐紫は親指を立ててグットとサインを送った。

「よっ、お2人さん。屋上でデートですか？」

そんな2人の様子にちゃちゃを入れてくる人物が近寄って来た。

「なんだ、林じゃんか。デートってなんだよ。ボクは女だからね。その気はないからなっ！」

その時雨の言葉に、狐紫はちよとしゅんとなった。

「でさ、林たちは何やってんのさ？ この迷路みたいな場所で鬼ごっこでもしてるの？」

「鬼ごっこってよりは、けいどろかな。どろ一人、後の残りは警察みたいなの」

「へえ……。それで、その肩に担いでいるのは、警察の秘密兵器って訳？ 派手な物持ってきたねえ……」

そう言った時雨は林の肩に担がれた物を見て呆れ半分面白半分で見つめた。

林の肩に担がれた物。

それはバズーカだった。紛れもない、バズーカだった。何処をどう見ても真正銘のバズーカだった。林の身長と同じくらいの長さを、バランスを取りながら頑張つて背負っていた。

「はっはっはっ！」

林はバズーカを抱え直して決めポーズを決めて、満足そうに笑った。

今の林の格好は、この学園で二度とお見えする事はない不釣り合いな姿だった。

「それって、本物じゃないよな。何？ バレーボールみたいな打ち出すのか？」

「バラエティー番組でよくあるねえ。まあ、それに近い物だよ。でもこれは、本格的な物で、軍でもちゃんと使用されている兵器だよ」「えっ？ どういう事？ 本物って……」

「まあ、これから使うからわかるよ。大丈夫、人は死なないから。だから狐紫も戦争勃発とかボードに書かないの」

狐紫はボードに戦争勃発と書いたのを林に見せるとそれを消した。「処でさ。茜達は今の辺りにいるかな？ 茜が屋上で作戦開始するからとはメールもらったけど。此処じゃ探すのに見通しがきかないからさ」

「さあ？ 最初はギャーギャー騒いでいたけど、今は静かだよ。たまにキヤーと声が上がったら待てーと声が聞こえてくる感じでさ」「そうか……。んじゃ、しょうがないな。茜ーっ！ ちょっとこっちに来てよっ！ 林だっ！ 離したい事があるんだけどーっ！」

そう言つて辺りに聞こえる様に怒鳴った。

「ん？ 林なのおーっ！？ どこおーっ！？」

何処からともなく、茜の声が聞こえてくる。

「第4エリアの出入り口っ！ 見せたい物があるんだよ。きつと役

立つよーっ！」

「わかったあーっ！ 皆、ちょっと出入り口付近を警戒しておいてっ！ 屋上から逃がさないようにお願いねっ！」

『了解っ！』『本当にすばしっこいですわねっ！』『わかりましたあゝ。』

それぞれの声があちこちから聞こえてくる。

「こりゃ、苦戦してるな。確かに追い込むには良い場所だけど、相手にとってもこの場所の地形は有利すぎたな」

しばらくすると、林達の視界に茜が現れる。

そして茜が林の持っている物に気が付いて驚く。

「バズーカっ！？」

「ふっふっふっ。どうだ茜。これが私の考えた作戦だよ」

「どこからそんなの持ってきたの？ 本物っ？」

「学園内にある代物じゃないよなこれ……。本物って言うてたけど」
『学園テロ』

やってきた茜に時雨と狐紫が語る。

「ついさっき知り合いになった人達だね。多分もってそうだったからあるなら貸してと、ちよっと説得して貸してもらってきたんだよ。それが誰だかは相手側が秘密にしておいてくれって言っから言えないけどね」

「この学園にどんな人物がいるっていうんだよ……」

『お金持ち辺りが雇っているSPあたり？』

狐紫がボードにそう書いたのを林はありや？と顔をしかめる。

それを狐紫は見て、してやったりと顔をにやけた。

「狐紫。直感良すぎだよ。やっぱり敵わないな」

林が苦笑して呆れた。

「まあ、取り合えず出元は秘密にな。でだ。私がこれを持ってきたのは、あのチヨロチヨロと動きまわる小動物を確実に捕獲する為に持ってきたんだよ」

「これであの子を爆破つもりなの？」

茜が心配そうに言う。

「いや、此処から出るのはネットなんだよ。範囲20m以内の射程で、大きさは直径3mの物が打ち出されたネットに絡み、相手の動きを封じるんだよ」

「それをどうしてSPが持つてるんだよ」

「ん？ 防犯に使う物だからじゃないか？ 怪しい人物がいたら捕獲する時用にさ。だからこのあるかと聞いたら、もちあつたんだよ。」

林がそう言つて笑い、時雨は額に手を当てて呆れた。

「お金持ちつてわからないな」

「SPを付けるくらいのお金持ちは、色々と大変なんだよ」

茜がそう言つてから、バズーカを見て目を光らせた。

「よおっし。そんな良い物が手に入ったのなら、確実にそのバズーカの能力を発揮させよう。アタシの得意分野の追い込み漁で行こう！」

そう言つた茜は携帯を取り出すとメールを打ちだした。

「アタシ達があの子を第1エリアまで追い込むから、林はその出入り口の前で待ち伏せしてね。あ、そうだ。時雨達も手伝ってくれる？ 追い込み漁は人数が多いほど、広範囲で追い込みができるから。」

「え？ ボクはいいけど。実際にどうするんだ？ 追い込み漁って。」

そう言われた茜は携帯のメールに打ちこんだ内容と同じ事を時雨達にも説明したのだった。

日が沈み、辺りが暗くなつて闇が学園内を覆う。

その闇は屋上にいる茜達にも迫っていた。

闇の中、息をひそめ、気配を消しながら辺りをキョロキョロ見回せる、怪しい女の子がいた。

1本のおさがが廻る首に合わせて揺れて動く。

身長が低く、中学生の低学年に間違えられそうな女の子だった。

まるで仕草は小動物となんら変わりが無い様に見えた。

（いくら別の出入り口に行っても、絶対に先回りされてる……。なんて言うチームワークの良さなんだろう）

女の子は額の汗をぬぐいながら、今までの奮闘を思い出す。

最初はキヤーキヤー騒ぎながら、追いかけまわされ、走り回って逃げていたのだが、相手が自分のすばしっこさに追い付けないとわかると、今度はゲリラ戦法で、突然現れては追い掛けられ、そして逃げた先には取り囲まれる様に待ち伏せと遭遇する。

（茜先輩っ。凄い人です。わたしが憧れた先輩はやっぱ凄いです！）

そう思った後、茜の凛々しい姿を想像したのか、顔を赤らめてキヤーキヤーと小さく跳びはねた。

（でもでも……、茜先輩とどうやってらお話できるだろう。なんか茜先輩達が殺気だつてわたしを追い掛けてくるし、もうわたし嫌われちゃってるだろうな。うう、どうしてこうなっちゃったんだろう。茜先輩にちゃんと声を掛けられていれば……。わたしってばどうしてこうも臆病な性格なんだろうっ……！）

ぴょんぴょんはねていたと思うと突然項垂れる。

（どうしよう……。どうやってら茜先輩達と仲良くなれるんだろう……。それに、茜先輩はわたしの事、覚えていてくれるのかな……。ああ……。茜先輩……）

項垂れていたと思うと、涙を眼に溜めて、夜空に見えた一番星を眺めて手を合わせながら眺めている。

「くおーらあーっ！ どこだあーっ！」

女の子がその突然の大声にビクンと体を跳ねて驚く。そして周りをキョロキョロしだす。

「出て来ますよおー！ もう観念するですよおー！」

「そうですっ！ 出てきてくださいっ！」

大きな声を発して、その声の主が女の子に近寄ってきているのがわかった。

（あつちに茜先輩がいるっ！ 見つかったら大変っ！）

そう思つて声のする方から遠ざかる様に逃げ出す。

だが、いくら逃げても声が遠ざからず、近づいてくる。

「さあ、出てきなさいっ！ 抵抗はもう無駄だと知りなさいっ！」

「もう諦めたらどうなんだ？ 何もしないぞ。怖がらないででおいでっ！」

「みーっ！ みーっ！」

女の子が逃げる方向から、そんな声が聞こえて来た。

（うわっ！ 挟まれてるっ！ ど、どうしようっ……。）

四方から聞こえてくる声を聞いて、女の子がジリジリと声のしない方へと逃げていく。

（この先は出入り口だったと思う……。声がしているのは6人……。もしかしたら、今は誰もその出入り口は見張つてはいないのかもしれない……。逃げられるかもっ！）

女の子は最後の希望を託して出入り口へと走り出した。

そして植林の壁から抜け出し、出入り口への一本道が女の子の前に開かれた。

その階段の出入り口前に、何かが居た。

「残念。まんまと罠にはまったのだよ。君はね……」

ザシュッ！

「……えっ！？」

女の子は一瞬なにが起こったのかわからなかった。

何か大きな音がしたと共に、何事かとその方向へ振り向いた瞬間、目の前に何かが物凄い勢いで迫っていた。それがネットだと気が付いた時にはもう避ける暇さえ与えられなかった。

「きゃっ！ わぁーっ！」

それが女の子に命中すると、全身に覆いかぶさり、網が手足に絡みつく。

女の子はその場に尻餅をつくと、手足をバタバタと振って、身悶えている。

「なっ、なんですかこれっ！ 捕れないっ！ いやあゝっ！」
動けば動くほど網は絡みつく。

「無駄な抵抗は、後でネットを解くのに大変になるだけだぞ。もう逃げられないんだから諦めなよ。」

女の子の前に林が仁王立ちしている。

「あ、あうゝ……」

女の子は観念した様で、動くのを辞めて頂垂れた。

林達がいる場所に、茜達が急いで駆けつけて来た。

「どうっ？ うわっ！ バッチリ捕獲できてるーっ！ さっすが林っ！」

「うわっ……。本当にバズーカをしようしたんですか……」

「お怪我はありませんかあ？」

「全く……。校内にこの様な物を持ち込んで……。林さん。今回は目をつぶりますので、誰にも見つからない様に、迅速にそれを処分してください」

千鶴達も林の肩に抱えられたバズーカを見て、呆氣に取られていた。

「んー、茜の周りにこれ程の人口密度があるとは、ちょっと信じられないな」

『大漁旗』

「あははっ、確かに今日は大漁旗だよ。さてと、それじゃ網を片づけよう」

そう茜が女の子に絡まった網を慣れた手つきで外していく。

「もう逃げたりはしないよね？」

茜が網を外しながら、女の子に聞いた。

「は……。はい……。降参です……」

「それで、何故私達を付けたりしたのかも、事情を教えてもくれるよな？」

林も女の子の前にしゃがみこみ、聴いてくる。

「はい……。わかりました……」

女の子はもう何も抵抗しないとばかりに、言う事に全て賛成してくる。

「それでは、場所を移しませんか？ワタクシ、疲れてしまいましたわ」

「それじゃあ……、ティーラウンジでお茶飲みながら話を聞こうか」茜の提案に、皆が賛成の声を上げる。

「私はこれを返してくるよ。先に行つてて」

そう言つて林が先に出入り口から出て行つてしまった。

「アレつてえ、どこからもつてきたんですかねえ？」

「林先輩の事だから、バズーカだけじゃなくて、大砲やミサイルなんかも持つてそんな気がするんだけど……」

「それはあり得ますわね……。全く、持ち込み禁止覧に常識の範囲内だと新しく規則を買い込まなければいけませんわね」

千鶴達の会話に、茜達は顔を合わせて笑つたのだった。

造ろっつ！水泳部っ！　　ゝ　　5　　ゝ（後書き）

あんまり時間がないと、小説が進まない上に、アイディアばかりが浮かんできて、早く書きたいと焦るばかりです。

次回は、茜を追いかけていた女の子の素性が明らかになる。
さらに、茜達に迫る新たな影が迫る……。

そして、水泳部はどうなっていくのか。乞うご期待で。

造ろっつ！水泳部っ！　　6　　

　　6　　

「はい。取り合えず一口飲んで、落ち着こうよ」
そう言っつて茜が捕まえた女の子に言う。

「はい……」

女の子は言われる通りに自分の目の前にある紅茶を手に持ち、息を吹いて少し冷ますと一口飲んだ。

茜達は屋上から下りて、庭園が広がる中にあるティーラウンジに来ている。

ドリンク類の他にちよつとした軽食なども出る、休憩場として人気のある場所だった。

茜達はギユウギユウに詰めても6人が限度なテーブルに8人集まっつて座っつていて、窮屈そうだった。

「ちよつと飲みにくいですわね」

「紅茶を置かせてください。手が動きません」

窮屈な状況で紅茶を飲む千鶴と羽音が苦戦を強いられていた。

「あー、ちよつと僕らが抜けよう。隣のテーブルで話を聞きながらにするよ」

そう言っつて時雨が椅子を持って席を離れる。それに続いて狐紫も一緒に付いて行った。

「ごめんね」。なんかあつたら遠慮なく話しかけてくれていいからあ」

そう言っつて離れて行く時雨達に茜が言葉を送った。

「さてと、それじゃ本題に移ろっじゃないかね」

そう言っつて林が女の子と向き合っつ。

「あ、あう……」

女の子はその眼差しに怯えたのか縮こまっつてしまった。

「まあまあ、そんな緊張しなくていいよ。警察に付きだすわけでもないんだからあ」

「散々アレだけ追いかけてまわした揚句に、バズーカで撃たれたのですよ。怯えていて当然ではないですか？」

希美子の言葉に、林はあははと頭をかいて誤魔化した。

「取り合えずだ。まずは君の名前と学年とクラスを聞こう」

林は取り合えず自分の事は置いてさっさと話を進める事にした。

「え、えつと……。日ノ寺 颯姫です。……1年3組です」

女の子はか細い声でそう言った。

「ちよつとこつち聞こえなかったんだけど。なんて言ったんだ？」
時雨がそう言って首を突っ込んできた。

「ひいっ！ ひ、ひらの サツキっ！ 1年3組ですっ！」

女の子は声は所々裏返っているが、今度は確りと時雨達にも聞こえる声で言った。

「まあまあ、落ち着いてね。大丈夫だよあ」

そう言って茜が隣にいる女の子の頭を撫でた。

「は、はにう」………」

女の子はそれはそれは気持ちよさそうに顔を綻ばせていた。

「結構臆病なのですね」

「その割には大胆な犯行をしていましたよ」

「きつと人見知りなんですよあ」

気持ちよさそうに撫でられる女の子を見て、千鶴達が意見を交わしていた。

「落ち着いたかな。大丈夫だからね。何かあったらアタシが守ってあげるからねっ！」

そう言って茜が胸を叩いた。

「おいおい、被害者が加害者を守ってどうするんだっての」

茜の行動に林が笑う。

「それじゃ、サツキちゃんさ。アタシらの事を付きまっていたよ

ね。それってさあ。千鶴を追い掛けていたの？誰を追い掛けていたか教えてほしいんだけど」

「あ、あう……」

そう言われた女の子はチラリと茜を見て、すぐに顔を真っ赤にして眼をはなした。

「やっぱりアタシなんだ……」

茜はふんふんと頷いた。

「まあ、小学校と中学校では男の子よりも女の子にモテていたアタシだからね。あんまり可笑しい事じゃないんだけどね」

その言葉に希美子と羽音がええ？と声を上げた。

「茜のヤツは、この学園に入ってきた頃は今とは違って本当に男勝りでさあ。町にたむろって道の邪魔な不良達に注意して喧嘩になって、怪我ひとつ無く勝ってるくらいだったんだぞ」

「あはは……い、今はか弱い女の子なんだからね！もう喧嘩はしないんだから」

「それはどうだかねえ……。この前もゲーセンで嫌がっているのに無理やりナンパしている男のきゅ……」

「わあーっ！ダメっ！アタシだって恥ずかしかったんだからっ！でもいたしかたなくっ！」

その林の言葉を手を伸ばして口を塞ぐっ！

「え、ええっと……。そ、そうだっ！林って、なんでさっちゃんが素早いってわかってバズーカなんか思い付いたの？この子と知り合いなのか？」

そう言われた林は颯姫の顔を見る。

「んー……、一応は知り合っている……。な。まさかあの時の子とは驚いたが、私がすばしっこいのに気が付いたのは、学食の時に追いかけた時だよ」

「ああ、あの柱越しに居た方でしたのね。確かに、テーブルの間をぬってあっという間に出口へ出て行かれましたわ」

「そうだったんだあ。だから茜はさっちゃんの動きを予測できたんだ」

「あ、あのっ！ 一応スルーされ続けてる物にツツコミを入れてよろしいでしょうか？」

希美子が先ほどから何か言いたげにタイミングを謀っていたようだった。

「さっちゃんの事だね？ ま、キミと同じだよ。あはは」
「あらあら、さっちゃんさん。わたしも羽音と呼んでハートですう。良いあだ名貰えましたねえ。おめでとうございます」

羽音が何故か拍手を颯姫に送った。希美子はもう半笑いで状況に流されるのが一番だと悟ったのだった。

「は、はい！ わ、私が茜先輩からさっちゃんって……。に、にふふっ」

何故か顔を綻ばせて喜んでいる颯姫。

その言動に林はふむふむとうなづいて何かを理解したようだった。
「これは完全に茜ファンに間違いないな。あの湘南海岸公園の時以来からなんじゃないか？」

「ほへ？ 湘南海岸公園って行ったら、アタシの地元じゃん」

「ま、理由は颯姫から聞いた方が早いだろ。何故、茜を追いかけ回すか、話してごらんよ」

颯姫は質問に、一呼吸置いて話し始めた。先ほどの時雨の話で、だいぶ颯姫にも落ち着きや場馴れしたようだった。

「はい……。えっと……。4ヶ月前ですね……。12月31日です。湘南海岸公園で、私と茜先輩、それに林先輩、茜先輩のお姉さんに出会いました」

「へ？ アタシにお姉さんはいないよ。4人全員アニキだし」

「茜の従姉の浅葱さんだよ。言っているのは」

「あー、アタシのお姉ちゃんって浅葱お姉ちゃんだったか。んー、正月のお姉ちゃんと一緒に居た時でしょおー……」

そっかそっかと頭の後ろをポリポリかいていた茜の手が留まり、キッ！ と目を見開いて颯姫の事をじつと見始めた。

「あ……。ああー……っ！！！！ ああ魔法少女っ！！！！」

「は、はい……。と、当時は泣いてばかりいて、お礼も言えずに別れてしまつて……。ずっといつかお礼を言おうと思つていました。助けていただいて、ありがとうございました」

尚もへえー、ほおー、と颯姫を上から下まで見ていた茜は、いいよいいよと手を振っている。

「それで、その当時、何がありましたの？茜さんがまたナンパから助け出したとかでしょうか？」

「はい、私は6人の男の人達に囲まれ、色々と罵倒されて……。私、凄く怖かつたです……」

その時の気持ちを思い出して、颯姫の眼に涙が溜まつてきていた。う、ううっ！　そ、それで……」

上手くしゃべれなくなつて、声が裏返つてしまつている。

「えつとねえ。その状況をね。アタシと林、従姉の浅葱お姉ちゃんと衣料店の年末売りつくしの買い物の帰りだったんだ。その湘南海岸公園前を通つた時、今のさっちゃんの状況をアタシが目撃してね。それで助けに駆けつけたんだ」

そして茜が当時の状況を正確に話し始めた。

時刻は20時を周ろうとしていた。辺りは日が落ちて電気の明かりだけが頼りだった。

片瀬江ノ島駅は、年末の賑わいで人に溢れていた。浜辺でデートなのか、若い男女のカップルも至る所に見受けられる。

そんな中、場違いの一際目立つた少女が、江ノ島駅の改札口を抜けて来た。

それはルリビタキ学園に入学する前の颯姫であった。

（にふう、戦利品も大漁です、それに、今回の力作もいっぱい披露できましたし。カメコさん方々からの感想も上々でしたあ。この衣装、遊園地に使えないか聞いてみようかなあ……）

そう言つて自分の衣装をあっちこっち見る。

その颯姫の衣装は、見た目がアニメとかに出てくる魔女っ子と言

わんばかりの、白とピンクをモチーフに造られたコスプレだった。

そしてその格好を見た自分の顔がドンドン赤くなっていった。

（うっ、地元だとさすがに恥ずかしくなってきた。カメコさんならともかく、なんかこう周りの眼はやっぱり痛いですし……）

颯姫は車輪付きトランクを引っ張ってさっさとその場を立ち去る事にした。

（行き帰りに普通の服を着て良ければいいんですけど、荷物を持てるのにも限度がありますからねえ……。トランクにも戦利品を入れるスペースなどの確保だったり、持って行きたい衣装も一杯だし……。うう、仕方がたなくコスプレしながら行き気したけど、生き地獄でしたあ。次の夏コミは、私服でいけて、大漁に荷物持つて行けるように、タクシーでも使おうかなあ……。）

周りの眼を気にしない様、自分の世界や考え事をしながら、革製の靴をカツカツと音を立てながら突き進んでいく。行き帰りもこの様にしていたので、今回も何も恥ずかしくもなく、問題もなく、大丈夫だと思っていた。

人目を避けるために自然に表通りを避けて、今の夜は人が少ない湘南海岸公園の中に入って行った。

公園の中は、カップルがそこらにチラホラいる。だが、そんな彼らは自分達の世界でいっぱいなようで、通り過ぎる颯姫には眼中はないようだった。

彼らが見ているのは、海に浮かんでいる様に見える観覧車のイルミネーションだった。

（今年も江ノ島・プリランドは忙しそう。パパは今年も年越しは一緒に過ごせないのかなあ……。）

颯姫は寂しそうな顔をしていた。

（でも、仕方ないもんね。その人が幸せになるには誰かが頑張っているんだもん。私達が幸せな時には誰かが頑張ってくれている。だからその分を誰かの為に私達が頑張らないと！）

颯姫は観覧車の七色に点滅するイルミネーションを見ながら、力

ツカツと歩いて行く。

「おいっ！ おいつてそのオマエっ！」

ガシッ！

「はひっ！？」

颯姫は突然肩を掴まれて引っ張られた。その拍子に車輪付きトランクが倒れた。

ガシャンっ！ ばさあっ！

「ああーっ！ 衣装があっ！ 同人誌があっ！」

トランクのロックが外れてしまって、中から様々なコスプレ衣装や、表紙からしてお子様には見せられない同人誌まで、まき散らされてしまった。

「うっは。何これ？ 筋金入りのヲタクじゃねーか」

「マジできめえぜ。毎年この時期よく出てくるんだよな」

颯姫は慌てて散乱した自分の荷物をトランクに纏めて行く。そして、ふっと自分が6人の20代前半の男達に囲まれている事に気が付いた。

「いや。見た目も可愛いし、オタクでも中々の物じゃないか？ 俺なら、まだイケる口だぞ」

「え、えっと……。な、なんでしょう？ 一体、私に何か……」

「オマエってロリコンな上にオタクかよ。オマエきめえ……」

「調教の遣り甲斐があるってものじゃなかよ。それにエロい格好もしてくれると思うぜ。普通しない事もOKしてくれそうだしさ」

「は、はうっ！？ な、何か様なのでしょう……？」

颯姫はか細くそう男達に伝えるが聞いちゃいけない。一体自分は何故この様な事をされているのか、理解が全くできなかった。

「なあ、それってコスプレっていうんだろ。恥ずかしいヤツだな。

そんな格好して街中をあるくなんて、俺には理解できないぜ」

そう言った男がトランクから飛び出した白いナース服を引っ張り上げた。

「見てみるよこれ。やけにスカート短くね？」

「なんで胸元が空いているんだ？これ？」

「こんなので看病されるんだったら、俺絶対に入院しに行く」

色々と改造されたナース服が男達によってもみくちゃんに維持されている。

「い、いや……。うぐっ……。返してえ……。よお……。うう……」

「見てみるよ。こっちの。メイド服かこれ？」

颯姫はか細く主張する。

（私の力作達が……。ああ、そんな風にもったたらダメっ！ やめてっ！）

心の中ではそう強く主張している物の、それを言葉には出来ない。もし、言葉にしたら私はもっとひどい目に遭いそうだった。このまま、飽きてくれるまで、耐えた方がいいのかもしれない。

「マジできめえな。ヲタクってヤツはっ！ お前らマジ死んでくれない？」

男が手に持っていたナース服を颯姫に投げつける。バサツと顔に叩きつけられる。

それに続いて他の男達も手に持っていた服を投げつける。

颯姫は投げつけられた服を大事そうに自分の胸の中に抱きしめた。キキイイイイイイー……ッ！！

「な、なんだっ！？」

「おい！ アレだっ！」

その突如として鳴り響いた音に男達が一斉にそちらへ振り向いた。赤いスポーツカー、RX？8が道路をドリフトしていた。道路に黒くタイヤの後を残し、スポーツカーは、進行方向とは逆の対向の道へ入った。

「おーっ！ 派手にやってんな！」

「年越しのカウントダウンと同時にかつぱぎレースでもあるんじゃない？」

「やべえ、俺見てえな。携帯サイトに情報載ってねえかな……」

男達がわいわいとスポーツカーを見て盛り上がる中、そのスポー

ツカーは男達の前の道路に留まった。

右側の扉が開いて、中から赤毛色の長めに伸びたポニーテールの女性が出て来た。

黒の革ジャンに白いシャツ、腰にピッタリとしたジーンズ。それらの服は、体系から出るところが出て、しっかりと主張させている。顔立ちも美人で、まさに大人のカッコいいお姉さんである。

「ヒューッ！　　すげえ美人っ！」

「なあ、あの女が運転してたのか？　　いいねえ」

「俺は気の強そうな女は苦手だ……」

そして左のドアから、まだまだ学生な女子が2人出てくる。

「うえ……、こ、こわっ！　　ドリフト？　　ドリフトしたのアレって？」

林が青ざめた顔で出て来た。

「あの人達だよっ！　　お姉ちゃん！」

その女子は男達を指差してそう言った。

女子2人は、まだ一年生であつた茜と林であつた。

「ほお、女の子一人にたかつてるとはな……。　　ったく……！」

茜にお姉ちゃんと言われたその女性は、目を吊り上げて男達を睨みつけた。

彼女は茜の父方の兄の一人娘。舵守　浅葱。茜とは従姉になる。

「林、アタシ達が男達の気を引いておくから、あの子をお願いね」

「OKだ。任せて置いて」

茜と林は頷き合つと、林は茜達から離れていった。

「よお、その素敵なお嬢さん。イイ車持つてるじゃんかよ」

そう言つて一人の男が近寄つて来た。

「ありがと。　　って言つても、お袋からのお下がりなんだけどね。アレは……」

浅葱は首に掛かるポニーテールを後ろにかきあげながら、そう答えた。

「結構いいところのお嬢さんかい？」

「アタシ、ルリビタキ学園の学生でーす」

茜がそう元気よく答えた。

「ルリビタキ学園って、結構なお金持ちのお嬢様たちだけが通ってる学校だよな」

「ああ、知ってるぞ。俺はその学校のある南林間でアルバイトしているからな。めっちゃレベルの高い女子高生たちが歩いているのを見てるぜ」

「ああ、すげえーよ！ 高級車みたいな車が何台も出たり入ったりする上に、ヘリまで空を飛んでるんだぜ」

「ホントだぜ。この間なんだけどさ。門の前で女の子達を見ていたらガードマンの人が睨みつけながら迫って来たから、必死に逃げたぞ……」

「なあ、これから暇してるか？ 俺達これからホテルで年越し大会コンパティーするんだよ。何組の連中がこぞって来て、60人も人数でイベントするんだ」

「そうそう、こんな綺麗な女の子連れてきたら、パーティーも盛り上がるしさ」

「綺麗だなんて、お世辞でも嬉しいよ」

「アタシまだ未成年なんだけど……」

6人の男達が茜達を取り囲んで、尚もしつこくその合コンに誘おうと話を何度もふってくる。

「大丈夫だって。合コンに来るやつは、ネットで集った奴らだから知り合いじゃないヤツらばかりなんだよ」

「だから初めてでも大丈夫だって。面白いぞ。料理だって、酒だって飲み放題なんだぜ」

「それに、それだけでたったの5000円で楽しめるんだぜ」

「へえ……、飲み放題つても、アタイ飲まないんだけど……」

「アタシ、未成年でーす……」

茜達は冷めた感じで男達からの答えに返すだけだった。

茜が男達の脇から、先ほど颯姫が居た場所を確認する。

そこでは、林が散乱した衣装や本をトランクに詰め終わって、颯姫の手を引いて連れて行くところだった。

「ところでね。さつき女の子に絡んでたけど、アレってアタシ達みたい合コンに誘ってた訳？ そんな風にしてるようには、見えなかったんだけどなあ……」

茜がそう主張すると、男達はけらけらと笑いだした。

「ああ、アレか。あんな合コンに誘ったらわらいもんだぜ」

「そうそう。レベルだけは下げたくないよな」

「別に、結構可愛い子だったとはおもうけどさあ……」

「たんに面白い格好していたから、暇つぶしに絡んでただけだ」

茜と颯姫は落胆のため息をついた。

「……たくよあー。ウザいな。お前らはよ」

今まで普通になっていた浅葱の態度が、殺伐とした感じになってきた。

「そおーだね。酷い人達だよ……」

茜もほつぺを膨らませて、男達を睨みつけた。

「あつ？ なんだ？」

茜達の態度の豹変に、男達が負けじと睨みを利かせた態度を取り始めた。

「酷い？ あんなのが日本に居る方が酷いだろうがよ。日本人の威厳が損なわれるじゃないかよ。なあ、そうだろ？」

「そうそう。あんなキモイのがいたら、俺たちまで変に見られるっ
ての」

「え？ キモイかなあ……。レベル的には、上物でいける方だった
と思うけど……」

「っていうかさ。アイツどつかいったか？ いねーんだけど……」
それまでほつたらかしていた颯姫が居ないと言われ、男達は振り返ってみたら、もうそこには散乱した衣装も颯姫も何事も無かったかのように何もいなかった。

「まあ、いいじゃねーか。退屈のぎにはなったしさ。それよりも、

こつちの方が最重要だぜ」

「そうだな。なあ、機嫌そこねてないでさ。俺達と遊びにいこーぜ。絶対に面白いからよお」

男達のその態度に、茜は深くため息をついた。

「はあ……、もうあの子も大丈夫そうだし。お姉ちゃん、行こうよ。なんか、構ってるのも疲れてくるんだけどさ」

「そうだな。行くか。こんなバカどもを構ってる程の暇のない。舵守家の正月はノンビリしたものじゃないからな」

そう言つて2人は、男達を避けて歩き出した。

「おい、何処行くんだよ！」

「つち！ さつきからこつちがした手に出てやってんのに。このアマッ！」

「無視してんじゃねーぞ！」

そう罵声を浴びせられても2人は無視を決め込んでいるのか、何も反応無しに背を向けて車まで戻って行く。

2人の男達がこそそと話ししだした。

ニヤリと笑うと、その2人は茜達にこっそりと近づいて行った。

そして茜達の背後まで近付くと……。

「そあらっ！ 年収めのご開帳だぜっ！」

「パイターツチっ！」

そう言つて、茜のスカートをバサツとめくりあげ、浅葱の胸を後ろから鷲掴みしだした。

「やあっ！？」

「なあっ！？ て、てめえらっ！……！」

イタズラをした2人は慌てて逃げ出し、男達の中に混ざる。

「へっへー♪ やったぜ！ 結構出かったぞあの女」

「ちきしょー、羨ましいことをっ！ 後少し行動が早ければ俺だつてやれたのに」

「ナイスだぜ！ しつかりと見えた！」

「ピンクのしまパンとは、中々レアものだった！ 年収めに良い物

見られた！」

「どうだ！ 俺の實力見たか！」

男達はわいわいと盛り上がっていた。

「この野郎……。そっちが手を出したんなら、こっちは倍返ししてやるうじゃねーか」

「お？ 俺たちとやるうつての？」

「こっちは男6人だぜ。やれるもんなら、やってみろつての」

「よっしゃ、こいよ。俺も胸もんでやるぜ！」

そう言つて男達が挑発していくる。

「なめんなよ。確かにアタイだけじゃ6人は手こずるけど、茜がいれば男が10人いた処で負け無しなんだよ！」

浅葱はそう言つて、指をパキパキと鳴らす。

「茜、やっちまおうぜ！」

そう言つて浅葱は茜を見た。

その茜は、スカートをめくられた状態のまま、ずつと姿勢を変えずに肩を震わせ、握りこぶしだけを震わせていた。

「どうした茜？ 怒っているならアイツらにぶちぎれてやりな。アタシら舵守家の女に手を出した事を後悔するくらいに、怒りをぶち当ててやれ！」

茜は顔を真っ赤にして、眉を吊り上げ、目に涙を溜めて歯がみしている。

「アタシは……。もう女の子になるから……。暴力はしないって決めたんだ……。っ！」

そう茜は言葉を絞り出すようにだした。

「何言つてんだ。これは仕方ないだろ？ アイツらは一回、痛い目を見ないとダメなやつらだぞ。今回くらいは、正義と思ってやっちまおうぜ」

「でも……。でもっ！ アタシは、女の子だからっ……。！」

茜は地面をぐりぐりと踏みにじり、力を何処かにぶつけたがっている。

そう言つて、茜は男達に歩き出した。

茜が近づいてくるたびに、何か得体のしれない恐怖が男達を襲う。後ずさる者が出てくるくらいだった。

そして茜が男達の前に立った。

茜の次の行動に、皆が息をのんで見入っていた。

「……好きにしていよいよ」

そう言つて茜がぼつりといつて、立ちつくした。

「……はあ？」

その言葉に、男達が呆氣にとられる。

「さつき見たいにスカートをめくつたり、すればいいじゃない。好きならすれば？」

茜がそう言つて、男達に声をかけた。

茜のその行動に、男達は訳がわからないといった感じで見合つた。

「好きにしるつて、いったい何考えてんだよ。お前は……」

そう男の一人が茜に質問をぶつけて来た。

「言つた意味のままだよ。好きならすればいい……」

そう言うだけで、茜はその場を動かず、何もしてこない。

男達はそう言われたが、その薄気味の悪さに誰も茜に手を出そうとしない。

不穏な空気が、その場にただ流れていた。

「アタシね……」

その空気の中、茜が語りだした。

「アタシは、確かに昔は男勝りで、夏場は短パンを薄手のＴシャツを着て、男の子達と一緒に走って走り回って、泥だらけになって、上半身裸にもなって水遊びしたりもしたよ」

その茜が、自分の胸に手を持つていく。

「だけど、次第にアタシの体が女の子としての特徴を出して行くにつれて、恥ずかしいって気持ちでドンドン根付いてきた。今までは男の子達と一緒に下着を見られながら着替えられたけど、ブラジャーをつけて、パンツも女の子らしい柄になった途端、もう見

られる事がとっても恥ずかしくなっただよ」

茜は目に涙を溜めて、顔を真っ赤にして男達を見つめ出した
「さつき、アタシは見られて凄く恥ずかしかった。とっても嫌だった！ とつても怒りが込み上げて来たっ！ すごく怖かったっ！ とつても悲しかった！ 恥ずかしくて、悲しくて、怒りが込み上げて来て……怖くって……。酷いよ……。とっても酷いよ……。すごく酷いんだから……」

茜はそう語りながら一歩、男達に歩み寄った。

「こんな気持ちになっただよ。アタシ……。それで、アナタ達は楽しかったけど、こんな思いをさせた事が楽しいの？ 嬉しいの？ 喜んだの？」

一歩、近づく。それに男達は後ずさりしていく。何も男達に喋らせない。茜は、自分がいう言葉だけを相手にぶつける為に、一歩一歩、近づいて圧力をかけていく。

「今考えているのは、とても後悔してない？ 気持ち悪くない？ さつき楽しかったとは違った、楽しくない気持ち。過ちに残酷を覚えた気持ちじゃないの？」

「う、うるせっ！ 楽しいも楽しくないもっ……！」

「あの時得た気持ちの快樂と、今得ている気持ちの苦痛！ そういうやり方で楽しんで苦しんでいくやり方は幸せと思うつ？ 幸せじゃないよね？ もっと他の選択肢をとれば、苦しまなくても気持ちが良い方法はいくらでもあるんだよ」

言葉を発した男を止める為に、一歩力強く、言葉に力を入れて叩き付ける。

「簡単に変えられるやり方なんだよ。ただ、それをいつまでも変えないのは、今の自分の被ったカッコいい自分達をはがしたくないだけなんだよ。でも、それは周りから見て、カッコいいも何もない、とてもダサくて、醜い物なんだよ。それらが周りからどう見られているか、知らないふりして知っているでしょ？ 酷いものだから避けられている。無視されている。それらがとても怖い、嫌だから、

同じ人達が集まって、自分達を普通だと思いたいと現実逃避しているだけだよそれらは！」

茜は一人の男の手を掴んで握り締めた。

「自分が良い人になりたいと思ってる！ 信じてほしい！ 自分がそう慣れるって事をつ！ 今の自分はつまらないと感じている。楽しい事はできるよ！ 自分が変わる事を信じて行けば、楽しい事が絶対にあるから！ 相手を傷つけた時の自分の後悔があるなら、変わる人だからっ！ だからっ！」

「うるっせんだよっ！……！」

握られた手を思いつきり振り解いた。

「なんなんだよ！ 行き成り熱弁ふりかざしやがって！ テメーは俺らがダサいだ？ 良い人になろうだ？ ふざけた事いつてんじゃねーぞ！」

そして男が茜の胸ぐらを掴んで持ち上げる。

「俺たちの気持ちがあった事を言いやがって！ なめてんじゃねーぞっ！」

男が茜の顔にパンチを入れようと、腕を下げる。

そしてその手が一番後ろまで下がった。

「……っ！」

だが、男の手がそこで留まり、いつまでたっても茜に向かってパンチをしようとはしない。

「殴ったら、酷い……。嫌だよ……。怖いよ……！」

男が歯がみする。目は全快に見開き、茜のその表情を一瞬たりとも逃さず見ている。

「俺は……。変わりたいよ……」

男がハツとして、その発言した男に振り向く。

「変わるなら変わりたい！ だって、俺だって嫌だった！ 本当だ！ つい楽しいからやってたけど、後あとになっていつも後悔しているんだ……」

「オマエ……」

「俺ってさ。ちょっとオタク入っていて、変わったやつだろ。だから、周りから嫌な目で見られていて、いつの間にか自分を強く見せようと柄にもない事やっていて……。そして、掲示板で似たようなお前らと出会って、いつしか自分は仲間がいて、強くなっていたと思っていた。周りがどう見ていたって、こいつらがいれば強いんだと思っていた。けど……。今は急に弱いと感じている。俺らって強くない。強がっているだけの弱虫だよ」

「オマエっ！ 何言ってるんだよっ！」

「オレもつまらないな……。今までが全部……」

そう言ってもう一人も語りだした。

「これから行こうとしている大合コンも、そんなヤツらが集まってさ。楽しいって思った事がない。ただ、慣れ合って自分達が見栄張ってるだけの、自分はつえーよな張りぼてごっこじゃねーか」

「あーあ……。まともな彼女造れた試しもねーぞ……」

「なあ、オマエもそうだろ？ そのボクシング界では弱くても、俺たちの前では強い兄貴分さんよ」

「っ！？」

そう言われた男は、茜を担ぎあげていた腕をそつと下ろして、茜を下ろした。

「男がそうやって女を扱っているのは、どうかと思うぞ」

「ああ、そうだな。よくよく考えたら、俺たちって酷いことしてるよな」

「さっきの子にも、悪いことしたよな……」

「デメエーら……。さっきから何をほざいてやがる！ 誰が弱いだっ！ このオレがかっ！？」

「今のアナタは彼らよりも弱いよ」

男が茜の言葉に振り向く。

「変わろうとする気持ちを持つてる。変わろうと思って、反省している。変わろうとする事は恐怖でもある。それらに勇気を出して進んでいる。その恐怖に勝っているんだよ。アナタは、変わろうとし

てない。自分の周りにあった同じ物がなくなつて、怖くなっている。自分だけ置いて行かれて、怖くなっている。まだ走って辿り着ける場所にあるよ。彼らと同じ場所に居られる所だよ。変わるう。素直に自分の過ちを認めようよ」

そう言われて、男は髪を掻き毟った。

「アアーッ！　もとはと言えば、オマエなんだ……。オマエは何かさまなんだよっ！」

「舵守　茜だよ。女の子になろうとしている、男の子でもあった複雑な気持ちと感情を持った少女。こっちもこっちで色々と辛くて大変なんだから」

「うるせーっ！　くそっ！　なんでこんなことにっ！」

茜がその男の手を再び握る。

「さつき、ボクシングやつてるみたいだったけど。普通なら、こんな女の子に投げ飛ばされることなんて、無いよね？」

そう言った瞬間、茜が目にもとまらない早さで動き、その男がそのままの体勢で宙に浮いた。

そして横に一回転すると、そのまま同じ状態で立った。

「……はっ？」

男は今自分が起きた事が何かがわかってなかった。

「嘘だろっ……？」

「と、飛んで一回転したっ！？」

その言葉に、今自分が起きた現実を知ったようだった。男の眼は自分よりも小柄な少女を見下ろしている。

「体の使い方とか、どこが支点になるか、何処に力を入れれば軽くなるか。力が無くても、それらの応用でアタシでも、アナタの様な大きな男を投げ飛ばせるんだから」

そう言つて今度はジャンプして、その男の両膝を両足で蹴り押した。

男はその力に思いつきりのけぞつて、倒れ込んだ。

「アタシには、力は無いよ？　ただ、重力と体重を利用して、体の

支点で後ろに押されると弱い部分を押しただけ。アナタが弱い訳じゃないの。そういう部分を取り入れれば強くなるんだからね。アナタは知らない分だけ、相手がそれを自然に身に付いているか、熟知しているかで強さが変わってるだけなんだから。弱いと思っているのは、自分の気持ちだけなんだよ」

男は愕然として、先ほど見下ろしていた茜を見上げていた。
「く、くそっ！」

男は慌てて立ち上がると、何処へ走り出した。

「あ、おいっ！ 何処にいくんだよっ！」
残された男達の声を聞かず、茜に倒された男は視界から消えて行った。

「大丈夫だよ。あの人、アタシを殴らなかつたもん。あの人は、中身は善人な処がある。自分でも気付いたんだけど、それを今ある自分が認めようとしなだけ。切っ掛けがあれば、すぐにその善人が大きくなって、イイ人になってくれる。アナタ達にとってイイアニキ分になってくれるよ」

そう言っただけは、あの寂しそうな表情から一変して、ニコツと男達にいつもの笑顔を送った。

「……っ！」

男達の顔がぽつと赤くなった。

「ご、ごめんなさい！ 色々……」

「お、俺なんてパンツをつ！ ごめんなさいっ！」

「あ、ああ、あのっ！ そちらのお姉さんも、ごめんなさいっ！」

男達は行き成りそうペコペコと頭を下げて誤りだした。

「いいよあー。ちゃんと反省してるなら、許してあげるよ。」

男達にはその茜の許しに、女神様の様に手を合わせて拝めた。

「後、アタシの……忘れてくれる……ね？」

茜のその笑顔に闇が覆う。

男達は邪神の登場に、膝磨についてお許しを願った。

「まあ、もうこんなインパクトある出来事は、一生忘れないだろう

ね。いいよもう。だけど、アタシの辱め分、良い事しなかったら頭蹴り飛ばしても記憶飛ばさせてあげるんだからね！」

「はいっ！ もちろん良い事いたしますっ！」

「オレっ！ 赤い募金してくるっ！」

「俺、今そこにあつたゴミ拾いましたっ！ これからはボランティアでゴミ拾いをしていこうとおもいますっ！」

「うん、頑張つてね」 ほら、あの人を追って行ってあげて。一人になると塞ぎこみがちになるから、皆で支えてあげてね」

「はいっ！ では、失礼いたしますっ！」

男達は茜達にお辞儀すると、走り去って行った男と同じ方向へ走り出して行った。

茜はその光景を最後まで見届けると、一息吐きだした。

「はぁー……。き、緊張したっ！」

茜は空を見上げて、スウーと深呼吸した。

その後ろから、浅葱が勢いよくエルボーしてきた。茜が吸った息をグボツ！ と吐き出した。

「なんだよ茜っ！ オマエっていつからそんな聖徳太子みたいなことと言える様になつたんだよっ！ すげーなっ！」

「アツ、ぐふっ！ げほっ！ も、もうー！ アタシだつて初めてだったんだよ。ただ、暴力は振るわないって決めたし……。このままお姉ちゃんにぶつ飛ばされるのを見て、怒りの気持ちを抑えられと思うんだけど、多分ムリそうだったし……。残った選択しは、説得して見せるだったんだもん。アタシの気持ちを全部ぶち当ててやるうって思つて、言っただけなんだけど。」

そんな茜達の遣り取りに、茂みに隠れていた林が颯姫と一緒に出てくる。

「いーんじゃないのー。茜、結構カツコよかったよ」

「あ、林。その子、大丈夫だった？」

そう言つて、茜が颯姫に近寄ってくる。

「ああ、怪我も何処にもなかったよ。ただ、衣服がちょっと汚れた

だけ」

「そつかあ。ごめんね。あの人達から、アナタに誤る事させずにいかせちゃったけど。あの人はちゃんと反省したからね。アナタにした酷い事した分を、今度は周りに善良を尽くしてくれるから、それで許してあげてね」

そう言つて茜は颯姫の頭を撫でてあげる。

「うつ、ぐすつ！ ふ、ふええーんっ！……！！！」

颯姫は突然泣き出して、その場に座り込んでしまった。

「あ、ありゃ？ やっぱどつか怪我してんじゃないの？ 外傷は無くても内部損傷とかで？」

「どつか痛い処あるか？ 病院につれて行ってやるぞ？」

「ひつく！ い、いたく……ないっ！ ふえーんっ！……！！！」

「さつきいいいいいいい……っ！……！！！！！」

突然そんな大声を上げながら、走ってくる大人な男性がいた。

「貴様らあーん……っ！ 颯姫から離れるおおおっ！」

そう言つてその勢いのまま、浅葱に突っ込んできた。

「なんだこのおっさんは？」

浅葱はひよいと横に避けると、足を付きだした。

「あっ！？」

男は足を取られ、宙を飛ぶ。

「よつとっ！」

浅葱はその男の襟を掴むと、そのままグイッと引つ張った。ぐわんっ！ と男の体が前に持ってかれて、そして尻餅状態でその場に座らされた。

「っ！？ えっ！？ あ、颯姫っ！……！！！」

男は困惑した中、泣いている颯姫を見ると、飛びついて抱きしめる。

「ふええーんっ！ パパあーっ！ パパあーっ！……！！！」

「なんだ、お父さんだったのか。てつきり、俺もお説教してくださいんだが……」
「というMなヤツ登場かという面白展開を期待していたんだが……」

「はーやーしいー……？」

「冗談だつて。処で、お父さん？ どうして此処に？」

その林の質問に、颯姫を守る様に盾になりながらも律義に答えてくれる。

「帰宅中のアルバイトの従業員が、私の娘が男どもに身ぐるみ剥がされていると連絡があつて、急いできたんだ！ もう警察にも連絡は入れてあるぞっ！ お前らは逃げられないぞっ！ 捕まつて死刑になつてしまえっ！」

「身ぐるみ剥がされてたっけ？」

「衣装は散乱していたからじゃないか？ それよりも、お父さん。そいつらつて男だよね？ 私達、女の子なんですけど？」

「……え？ 女の子……。だな……」

「ふえうー……。私を助けてくれた人……」

颯姫がその後ろから抱き付きながら答えた。

「そ、そうか。なら、男は何処だっ！ 私の可愛い娘から、純白の乙女を奪つたヤツらわあ！」

颯姫のお父さんが目を血走らせて周囲を見た。

「その人達なら、アタシが懲らしめて、イイ人にして返したよ。しっかりと仇はとつたから、大丈夫！ お父さんも恨みつこなしでね。恨みが恨みを産んじやうループは、幸せじゃないよ。」

ガルルルッ！ と唸っていた颯姫のお父さんは、茜のその言葉に唸り声を辞めて、大人しくなつていった。

「……ごほん。失礼した。娘を助けていただいたんだね。ありがとう。君たちは娘の恩人だっ！ ホントにありがとう！」

そう言つて一人ずつ、握手をしていく。

ウーーーーーッ！！！！！！

その時、遠くからパトカーのサイレンの音が聞こえて来た。

「あ、パトカー来た見たいだね」

「……やっべ！ あそこ駐車禁止区域じゃねーかつ！ 見られたら罰金取られるっ！」

「ドリフトもしてるから、危険運転としても摘発されそうだけど」
「なんだとっ！ やっべえーっ！ 茜、林っ！ 車に乗り込めっ！
すぐに此処から離れるぞっ！ ただでさえ余計な出費があるって
のに、そんなお金取られたら生活マジやべえっ！」

「ええっ！ 浅葱お姉ちゃんからお年玉貰えなくなっちゃうーっ
！！！！！」

「ありやりや。それじゃ、私達行きますね。その子に後は事情
きいてください。全部、私と一緒に見てますから。私達の事は、家
でモチ食ったおじいちゃんが急患で担ぎ込まれたので、失礼いたし
ますと言って置いてください」

三人はそう言って、てんやわんやとスポーツカーに乗り込んで、
パトカーが見える前に颯爽とその場を後にしたのだった。

造ろっつ！水泳部っ！　　ゝ　　6　　ゝ（後書き）

今回は書きなおしがいっぱいありました。投稿が遅れた事申し訳ありません。

結構迷ったのが、茜達と男たちのバトルです。

最初は、茜がいきなり男たちに蹴りいれていたり、浅葱がパンチ入れていました。

だが、ありきたり……。それに、女の子になるといった茜が、お正月になるまでに、そう蹴りいれたりする女の子だろうかと思っていた。

そして次に書いたのが、男たちに蹴りを入れられながらも、颯姫を守り続ける茜。

って書いていて、私って暴力系無理だなあと思って辞めました。ただでさえ、男たちの罵倒はどうしたらいいだろうと悩んだってのに、どうするかひねりにひねって、聖徳太子になりました。w

まあ、水泳部の勧誘にあんな熱弁ふるってるんですから、ここから進歩していったんだと言う事にもなるので、結構いい具合にひねり出せたと思います。

今回は面白要素じゃなく、人生論みたいな感じになりましたね……。ま、それが青春ですよ。っていうか、茜は普通に送る人の何倍もの濃い青春送ってるなあ……。まあ、林もなんですけどね。

それが、彼女たちの物語を書く面白みであり、読み応えなんですよね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2867v/>

すいえいぶっ！

2011年9月15日03時31分発行